
木花開耶物語

crow

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木花開耶物語

【Nコード】

N4806U

【作者名】

crow

【あらすじ】

主人公・木花このはな 開耶さくやは南海市立南海高等学校に通う、平凡な日常に飽きることに飽きた高校二年生。そんな彼の数少ない友人兼親友・神屋かみや 春樹はるき、と同じ中学出身で学年一の天才・櫛灘くしなだ 夏澄かすみと、幼稚園の頃から開耶とずっと同じクラスの幼馴染・豊玉とよたま 美七みなの仲良し四人組が送る学園コメディ……では無く、日常を逸脱したSF恋愛・友情物語。

*dNovelsでも連載中です。

木花開耶物語1話（前書き）

物語の内容としては、あらすじの通りです。

最初の方の話だけでは、どの辺がファンタジーなのかサッパリかもしれません、

（全体的に見た）後半の物語展開はかなりファンタジーになっています。

根気強く読んで頂けると幸いです。

木花開耶物語1話

PROLOGUE

二XX六年 五月某日

僕は夢を見た。

それは考えれば考える程、不思議な夢だった。
行った事も無い。

ましてや、見た事も無い。

そんな場所で。

一人の少女が、僕を眠りから覚ます。

しかも、その子は超可愛い。

でも、僕はその子の事も知らない。

名前も。

歳も。

どこの学校の生徒かも。

どうして僕を起こすのかも。

どうして夢の僕が起きる直前で現実の僕が覚めてしまうのかさえも。

だから僕は夢を見た。

高校二年の春を逃避するような。

今までの僕の人生を逃避するような。

でも僕は夢を見た。

何もかもが本当の世界。

と、何もかもが嘘の世界を。

けれど夢は続いた。

二XX六年 六月六日 月曜日

この日も変わらぬ朝を確かに迎えていた。

この不思議満載の夢も、現実の生活も寸分変わり無く廻っていた。大きな変化が全く無い、小さな街に住む、小さな自分。

中の下の高校に入学して一年と二カ月が経った。

新しい環境で、新しい出会いが在り、新しい友人が出来た。

でもそれは最初だけ。

今はもう、新しい環境が、新しい友人が、日常となってしまった。そこには期待も、希望も、楽しみも、嬉しさも、悲しみも無い。在るのは、ただの現実。

変わる事の無い、変える事の出来ない現実が、ただただ目の前に拡がっているだけ。

平平凡凡、それも悪くない。

だけど僕は夢を見た。

いつの日か自分が、誰かに認められる大きな存在になる事を。いつの間にか自分が、大きな存在になっている事を。

そして、夢に出てくる少女に出会う事を。

それから時は経ち、放課後の校舎

「よう、サク。まーた、夢の少女でも探してんのか？」

「うん、まあ、そんなところ」

「程々にしけよ、もう外部とか始まつてるし」

「分かってるよ。帰宅部はさっさと帰りますよ」

あつそ、と手を振り消えていく友人その一。

「さて、っと。僕も帰りますか……」

鞆を肩にかけ、教室を去った。

学校を出ると、目の前は駅へと続く大通り。

いつも通りの賑わいを見せていた。

その道の端を無愛想に抜け、百数十メートル進んだ所に在る小道

へと逸れる。

地元ならではの抜け道ならぬ裏道、もとい帰り道。

因みに、家から学校までは徒歩十分くらい。

その道中に娯楽施設なんて勿論の事、コンビニさえも無い。

強いて何か在るとすれば、それは住宅街跡くらい。

意外な事に、そこは隠れ幽霊スポットらしい。

しかし、だからと言って人がたくさん集まっている訳でも無い。

むしろ、誰も寄りつかない程。

そして残念（？）な事に、僕の通学路はそこを直進する。

と言うか、直進しないと十分で学校には決して着かない。

迂回すると、実に三十分はかかるらしい。

何せこの住宅街跡、広さでも有名なのだ。

「と、言う訳で住宅街跡……改めて見ると幽霊が出てもおかしく無さそう……だな」

何故、此処が住宅街から住宅街跡に成ったかの経緯は諸説が在るらしい。

殺人鬼が住人を殺して回ったとか、此処に住んだ人間は呪われるとか。

そんな幼稚なものから、専門家の有力な説とかも在るらしい。

何にせよ、僕が生まれる以前に起きた事は僕の預かり知らぬ事だから、どうしようもない。

そもそも、どうにかしようなんてさらさら思っちゃいない。

この住宅街跡のせいでこの街が嫌われてる訳でも無いし、壊す必要性が無い。

本気でそう思っていた。

彼女と出会うまでは……。

「うつ……！？」

何が起きたかを理解するまで、相当な時間を要した。

現在の自分の状態。

目の前の人物。

そして自分がその人物に何をされているのか。

「つぶはあ……って、いきなり何を考えてるんですか!？」

「ご、ごめんなさい、佐久夜様。あつ、間違えました。すみませんでした、開^{さく}耶^や様」

それが夢に現れる少女との出会いであり、僕のファーストキスを奪われた一部始終だった。

「有り触れた今までの日常」

二××六年六月六日 月曜日 朝

佐久夜様？ 佐久夜様！

（誰かが僕を呼んで……いる？）

重い目蓋を開くと、視界に声の主が映る。

（女性、いや少女？）

白いドレスのような衣服を纏った、顔に幼さを感じる少女が傍らに居た。

起きて下さい、佐久夜様。もう、佐久夜様は朝が弱いんですから……

頬を赤く、そして脹らまして彼女は言う。しかしその顔には笑みが浮かんでいた。

（あれ？ 僕はもう起きてるんだけど……？）

あつ！ もうこんな時間。佐久夜様、もう起きないと本日は大事な……

そこで彼女の声は途切れてしまう。

ジリジリジリジリッ！

小さな部屋に鳴り響く、目覚まし時計の音。それが僕を夢から現実へと引き戻す鍵。

（いや、そんな大そうな物じゃないか）

目覚ましのスイッチを押し、窓から差す朝日を浴びながら伸びをする。

「さて、つと。今日もいつも通りの一日の始まりだ」

僕・木花^{このはな} 開耶^{ひへや}の日常、それはとても普遍的で不変。

朝、起きたら学校に登校。昼間は勉強し、夕方には帰宅。夜間は自宅で食事と宿題と睡眠。休日は特に誘いがなければ、自宅待機。

そんなどこにでも在る日常。日々に大きな変化は無い。仮に日本規模の事件が起きたからと言って、僕の日常が一変する訳でも無い。そういう意味では、世界規模の重大事件も僕にとっては何の関係も無い出来事、で片付いてしまふのかもしれない。

そんな詰まらない事を考える通学路。ここもまた不変で在り、普遍的な大通りだ。そしてそこを歩く僕や、他の人も同じくらい普遍で不変。

例えば……目も合わそうとしないサラリーマンとか、駅に向かつて急ぎ足のOLとか、犬と散歩している老人夫婦とか、ジョギングしている小太りのオッサンとか、同じ学校のどこにでも居る真面目そうな生徒とか。そしてその誰もが、自分の事で精一杯で他人が見えていない事とか。

詰まる所、僕が言いたい事は、此処に挨拶なんてコミュニケーション方法は存在しない、という事。結局、こういう小さな事の積み重ねがこの詰まらない現状を意図せず勝手に創ってしまったという状況。こうして、世界は新しさを求めなくなった。今まで通りで均衡がとれているから、これ以上に何かを変えたり、取り入れたりする必要がないから。

もう、詰まらないと思う事も詰まらないし、この生活に飽きる事にも飽きた。

（何か新しい事が起きないかなあ……）

でも、希望は抱き続ける。それが日々を生き抜く糧になると信じているから。いや、正確には僕の妄想という希望だけど……。

大通りを百数十メートル進むと、左側に無駄に大きい建物が見え

てくる。それが僕の通う高校・南海市立南海高等学校だ。確か今年が創立三十周年らしい、由緒ある進学校だ。尤も十数年前に起きた大不況のせいで、就職率も上々に成ってきてるらしいけど。

上の空気に校門を潜ると、背後からよく知る人物の声が聞こえてきた。

「よう、サク」

「あつ、ハル。今、来たところ？」

「まあ、そんな感じ」

彼は去年から同じクラスで、今は隣の席の友人・神屋 春樹^{かみや はるき}。愛称はハル（因みにサクとは僕の愛称である）。スポーツ推薦でこの学校に入学したせいか、勉強に関しては常に学年最下位を争っている（？）。本人としては毎回のテストを真剣に受けてのその点数なのが、玉にと言うか常に傷。

（まあ、僕も他人の事を言えた義理ではないけどね……）

彼とは大体この辺りで会って、教室まで一緒に向かうのが日常。

「そついや、英語の宿題やったか？」

「いいや、クツシーに見せて貰おうかと思って……やって無いけど」

「だよな。やっぱ、頼れるのはクツシーだけだよな」

「じゃあ、さつさと教室に行って写しますか」

「だな」

今、話題が上がったクツシーとは同じクラスにして学年一の天才・^{くしなだ かすみ} 榎灘 夏澄の事だ。彼女とはハルの紹介で去年の五月頃に知り合った。当時の彼女は、入学当初からその頭角を現していたルーキーの一人で皆の注目と期待の的だった。現に今ではテニス部の副部長と、保健委員の副委員長と、クラス代表を教師から任され、噂では次期生徒会長の候補らしい。

それはさておき、教室が見えてきた。するとハルが唐突に問いかけてきた。

「なあ、サクは何か部活とかやらないのか？」

「え、急にどうしたんだよ？」

「いや、お前って運動神経、結構良いのに何で部活入ってねーの
なってるだけ」

「そ、そんな事ないよ」

「そうか？ まあ、バスケ部ならいつでも歓迎するからな」

「はは、ありがとう」

ハルは勉強が出来ない代わりに勘が妙に鋭い。人の考えている事を見抜く、まではいかないけど他人の行動しつかりと見ているとは思う。実際問題、ハルの言ってる事が全く間違ってる訳じゃないのが事実だからだ。尤も、まだ他の人には気づかれて無いみたいだから充分に隠し通せるとは思っている。

「おっはよう、皆の衆。宿題は^{はかど}捗ってるか？」

ドアを開くと共にハルが教室中の生徒に呼び掛ける。僕はその後ろを付いて中に入る。

「よう、ハル&サク。ニシー達がもう写し終わったらしいからそっち行けよ」

クツシーの席に群がる生徒その一が、教室の中央付近に座るニシーの席を指さしながら言う。

「バカ、野郎の字なんて下手過ぎて解読不可だってーの」

「もう、それは失礼過ぎでしょ、ハル」

そう言っ、クツシー本人が僕達の前に現れる。

「おはよ、クツシー。悪いんだけど、僕もプリント写させてもらっ
よ」

「うん、別にいいよ」

「俺も！」

「アンタはいつもでしょ？」

教室内に爆笑が生まれる。それに男女差は無く、みんなが笑顔を見せている。これが僕達のクラスの、お決まりのスタートみたいに定着するのには新学期からそう時間はかからなかった。正直、クラス替えの時は少し心配な気持ちも在ったが、それももう何処かに行ってしまった。だって僕達は今、クラスを中心なんだから。

「問いの変数が三であると仮定し、解を求める。ここでは先週やった公式を利用する」

月曜の四時限目の数学。居眠り常習犯は始まって五分と経たずに落ちた。何せこの授業、教師が永遠と教科書の問題を前で時間の限り解き続けるだけだからだ。そりゃ、居眠り常習犯で無くて眠くなる、とはこのクラスの生徒の中では暗黙の了解。寝てしまった仲間は、教師に見つからないようにみんなでフオーし合う団結力までこの二カ月で身に付けた。

（あと……五分。いや、三分か）

時計を確認した僕が三本の指を立て、後ろに合図を送る。それを見て後ろの席の奴等は最後の底力を発揮する。

しかし、僕はもうそんな有り触れたスリルは正直なところ飽き始めていた。もつと新しい何かが起きないか、と最近では窓の外を見る事が多くなった。

キンコンカンコンコン

「おつ、もうこんな時間か。よし、この問題は次回の授業に答え合わせするから各自、解いてくるように。では解散」

そう言い残し、数学教師が教室を出る。そして真横の廊下を歩いて行き、姿が見えなくなると同時に教室中から大きな溜め息が漏れる。

「はぁ、この授業が一番ドキドキするんだよね」

「うん、分かる。いつ気づかれるかって思うと目が合うだけでビクビクしちゃうもん」

「それにしても……いつまで寝てるんだろ、神屋くん」

僕がこのスリルに飽き始めた最大の理由は、居眠り常習犯が常に隣に居るからだ。こういうのは偶に発生するから楽しい訳で、いつも発生してたらそりゃ免疫が出来ますって。

「いいよ、ハルは勝手に起きて気づいたら弁当、食べてるから」

「あつ、クッシー。今日はどうする？」

「ハルがこんな状態だから……サク、こっちで食べる？」

「うん、そうさせてもらうよ」

今は四時限目が終わって昼休み。僕は弁当持参組だから教室で昼食を済ます。でも食べる場所は様々で、いつもは僕とハルの席で食べるのだけれど、偶に昼休みになってもハルが寝ている時が在るので、そういう時はクツシーと玉ちゃんの席に行くのだ。

「遅くなってごめんね、玉ちゃん」

「い、いえ。私も今、支度が済んだところなので気にしないでください、木花君」

この玉ちゃんこと豊玉^{とよたま} 美七^{みな}は僕の幼馴染だ。幼稚園、小学校、

中学校、高校と全て僕と同じクラスという、ある意味で特別な幼馴染だ。しかしながら彼女について僕が知る事は結構、少なかったりする。弓道部に所属していて、その腕前は副部長になる程、と言う事くらいしか最近では知らない。あと強いて言えば、前髪が目隠れるほど伸ばしているのは昔からと言う事かな……？

「じゃ、三人揃ったし昼食にしますか」

いただきます

そう交わして、各々の弁当箱を開ける。

「あーっ、玉ちゃんのタコさんウィンナー、可愛い！！」

「あ、ありがとうございます。……お一つどうですか？」

「いいの？ わーい、やったー……んー、美味しい」

と、クツシーが絶賛の声を上げる。それを聞いたハルがビクリして起きる。それが可笑しくて僕達は笑う。最終的には当人達も笑い出す。

とても微笑ましく有り触れた風景だった。こんな風にいつまでも、どこまでも笑い合える日々が続くと信じて疑わなかった。いや、むしろこの変わらない日々が当たり前前に成り過ぎて、他の未来なんて想像すらできなかった。

明日から急に誰かが居なくなる。

日本が戦争を始める。

地球の公転と自転が止まる。

そんなのは非現実的という一言で片付けられてしまう程、僕達の世界は平和で平凡で不変で普遍的だった。しかしこの世界の誰もが心の奥深くで刺激を求めているに違いなかった。ただ表に出さないだけで、声に出さないだけで、誰にも打ち明けないだけ。なぜなら此処が日本だからだ。

出る杭は打たれる

正に日本という国を説明するのにピッタリな言葉だ。この国の国民はきつと無意識下で、誰かに合わせている。と言うのも、そうする方が楽に生きていけると知っているからだ。人間、誰しも苦労なんてしないでいいのなら、したくないと思っている。若い頃の苦労は買ってでも……、という言葉も在るが、それは若かりし頃を振り返って思う事で、僕達にはまだ早過ぎる。だって僕等はまだ後悔を知らないのだから。

「サク、サク？ おゝい、大丈夫か？」

「……えっ、ハル？ どうしたの？」

「どうしたの、じゃねえーよ。何か今日は妙にボケっとしてるぞ」

「……そ、そうかな」

「何か悩んでるなら、俺にバシバシ相談しろよ。俺は恋愛の神様だからな」

「ははは……」

（僕の悩みは恋限定なのか……）

苦笑いを浮かべ、弁当に視線を落とす。そして黙々と箸を進めた。そんな僕の周りにはやっと起きたハルも揃い、いつものメンバー（主にハルとクツシー）が他愛も無い話を絶え間なく続けた。その話を聞いて、笑って、怒って、止めて、また笑う、そうして昼休みは過ぎていった。

キーン、コーン、カーン、コーン

「じゃあ、今日はここまで。後は各自、解散で」

教師はそう言い残し、足早に教室を去っていく。まあ、特に目新しい事でも無い。

「はあ、やっと終わった」

「そうね。後は部活、出てー、家に帰ってー、テレビ見ながら宿題やってー……」

「ねえ、今日の放課後、街に行かない？」

「モチ！ 私も誘おうと思ってたんだあ。新しく出来た……」

「明日って何か在る？」

「あー、そういや日本史が小テストとか言ってたか？ アイツ、テストばかりで……」

そして、こんな声が飛び交う教室も至って普通。むしろ、みんないつも同じ事の繰り返しで飽きないのか不思議な程だ。

「おい、サク。掃除、行くぞー」

ふと横を見ると、隣に居たはずのハルが廊下から僕を呼んでいた。まあこれも特に珍しい事ではなかった。

ハルは知っての通り勉強は全くダメだ。その代わり、と言っては何だがスポーツ、特にバスケットに関しては右に出る者が居ない程の実力を持っている。そんな彼の学校生活での楽しみは放課後の部活だ。そしてその大好きな部活に行く為には、沢山の（ハルにとっての）障害が在る。まずは午前の授業。次に午後の授業。最後に掃除だ。

この南海高校は他の高校と比べて綺麗な部類だが、その裏には生徒や教師の弛まぬ努力が在るのだ。まずは毎日の清掃。次に厳しいゴミの分別方法。それと廊下の至る所に設置されたゴミ箱の数。そして最後に定期的な大掃除。これはもう伝統であり、この高校では当たり前になっている。だからこの高校では掃除は如何なる理由でもサボる事は出来ない。そして何よりも掃除は優先されるのだ。

「はいはい、今、行くよ」

そして僕はその伝統に没々従う。いや、従わざるを得ないのだった。郷に入っては……ってよく言うけれど、正にその通りだと入学

当初から（口には出さないけど）僕は常々、思っている。

しかしながら、愚痴を零したところで、言葉に出さない限り誰にも伝わらないし、現状が一変する訳でも無い。それに僕達の掃除場所は他と比べればわりと良い方だ。何って言ったって僕達の掃除場所は、ほぼ全ての学校が進入禁止エリアとする屋上なのだから。

「……それにしても、俺達よくまた同じクラスになれたよな？」

屋上へ向かう道中、唐突にハルがそんな言葉を漏らした。

「何、今さら言ってるの？ それは普通クラスが発表された時に言うでしょ？」

と、速攻でツッコミを入れるクッシー。その隣を静かに付いて行く玉ちゃんを横目に、僕はハルと並ぶ。

「ホントに急にどうしたんだよ？」

「いやさ、こうやって四人で楽しく過ごせるのっていつまでも続かねえーのかなあ……ってさ」

ハルの予想外な発言に一同は言葉を失った。それ以前の問題で、当の本人がいつもと寸分違わぬ調子で、発言していた事に僕達は驚きを隠せなかった。

僕の中でハルと言う人物は、常日頃から寝ているか、遊んでいるか、バスケットしているか、バスケットの事を考えてる人間だった。それが今、突拍子も無く覆ろうとしている。それと同時に僕の中でこの現状を受け入れようとしないう自分が居た。

「えーっと、ハル……酔ってる？」

ハルの予想外な発言に対する僕達の第一声はクッシーによって代弁された。

「酔ってねえーよ！ マジだよ、大マジだよ！」

その反論をクッシーが「はいはい」と軽く受け流し、この話は終わった。

しかし本当にこんな単純に終わって良いのだろうか、という気が少しした。だけど、言葉で表せない感情を伝える手段も勇気も僕には

無かった。だから僕は沈黙を貫き、いつもと変わらない日々を送った。それが僕に出来る唯一最善の行動だと、何故か自信が持てたから。と言うのは建前で、実際は単純に面倒臭かったからだ。やっぱり僕も後悔を知らず、楽をして生きていきたい人間の一人だった。

屋上、南館の階段を上り切った先に在る、薄い扉と嚴重な鍵で隔たれた空間。そこがどんな所か知っているのは校内でも数少ない。しかし、そんなのは知っていても何の得にもならないのが事実で在り、現実だ。だから僕達はこの掃除場所が決定した時、面倒な場所を押し付けられた、と即座に思った。

僕達のクラスが在るのは北館三階。屋上が在るのは南館四階の先。言葉にすれば近く感じるかもしれないけれど、実際はすごく遠い。まず、屋上の鍵を南館一階の職員室に取りに行かないといけない事。次に、一階と三階に渡り廊下が無い事。

最後に、北館から南館に行く為には、東館か西館を通らなければいけない事。

以上の事から、屋上までの道のりがすごく遠い事はよく分かっただろう。因みに徒歩約十五分で着く。

「はあ、やっと着いたぜ」

溜め息交じりでハルが漏らす。流石のスポーツマン（僕以外は全員運動部）でもこの距離は応えるらしい。みんなのテンションが歩き始めと比べて、落ちているのは言うまでも無く明らかだった。

「ふう、じゃあ、さっさと終わらせますか」

僕はみんなを元気づける意味も含めて、前向きな発言をした。

「それも、そうだな。……んじゃ、クツシー、鍵」

それに疲れの混じった声でハルが応じる。

「うん……っと、開いたよ」

その言葉を合図に、ハルがドアノブを回し押し開ける。すると外の光が差し込み、僕達を赤く照らした。そう、もう空は夕焼け空だ

った。

「わー、キレイな夕焼け」

屋上へと一番に出たクツシーが感嘆の声を上げる。その後が続いて僕達も屋上へと出る。そんな僕等の目の前には、夕焼けに照らされた街の景色が静かに広がっていた。

「うわあ…… すごい…… キレイだ」

「はい、とても綺麗…… です」

「うん。 凄く綺麗だ」

綺麗

その言葉以外でこの美しさをどう表現すれば良いか、僕には分からなかった。 いや、きっとこの場の誰もがこの言葉以上の言葉は知らなかっただろう。 僕等は掃除の間、気づけば景色に見惚れていた。そのせいか、いつもより掃除の終わるのが遅れてしまった。

「あーっ！ もうこんな時間！」

携帯を見たクツシーが驚きの声を発したのは、掃除が終わって間も無くの事だった。

「どうしたんだよ、クツシー？」

ハルが不思議そうに尋ねる。そこで僕と玉ちゃんはクツシーの言った言葉の意味を理解した。

「どうしたって、ハル…… だーい好きな部活の始まる時間は何時何分？」

意味深な口調でクツシーがハルに問い返す。

「は？ バスケ部は毎日、四時半から練習開始だぜ……」

ここまでヒントを出しても気づかないハルもハルだが、素直に教えてあげないクツシーもクツシーなのかもしれない。 要するにどっちも悪いでしょ、って訳。

しかしながら、その現状を分かりつつも教えない僕も僕だし、その隣でおろおろしている玉ちゃんも…… まあ、玉ちゃんかな。 要するにみんな悪いでしょ、って訳。

「で、結局のところ何が言いたんだよ？」

ハルが改まった口調でクッシーに問い返す。

「はい」

そう言つて彼女は右手に持っていた携帯を彼に見せる。

十六時四十五分

正確にはアルファベットのPとMの後に続いて四桁の数字が並んでいたのだが、細かい事は気にしない。

「えっ、ええええええっ！」

漸く事の重大性を理解したハルが驚愕の声を上げる。その声は夏の訪れを予期させる、自棄に眩しい夕焼け空の下を不様に木霊した。

「……はあ」

ふと、僕はやれやれと言う風に溜め息を吐いた。と言うのも、さつきからクッシーは何故か誇らし気に胸を張つてどこか遠くを眺めているし、玉ちゃんはさつきよりもおろおろして慌てふためいてるし、ハルは暴走して屋上内をさつきからずつと走り回つてゐるからだ。

この收拾のつきそうも無い状況に、軽く目眩がしてきた。

（それにしても、ホントにどうしたものか……）

このメンバーとの付き合いも今年で一年とちよつとに成るけど、こんな事態に陥つたのは初めてだった。まず問題視する点として、ツツコミ兼まとめ役のクッシーが行動不能（？）に成っている事だ。いつもなら暴走したハルを止めるのは僕では無く、付き合いの長いクッシーの役割なのだ。しかし現在もハルの暴走は継続していて、クッシーはそれを知つて居ながらも、どこかを眺めるように空を見ているばかりだ。玉ちゃんはこういう時は大抵おろおろしているから、まあいつも通りと言えば、いつも通りだ。けれど、こういう不祥事には責めて冷静に判断する側について貰えると有り難いのだが……まあ、無理だろう。

（さて、優先順位を明確にしよう。まずはクッシーの復活、次にハルの停止、最後に玉ちゃんの鎮静、と言つたところか……？）

考えは何となくまとまったが、具体的に何をすればいいのかはさっぱり分らない。とりあえず、話し合いで解決できればそれが一番だろう。と言う訳で、クツシーの元へと行く。

「クツシー、おい、クツシー？」

「ん？ どうしたの、サク？」

言い方が悪いがクツシーは正気のようにだ。

「えーっと、その、ハルがさ……暴走してるんだけど」

「ああ、アレね。まあ、いつもの事だし放って置いても良いかなあ、ってダメ？」

訂正しよう、春の陽気がみんなを（クツシーも含めて）狂わしているようだ。

「こんなの、クツシーらしくないよ。いつもみたいにビシッと決めるよ」

「そう？ わたしはこういうのもアリかなあ、って思うけど」

（クツシーの様子が明らかにおかしい！）

その様子は宛ら五月病にかかった人のようだ。いやいや、もう六月だし。ってか、それどころじゃないし。ああ、もう一体どうすんだよ！

頭を抱える事、数十秒。意外にもあっさり結論に辿り着いた。

「じゃ、僕もう帰るから」

右手を軽く挙げた後、みんなに背を向け全力疾走。

逃走、もとい現実逃避。一番の解決策にして最も楽な方法だ。って言うか、もう僕の手には負えません。だからこれで良かったんだ。きっと良かったさ。と、自分に言い聞かせ廊下を疾駆する。

それはさて置き一先ず、明日会ったら謝ろう、と固く心に誓った。

屋上を飛び出した僕は、みんなを置き去りにした罪悪感と自分のとった行動を無意識に正当化しようとする心に板挟みに遭っていた。（仮にあのまま、僕が残っていたとしても何も変えられないし、クツシーもハルが暴走を続ければ嫌でも止めに入らないといけない）

て分かるだろうし、でも返ったのは不味かったかな……)

そんな事を一人、誰も居なくなつた教室で悩んでいた。

「よう、サク。まーた、夢の少女でも探してんのか？」

「うん、まあ、そんなところ」

「程々にしけよ、もう外部とか始まつてるし」

「分かつてるよ。帰宅部はさつさと帰りますよ」

「あつそ、と手を振り消えていく友人その一。」

「さて、っと。僕も帰りますか……」

そこから先は……まあ、ご察しの通りです。

夢の少女との衝撃的な再会(と言うか出会い)

「えーっと、失礼だけど君、名前は？」

僕が夢の少女に訊きたかつた事の一つを尋ねる。彼女は軽く息を吸つてから一息で答えた。

「瓊瓊杵、天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命です。長いので瓊瓊杵とお呼び下さい」

ヤバい、それが率直な感想だつた。まさか、夢に現れる(超美系でお姫様のような服を着た)少女が電波さんだつたなんて、(冗談じゃ無くて)夢にも思わなかつた。

(さて、どうするべきだ。壱、聞かなかつた事にして次の話を始める。まあ、無難なところだな。弐、ツツコミを入れる。もしかしたらツツコミ待ちかもしれないしな。参、帰る。これもアリ……かな?)

言い淀んでいる僕を見兼ねてか、彼女の方が先に口を開いた。

「あの、佐久夜様で間違いありませんか？」

「は、はい。僕は木花 開耶で間違いないけど……」

「ああ、そうでした。こちらでは開耶様でした」

何と言つか分かりづらいだろうけど、彼女の言う「サクヤ」と「さくや」の違いは全く分からない。発音が違う訳でも無ければ、漫画みたいに吹き出しが出てる訳でも無いし。そうして行き着くとこ

ろは結局、彼女が電波さんだと言う疑惑だ。

僕がそんな事を考えているとは露も知らず、彼女は語り出した。

「これから始まる事はもしかしたら受け入れ難い事かも知れませんが、どうか無理に受け入れずに順を追って理解していただく。そして、時が来るまで開耶様は普段通りの生活をしていてください。それが私の望みであります」

ヤバイ、ヤバイ。何だこのもう巻き込まれてる感、満載な会話は！ 順を追ってどころか、まずスタートの位置にも着いていないんじゃないか？ と、思える程、身に覚えが無い。けどまあ、こういう類の人は否定される事を酷く嫌うから、適当に合わせて置くのが無難な解答。と言う訳で、言葉の意味も理解しないまま僕は頷いた。「良かった。開耶様は昔から強情なところが在ったので、了解して頂けるか不安でしたが、快く承諾して頂き、感激です」

勝手に感極まっている少女を横目に、僕はどうしたら逃れられるかひたすら思案していた。

それから間もなく……

嵐のように現れた少女は、嵐のように去って行った。ホントにあつさり。

「ん、この気配は。……では開耶様、私はこれで失礼致します」

何を思い立ったのか、どこか遠くを見つめ、駆けて行った。当然、僕は止めなかった。お好きなように、と言わんばかりに手を振って、送り出してやったさ。そしてもう二度と会わない事を願った。

木花開耶物語1話（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。
ご意見、感想などあればよろしく願います。

木花開耶物語2話（前書き）

最後まで読んで頂ければ幸いです。

木花開耶物語2話

PROLOGUE

あの不思議な夢に現れる少女（まさかの電波さん）との衝撃の出会いから、一夜が明けた。

僕はと言えば、特に目立った変化も無く、いつも通りの朝を迎えていた。

そう、大きな変化は無かった。

だって僕等が出会った事は結局、数ある出会いの一つでしかないのだから。

日本規模いや、世界規模で見ればこの事は単なる男女の出会い。それ以外の何ものでも無い。

しかしながら、強いて言えば変化は在った。

そう、あの夢を見なくなった。

久しぶりに、真っ暗で何も無い空間を旅した。

そして、いつも通りの時間に目覚ましが僕を起こした。

寝覚めは……まあ、最悪だった。

とは言ったものの、寝覚めが悪いので学校を休みますと言っ訳にもいかず、渋々、支度を始める。

（えーっと、今日の授業は……）

時間割を思い出したながら、必要な教科書やノートを鞆に詰める。

（日本史、古典、生物、数学、数学、芸術……だったかな？）

さてどうしたものか、数学のノートが見当たらない。

（おかしいな、昨日は確かに在った……はず）

昨夜の記憶を振り返るが、一向に数学のノートは見当たらない。

（まあ、他のノートに写せばいいか）

即決し、支度終了。

部屋を出て、一階の食卓へと向かう。

「あら？ おはよう、開耶」

「おはよう、母さん」

辿り着いた食卓には、既に朝食が並べられていた。

ご飯（勿論、白米だ）、味噌汁（勿論、具は豆腐とワカメだ）、焼き魚（勿論、鮭だ）、お茶（勿論、緑茶だ）。

今日は和食のようだ。

「いただきます」

「はい、いただきます」

箸を手に取り、もう片方の手にご飯の入った茶碗を持ち、箸で焼き魚の骨を取る。

全く同じ動作を、母も行う。

その光景は正に、瓜二つと言った感じだ。

これもまた、いつも通りの日常の一つだ。

やはり大きな変化は無かった。

「どうかしましたか？」

僕の浮かない顔を察してか、母が心配そうな声で尋ねてくる。

「いや、別に……何でもないよ」

愛想の無い返事をする。

僕の家族に父は居ない。

別に母に冷たく当たる理由が、父が居ないせいと言う訳では無い。ただ、朝は低血圧なのと、頭の回転が遅くて返事をするのが億劫おっくうなだけ。

本題に戻ると、少々、説明不足だったので補足をさせてもらう。

父は居る、けれど今は居ない。

僕も詳しくは知らないが、父は作家らしい。

だからと言って、放浪の旅を許していい理由などには成らない。

少なくとも僕はそう思った。

しかし、母は違った。

「あの人の決めた事だから」

口癖のようにそう言う。

父と最後に会った（正確には見た）のは、もう五年以上も前の事だ。当然、顔など思い出せるはずが無い。

それ以前の問題で、僕は父が嫌いだ。

なぜなら母がその父のせいで、朝から晩まで様々な仕事を担い、家事もし、僕のお小遣いや学費、食費、その他諸々の生活費を負担しているからだ。

そんな母の痛々しい姿を見るのは忍びなかった。代われるのなら代わってあげたいくらいだ。

しかし、現実的に高校生のアルバイト如きが一体、何の足しになる？

精々、自分の小遣いが良いところだろう。

それとも今から学校を辞めて、就職でもしてみるか？

中卒でどこの企業が雇ってくれると言うんだ？

高卒なんて今時ノルマだ。

現実には僕に重く押し掛かって来る。

どうする事も出来ない無力な自分を、日々の中で感じ続けるのは苦痛以外の何ものでも無い。

唯一の安らぎは、学校に居る間だけだ。

学校でみんなと笑ったり、怒ったり、悲しんだり、驚いたり、泣いたりしている時だけが、現実を、現状を忘れられる。

しかし、家に戻れば嫌でも現実は見えて、聞こえて、感じてしまう。

だけれども、今はまだ均衡がとれている。

家での時間、学校での時間、その狭間に在る僕だけの時間。それが所謂、現在を認識し、整理・納得する為の時間。

このまま、このまま、何も起こらず、あと二年。

それだけの時間を費やし僕は……この家族から、独立する。それだけが、僕の希望だった。

どんなに馬鹿にされようが、どんなに止められようが、どれだけの他人を傷つけようが。

この進路だけは、この意志だけは、この夢だけは。

誰にも邪魔させない。

誰にも、だ。

「動き出す日常」

二〇〇六年六月七日 朝

いつも通りの時間にいつも通りの通りを抜け、いつも通りの商店街を見つめる。視界には何一つ変わる事の無い、平凡で平和な風景が広がっていた。せかせかと歩くサラリーマン、携帯を見て驚く〇し、楽しそうに散歩する老夫婦、ヨタヨタと走るオッサンと自転車、特に眩しい訳でも無いのにサングラスをして気取って駆け抜けるランナー、黄色のカラーリングがされた目に悪い自家用車その一、その後ろで排気ガスを平気で振り撒き進む自家用車その二。そして、そこを冷めた目で見る僕……と一人の少女。

僕は思わず立ち止った。いつも通りの風景の中に、いつも通りでは無い物質が混じっていたからだ。

「おはようございます、開耶様」

と、彼女は頭をぺこりと下げた。

「お、おはよう」

常識的判断で挨拶を返してはみたものの、そんな呑気な事をして
いる場合で無い事に気づく。

「ど、どうしてこんな……いや、此処に？」

こんな所に、と言いかけて言い直す。辺りを見回すと、周囲の住宅の窓が空いていたり、この近辺に住む人達が外に居たりした。相手の悪口とは相手の居ないところであるものであり、相手の居る前では決してはいけない事だ。つまり、いくら僕がこの商店街に大した物が揃っていないと思っていたとしても、今、口に出すのは得策では無いと言う事だ。

そんな僕の些細な気遣いにも気づかず、彼女は口を開く。

「はい、私は開耶様の身の警護に参ったのですが、お邪魔でしよ
うか？」

（彼女の言っている事が、全く分からないのは僕が悪いのだろうか
？ いや、きつとおそらく、たぶん間違いなく、その答えはNOだ。
仮にもし、僕にそういう電波な知識が在ったとして……という仮定
でさえ思い付かない）

落胆にも否定にも見える脱力感を、僕は示した。すると彼女は、
即座に一步退き、僕に背を向け、瞬く間に去って行った。

「えーっと……結局、何だったんだろう？」

誰に言うでもなく、そう呟き、通学する事にした。

大通りに入り、もう学校の見える位置までやって来た。

「おーい、サクー！」

すると数メートル後方から、僕を呼ぶ声がした。この時間帯のこ
の場所で、僕を呼び止める人物は……まあ、一人しか居ないだろう。
僕は立ち止まり、彼の到着を待った。

「よう、サク」

「おはよう、ハル」

簡単な挨拶を交わし、足を動かし始める。それに彼が歩調を合わ
せ、僕等は並んで歩く。すると彼は僕の顔を見るなり頭を抱え、唸
り出した。

「どうしたんだよ、らしくない」

「ああ、いやさ。サク、お前……昨日、いつの間に帰ったんだ？」

ホントはこちらからその話題を振りたかった、と言う僕の考えが
彼に分かるはずも無かった。なぜなら彼は勘はいいが、察しは悪い
からだ。

「えっ、えーっと、いつだったかなあ……？」

「なんじゃそりゃ？」

「そ、そうなんだ、気づいたらもう教室で……いつの間に帰って来

たんだろう？　って僕もビックリだったよ」

（とても苦しい言い訳。僕は夢遊病患者か！　いや、夢遊病患者に失礼か）

しかしながら、ハルはそれ以降、特に昨日の事を問い詰めてこなかった。ふーん、と納得したような、呆れたような声を漏らし、それから教室の前まで無言で進んだ。

丁度、ハルが教室のドアに手をかけた時、急に思い出したような口調で尋ねてきた。

「あつ、そついや日本史の宿題。サク、やった？」

ハルが宿題をまともにやって来た事が一度も無いと知っていれば、この言葉がどれだけ白々しく聞こえるか分かるだろう。

「いや、僕もやってない」

（まあ、僕も他人の事を言える立場では無いけどね）

「またクツシーにでも見せてもらうか」

「そつだね」

そう言つて、笑いながら教室に入つて行く……つもりだった。

何故かは分からないけれど、僕の足は止まっていた。ハルだけがどんどん遠退いていった。彼の腕を掴もうと手を伸ばしたが、届かなかった。その代わり、と言つては何だが不思議なモノを掴んだ。そして掴んだ瞬間、景色が一変した。廊下だったその場所は、上も下も無い不可思議な空間となった。

唐突な出来事に、僕の頭は混乱した。いや、むしろこの状況で混乱しない方がおかしいだろう。そんなツツコミが入れるのならまだ安心か、と安堵の溜め息を漏らす。

すると暗闇の中から、そのモノは言った。

何の為に、彼を呼び止めようとしたんだ？

「えつ、えーつと」

僕は言い淀んだ。明確な理由など無かったからだ。ただ、何か違和感がして、僕は止まった。でもハルはそれに気づかず、進んでい

った。だから止めようとした。しかしその違和感の正体は分からない。言葉では表現できない、そんな感じだ。

それが分からないのなら、呼び止めなくて正解だ

「正解？」

そうだ。常に答えは正解か不正解のどちらか。正解で無ければ不正解、不正解で無ければ正解だ

その言葉を最後に、そのモノは目の前から消えた。そしてあの不可思議な空間も、気づけば僕は教室の入り口に居た。

（今の一体……？）

そもそもあの空間に物が在ったかどうかさえも定かでは無かった。空気と話していた様なそんな不可解な出来事だった。いや、それ以前の問題で僕はあの時、何を掴んだんだ？

「おい、サク？ どうしたんだ、そんな所で立ち止まって？」

中々、来ない僕にハルがそんな悠長な言葉を投げかけてきた。現状から察するに、僕は白昼夢でも見ていたらしい、という事で無理矢理納得した。これ以上、在りもしない空想もとい妄想に耽^{ふけ}るのは得策では無いからだ。現実を見る、目の前にはいつも通りの風景が広がっているじゃないか。さあ、僕もいつも通りの行動をしよう。そうすれば、変な夢や空想、妄想が嫌でも吹っ飛ぶから。そう自分に言い聞かせ、僕は一歩踏み出した。しかし、教室の中は僕の予想を完全に裏切る状況だった。

クッシーの席の周りに、日本史の宿題を忘れたアホな生徒（僕とハルもその一員だけど）が群がって居た。そこまではいつも通り、特に変化の無い光景だった。しかし、妙な雰囲気だった。その答えは、間違い探しの要領ですぐに分かった。妙な雰囲気^はの正体は、誰も宿題の答えを写していないからだ。

そんな事も知らず、ハルはいつもの調子で人だかりに入っていく。

「よう、皆の衆。宿題は捗^{はかばか}ってるか？」

しかし、誰も応えない。いつもなら、もう写し終わった人が居て、そっちに行けと言われるのだが、今日はそれも無い。それどころか、

誰一人として声を発していない。無音の間が数十秒続いた頃、ハルがキレた。

「おいっ！ 聞こえてんなら、返事くらいしろや！」

ハルの怒鳴り声が、教室内に響いた。そこでやっと、みんな我に帰る。

「……………それどころじゃねえぞ」

ある生徒が、そんな言葉を漏らした。当然、聞き逃す筈も無かった。

「どういう意味だよ？」

「クツシーが……………あのクツシーが……………」

「クツシーがどうかしたのか？」

その生徒は現状を受け入れられない、という風に廊下へと走り去って行った。

「お、おいっ！ ちょっと待てよ！ ちっ、何がどうなってるんだよ」

常に前向き思考のハルでも、現状がおかしいと言う事には気づいたようだ。そしてその根源にはクツシーが居る事も。

「ハル、行こう」

僕はそう呼び掛け、人だかりに埋もれたクツシーの席を指さした。

「ああ、行って確かめてやるよ」

ハルはそう頷き、人混みを掻き分けながら走った。その後ろに僕は続いた。掻き分けられた生徒は、さっき走り去った生徒と同じような表情で立ち尽くしていた。

（一体、この先に何が在ると言うんだ？）

と、まあ、勢い良く飛び出したものの目的地は目と鼻の先だし。つて言うか、そんなワクワク、ドキドキするような物が在る訳が無い。なぜなら、ここが現実だから。超詰まらなくて、超息が詰まって、ファンタジーの欠片も存在しない現実だから。誰もが主人公で誰もがサブキャラ、いつエンディングを迎えるのか、どこが終わり

なのかも知らない人生と言う名のロールプレイングゲーム。始めたら、終わるまで終わらない。コンテニュー？ リセット？ そんなものは無い。そもそもセーブデータだって無い。そんなどう考えてもプレイヤー不利な条件下で僕達はプレイし続けなければいけない。その終わり、とやらが来るまで。さて、愚痴もこのくらいにして現実を見ますか。

僕の目には、当然、有り触れた風景が映った。クツシーの席に座るクツシーと、それを囲むように群がる生徒。唯一違うのは誰も答えを写していない、と言う事だけ。

「クツシー？」

ハルが呼びかける。しかし彼女は顔も上げず、何かの作業に没頭している。

「……、……れた」

周りに群がる生徒の一人が、絞り出すような声で呟いた。たぶん聞き逃したハルは、たぶん聞いていたであろう僕に視線を向け、通訳を促した。しかし残念な事に、僕もその呟きは聞き取れなかった。なので無言で首を横に振った。するとハルは心底面倒臭そうに頷き、大声で言った。

「おい、クツシーがどうしたって？ はっきり言えや！」

場は静まり返った。当然、と言えば当然なのかもしれない。ハルはクラスの中でもムードメーカー的存在だ。そしてその彼が今、怒りを露わにしている訳だ。そりゃ静まり返っても無理は無い。しかし問題点が一つ在った。その事を本人が分かっているかどうかだ。もし本人が分かっているなければ、この静寂をみんなが彼を無視していると勘違いし兼ねないからだ。勿論、みんなにその気が無いのは僕が十分に知っている。しかし、だ。勘違いで彼が怒りだしたら、誰が彼を止めると言うのだ。僕？ いや、無理だから。

そんな半ばどうでもいい事に思考していたせいで、渦中の人物が動いた事に気づくのが少し遅れた。

「……クツシー」

誰かが呟いた。誰が呟いたのか、そんな事はどうでもよかった。ただ、今、重要なのは沈黙を続け、このおかしな状況の中心に居た、と言っても過言では無い人物・クツシーがやっと動いたという事だけだった。

彼女は無言で彼の前まで行き、止まった。誰もが見守る中、先に口を開いたのは意外にもクツシーの方だった。

「ハル、みんなに当たらないで……悪いのは私だから」

真剣な眼差しの彼女は、確かにそう言った。そしてその言葉はしっかりと彼の耳にも届いた。

「は？」

しかし意味までは通じなかったようだ。

（まあ、僕も前半部分しか意味分かんないんだけど……）

すると、周りを囲んでいた生徒達が一斉に笑い出した。僕は突然の事だったから驚いたけれど、ハルとクツシーはつられて笑っていた。それを見て、僕も自然と笑みが零れた。それから間もなく、朝練を終えた玉ちゃんが教室に入ってきて来て、いつものバカ騒ぎメンバーが揃った。いつも通り、玉ちゃんはここまでの経緯を全く知らないけれど輪に入って笑った。だから僕等も、もう何が何だか、どうして怒っていたのかとか、誰が悪いとか、誰と誰が居たのかとか、全部忘れて騒いだ。そして、それは僕達に現実を告げるチャイムが鳴り響くまで続いた。

「で、結局、何が在ったんだっけ？」

改まった口調のハルがそう口走ったのは、確か一時限目の日本史が始まる五分前の事だった。その時、僕達はクツシーの席を囲んで昨夜のドラマの話題で盛り上がっていた。

「だから、聞いてなかったの？ それとも……バカ？」

妙に真剣な口調だったハルに、クツシーはいつもの調子、と言うかまあ、ある意味で真剣に対応をした。因みに僕はハルの訊いた質問の意味も、クツシーが答えた返事の意味も、二人の会話が面白い

具合に食い違っている事も、全部分かった上で黙っている事にした。

「は？　いつ言ったんだよ？」

「はあ……ハルってほんとにバカだよな。世界で一番バカなんじゃない？」

「何でそうなるんだよ？　確かに俺はそんなに、ってか頭は良くない、もしかしたらバカかもしれない。けどな、今回ばかりは俺に非は無いぞ」

「じゃ、何、私が悪いの？」

「うっ、そう言う事を言いたいんじゃない……」

と、ここで両者が黙り込んでしまったので、潮時だと判断して僕が仲介役として間に入る事にした。しかし、無情にも始業を告げるベルは鳴った。

キーン、コーン、カーン、コーン

「サクと玉ちゃん……と、ついでにハルも早く席に戻らないと」

「誰がついでだ！」

「ほら、先生来たよ」

そんな脅しのような言葉に乗せられ、ハルは渋々席に戻った。その光景を見た、周囲の生徒が笑っていた。

やっぱり、いつも通りの日常だ。みんなの笑顔の中心には、常に僕ら四人が居て、昔からの知り合いみたいに仲が良くて、偶に喧嘩もするけど次の日には仲直りして、一人ひとりがみんなを必要とし、みんなが一人ひとりを必要としている。そんな関係で僕達は繋がっていて、決して離れる事は無くて、誰にも壊されなくて、どんなモノにも全力で立ち向かって、どんな結果でも受け入れて、怒って、泣いて、笑って、次も頑張る。そんな日々がいつまでも続くはずだった。

「おい、じゃ、宿題を集めるぞー」

教壇に立つ教師が、当然のように言った。すると、教室中で小さなざわつきが生まれた。そのざわつきは次第に周囲を吸収していき、

どんどん大きくなつていった。その内のどこから、はつきりとした言葉が耳に入る。

「宿題、宿題つてあの教師マジウザいんだよね」

「うん、宿題とかもう時代錯誤だし」

「宿題つて確か、今朝クツシーさんに写させて貰おうとしたら……だったんだよね」

「そうそう、だからたぶん誰もやって無いんじゃない？」

（そう言われてみれば僕も、宿題、写して無かった……）

しかし今はそれどころでは無かった。ざわつきは止まる事を知らず、ドンドン大きくなつていった。いつもならまずこんな事態には成らないが、大概こういう時はクラス委員長のクツシーがみんなの暴走を止める。だが、その当の本人は俯いて、黙っている。偶々、視界に入つた玉ちゃんはいつも通りおろおろして居た。そしてもう頼みの綱はハルしか居ない、と思つた時、先生が怒つた。

「お前等、静かにしろ！ それで宿題はどうなつたんだ？ 出せる奴は居ないのか？」

その一喝で教室は静まり返つた。流石に僕達、生徒も馬鹿じゃない。教師に刃向かつて、残り少ない学校生活を、肩身の狭い思いをする気は更々無い。だからと言って、教師のした質問にいちいち解答する必要性は全く無いのだが、どこにでも勘違いをしている奴とは居るもので……これがまた面倒事を招いた。

静まり返つた教室の中で、一人の生徒が恐る恐る挙手した。

「あのー、先生」

「ん、どうした？」

「先生のモットーは確か、写してでも宿題は出せ、でしたよね？」

「ああ、そうだ。部活で忙しいお前等の事を思つて、宿題は写すだけでもいい事にした。その代わりに絶対提出を原則とした。解答の成否を問わずな」

ん？ 中々良い教師じゃんって？ そんな事はない。生徒の為とか言いつつ、結局は自分の受け持ったクラスは提出物をしっかりと

出す、っていうアピールの材料にしているだけなのだから。因みに刃向かえば、すぐに担任に報告されて、生徒指導室で楽しい楽しい座談会及び反省文が待っているらしい。

「で、結局、出せる奴は居ないのか？」

気持ち悪い笑みを浮かべながら、教師が僕達を見渡す。いつもならコイツのこんな顔を見る事も無いのだが、今日は誰もクツシーから写させて貰えなかったらしい。まあ、クツシーにもそんな日が在って別に悪くない、と僕は思う。だって、その宿題の答えはクツシーが頑張って解いて、導き出した答えなんだから。僕達が、当たり前のように見せて貰うのは虫が良過ぎる話だ。

しかし、誰も宿題を提出しに行かなかった。そう、あのクツシーさえも。その異変に僕とハルが不思議がって居た頃、どこかの誰かがぼそりと呟いた。

「……だつてクツシーがやってきて無かったから、誰も写せなかったじゃん」

まず自分の耳を疑った。それからハルの方を向いたが、ハルも同じように信じられない、という表情を浮かべていた。玉ちゃんは……聞いてなかったらしい。同じくクツシーも。

（それにしても、クツシーが宿題を忘れただって？）

自分が宿題を出せなくてももしかしたら生徒指導室行きなのかもしれない事とか、さっきまで話していたドラマの話の続きとか、夢に出てきた少女が予想外にも電波さんだった事とか、全部後回しにしてクツシーが宿題を忘れた、という事が信じられなかった。

この事態を一般的な事に例えるなら、朝のニュースで本日の天気予報を忘れて次の話題に入ると同等ぐらいの衝撃が今、僕とハルに訪れている。僕等の間に言葉は無かった。そんなはず無いよとか、クツシーに確かめてみようよとか、言いたい事は沢山在ったけど、沈黙だけが続いた。

しかし教師は構わず、提出を締め切り、授業へと移った。そして先程の呟きを始まりとして、クツシーが宿題を忘れた、という内容の

ざわつきが所々で生まれる。当然、同じ教室に居れば嫌でも聞こえるようなそのざわつきに成っていた。

「クッシーが宿題、忘れたんだよー」

「知ってるよ、でもどうして忘れたんだろ？」

「もう優等生を演じるのに疲れたんじゃない？」

「違うよ。きつと失恋したんだよ」

「それの方が違うだろ。きつと部活の方がスランプなんだよ」

様々な憶測が生まれ、消えていく。しかし言われた本人には、そのどれもが傷として残る。そうとも知らず、ざわつきはどんどんエスカレートしていき、最終的にはクッシーの悪口さえも出てきた。

そんな生徒達に見兼ねた教師が怒ろうとした時、机を殴る音が教室に響いた。

バンッ！

「デメエら、クッシーだけのせいにしてんじゃねえぞ！」

その音の主はハルだった。彼は勢いよく立ち上がり、みんなの方を向き怒鳴った。そして怒ろうとしていた教師も、無責任な事を言っていた生徒も、クッシーも玉ちゃんも僕も、ハルを見た。何十、何百という視線の中、彼は全く怯みもせず言った。

「だってよ、おかしいだろ？　こんだけの人数居て、どうして一人だけ悪いって事に成るんだよ？　もしこのクラスの誰かに、何か言い掛かり付ける奴が居たとして、お前等は知らん振りするのか？

ソイツだけ嫌な思いすればいいって思うのか？　それとも関係ねえ

クラスメイト

って切り捨てるのか？　俺は絶対しねえ。もしも仲間が疑われてんなら、俺は迷わず仲間の味方につく。もしも、悪いっていちやもん付けてくるなら、俺は迷わずソイツと正面から向かい合う。何故か、って？　全てを共有するのが仲間、ってもんだろ？」

お前等の考える仲間ってのは俺の考える仲間とは違うのか、と彼はみんなに問う。勿論、彼の言っている事が間違っていないのは重々理解している。しかし、それは綺麗事でしか無いのも、また事実だった。結局のところ、感情論では説得力に欠けるのだ。だから、

みんな答えに迷っている。心はハルと同じだが、頭が論理的に物事を捉えて邪魔をしている。

（あともうひと押し、何か、誰か……）

「私は……同じだよ、ハル」

「クッシー……」

彼の想いは、彼女に通じた。

それから先は……まあ言うまでも無くみんな大賛成で收拾がつけられない程だった。そして宿題云々よりもそちらの件で、僕等は担任及び様々な教師から怒られた。しかし僕等は笑っていた。別に怒られるのが好きとかそういう変な意味じゃなくて、ただ単にみんなが一緒だったから。そんな単純明快な理由だった。

あれから時は経ち、放課後。僕等は屋上に居た。しかしそれはとても不本意ながらだった。と言うのも、僕等は一分一秒でも「ある作業」をしたかったからに他ならない。

「……って訳で、俺達全員、反省文提出って事になったんだけど……反省文って何、書けばいいんだ？ 一先ず思いついたのは、貰った原稿用紙にひたすら「すいませんでした」って書く案と、あの教師の悪口を書き殴るっていうナイスな案が在るんだけど……どっちが良いかな？ 俺としては……」

「どっちにしても絶対再提出だよ、ハル」

クッシーの辛辣な言葉がハルを貫く。その現実から逃れるようにこちらを見たハルに対して、僕と玉ちゃんは無言で頷いた。

「ええっ、どうしてだよ」

ハルの悲痛な声が乾いた空に響いた。

そう、僕等がしたかった「とある作業」とは反省文の事だ。勿論、僕等の反省文はとづくに終わっている。問題なのは、この目の前の人物の反省文だ。

「どうして、って……ハル、本気で言ってるの？」

「ん？ ああ、マジだよ」

「今の自分が置かれてる立場、分かってる？」

「うーん、まあ、何となく」

ハルのバカさ加減に呆れたクツシーは、掃除を再開した。そのやり取りを見た僕も、溜め息を一つ吐いてから掃除を再開した。

（それにしても、ハルは本当に大丈夫だろうか？）

これは杞憂でも無ければ、過保護でも無い、本当に起きている事に対しての妥当な心配だ。

なぜならハルは今回の騒動の主犯者と（低能な日本史の教師をはじめとする、それに便乗した哀れな腰巾着教師共に）勝手に決めつけられ、僕等の二倍近い量の用紙を渡された。それにも拘らず、彼の態度は全く変わらず、危機感すら見られない。それは良い意味で、僕等の協力を信じているからなのかもしれないけれど、最終的に反省文を書くのはハル自身なので、危機感や焦りぐらいは感じてほしいところだ。

（いや、ハルはいつも通り呑気な方が良いのかもしれない……）

変に彼が焦れば、周りも影響を受けて予期せぬ事態を引き起こすかもしれない。そういう事を考慮すれば、ハルのこの冷静にも見える態度は周りに良い影響を与えていると思える。しかしながら、結局のところ反省文の作成に主として協力するのは一部の有志と僕等三人だけなので、この状況はあまり好ましくない。それと言うのも、彼には三つの問題点が在るからだ。

まず一つ目の問題点として、彼が‘反省’という言葉の意味をどう捉えているのか。事と次第によつては、一から説明するかもしれない。

次に二つ目の問題点として、僕等が協力した事が教師達にバレないかどうか。腐っても相手は教師だ。今まで何百、何千という数の生徒を見てきただろう熟練の教師に、僕等の小細工がどこまで通じるかは未知数だ。

最後に三つ目の問題点として、彼に反省文を書く気が在るのかどうか。これはある意味、一番重要なポイントだ。現実的に考えて、こ

ちらがいくら手伝ったり、補助したりしても本人が書かない事には何も進まない。そして残念な事にハルの文字はとて（良い意味で）独特で、真似して誰かが書くよりは本人が書いた方が断然早いのだ。以上の問題点を瞬時に悟った僕等三人は打開策を模索している、と言うのが現状だ。

（さて本当にどうしたものか……？）

掃除を片手間程度にしながら、問題について真面目に考え出そうとした矢先、問題の張本人が再び口を開いた。

「まあ、どうにかなるだろ。……だから心配すんなって」

（その根拠の無い自信はどこから生まれてくるのだろうか……？）

その気持ちを代弁するかのようにクッシーが言う。

「ハルは危機感、無さ過ぎ。自分の事なんだから、もっと真剣に考えなさい」

「はいはい、分かりましたよ」

全く説得力の無い返事をして、ハルは自分の持ち場へと戻った。クッシーもこれ以上ハルに何か言っても無駄だと悟り、掃除に集中した。玉ちゃんは……一生懸命、自分の持ち場を綺麗にしていた。どうやら、こちらの会話は耳に入っていないようだった。そして僕も、掃除に専念する事にした。これ以上、独りで打開策を模索しても、何も浮かばないのが目に見えていたからだ。やはりこういう事は、みんなで一緒に頭を抱えて、考えた方が何倍も良い案が生まれるし、独りで考えるよりも気が楽で、何よりも楽しい。だから僕は僕にしか出来ない事を片付ける事にした。

僕等が無言になって二、三分が経過した頃、事件（大袈裟かもしれないし、正確には事故。又の名を不可抗力と言う）が起きた。

この屋上には一つだけゴミ箱が在り、そのゴミ箱は屋上掃除の際に出たゴミを収集し、定期的に捨てる為だけに在る。そして今日は、そのゴミを捨てる日で、僕等はそれを当番制で行っていた。前回の当番は男子、つまり僕とハルだった。なので、今回の当番は当然女

子、つまりクツシーと玉ちゃんの間違い無かった。そう、間違い……は無かった。

「じゃ、ゴミ捨て行ってくるね」

あれからずっと続いていた無言の間を破ったのは、クツシーだった。声のした方に視線を向けると、クツシーがゴミ箱を両手で持ち、出口へと向かって歩いていった。そしてその隣に、玉ちゃんが申し訳なさそうに付いて居た。いつもならクツシーと玉ちゃんの二人が両側に付いて持つて行くのだが、今日は違った。

「夏澄ちゃん、私も持ちます」

玉ちゃんはクツシーの事を唯一、夏澄という名前で呼ぶ。特に意味は無いらしいけど、玉ちゃんらしいと言えば玉ちゃんらしいのかもしれない。

「ううん、そんなに重くないし大丈夫だよ」

と、クツシーは答えた。

確かに定期的にゴミ捨てをしているし、一般生徒は立ち入り禁止の屋上にペットボトルや缶のゴミは無い。在るのは精々、鳥の落とすゴミや、砂、埃^{ほこり}程度だ。部活で鍛えているクツシーにとって、このゴミ箱などが在って無いような物らしい。しかしそれが事件の引き金だった。

ゴミを捨てに行くという事は、要するに掃除は終了したという事だ。そんな訳でクツシーがゴミ捨てに行くと言った瞬間、ハルは僕の所に遊びに来た。丁度その時、予期せぬ突風が屋上を駆け抜けたらしい。と言うのも、僕とハルの所には風など吹いていなかったからだ。そう、その突風を受けたのは、クツシーと玉ちゃんだった。そして僕とハルは、その光景をしっかりと目撃してしまった。

「おっ、白」

「う、うん」

ハルが呟き、僕は頷いた。しかしそれは同意してはいけなかった。なぜなら、僕とハルは次の瞬間、激怒したクツシーのビンタを食らったからだ。これが事件の一部始終となる訳だが、一番の謎をまだ

話していなかった。それは……何が白なのか、だ。

簡潔にまとめると、あの突風が吹いた時、両手が空いていた玉ちゃんに咄嗟にスカートの裾を抑えたが、ゴミ箱を持って両手が塞がっていたクツシーのスカートは風になびいて舞い上がった。それから先は……まあ、言わなくても分かるだろう。そんな事が在り、僕等は各自解散となった。一番気がかりなのは、ハルの反省文の件だが、もうどうしようもないので、ただハルを信じて待つ事にした。

（まあ、ハルはやる時はやるタイプの人だから何とかなるだろう……たぶん）

楽観的過ぎるのかもしれないし、心配し過ぎかもしれない。どちらにしても、ハルが反省文を書いてくるかどうかは半信半疑だ。それはさて置き、明日登校したらまずやるべき事が出来ただけは確かだった。それは……クツシーへの謝罪だ。

六月の空は日が高く、もう五時を過ぎたというのにまだ明るく、日射しは熱く感じる帰り道。六月と言えば梅雨なのだが、五月下旬から今日までに雨が降った日は一度も無いこの南海市。ある意味で此処は気候が特殊な地域なのかもしれない。いや、それ以前の問題で特殊なのはこの住宅街跡の雰囲気だと思う。

（何なんだ、この殺伐とした空気は……）

何かこの一帯だけ、生物が生息して居ない様な、そんな雰囲気を漂わせている。

これが僕の勘違いならそれはそれで構わないが、どうにもそれでは納得し難いのが現状だ。確かに此処で誰かとすれ違ったりした事は一度も無い。いや、一度だけ在った。あの電波さんと遭遇したのは確かここをもう少し先に進んだ所だ。

（いやちよつと待て、今はそんな事どうでもいいから、本題に戻るべきだ）

自分で自分にツツコミを入れる虚しさを感じつつも、本題に戻る事にする。

此処で誰かとすれ違ったり、出会ったりした事は一度しか無い。そう、あくまで誰か人とは。僕が言いたい事、それは……此処に人は居ないがそれ以外の生物、例えば野良猫とか、野良犬とか、鼠とかが生息していた、と言う事だ。そして現在その野良猫やら野良犬、鼠は影も形も無い。では奴等は何処に行ってしまったのか？ どこかに隠れている？ そんな事は絶対にあり得ない。なぜなら、奴等は自身の生存がかかっているからだ。

此処に生息している動物達は生きる為に、人間に近付く事も厭わない変わった動物達だ。その変わった動物達の生存の為に、自分の昼食の余りをあげている僕も相当な変わり者だが、誰かがやらなければ此処に居る動物達は間違い無く死んでしまう。少々前に語弊が在ったので訂正させて貰うと、此処に居る鼠以外の動物は本来、野良では無い。そして悲しい事に此処は、ペットとして飼われていた動物達の捨て場所ともなっているのだ。

流石に僕も動物愛護団体とかそういうのに入る気は無いし、動物もそこまで好きじゃない。でも人間が勝手に飼い慣らし、飽きたのか、世話が出来なくなったのかは知らないけれど、勝手に捨てるのは理不尽過ぎると思う。奴等は人間に飼われた時点で、もう自然界で生きていく術を捨てているのだ。捨てれば勝手に生きていくだろう、という身勝手な考えがどれほど甘い考えか、捨てた奴には一生かけても理解出来ないだろう。そして僕は、そんな身勝手な生物を同じ人間とは思いたくも無い。

だから実際には、ここで動物達を捨てに来ている身勝手な生物を何回か見かけた事が在る。どいつもこいつも同じような顔で、平気で捨てて行った。別れを惜しむ？ そんな素振りは一切無かった。

だから僕は此処で動物達にご飯をあげる。僕一人では、そういう待遇の動物達全てを救う事は出来ないけれど、せめて自分の周りで、見えて、知って、分かっている範囲で困っている此処の奴等だけでも生きてもらいたい、そういう気持ちだ。

その動物達が今日は居ない。それはもう僕の勘違いでも、動物達の

気まぐれでも無く、異変そのものだった。

木花開耶物語2話（後書き）

読んで頂きありがとうございました。
ご意見、ご感想よろしく願います。

木花開耶物語3話

PROLOGUE

二XX六年六月八日 朝

常識的には何の変哲も無い事だが、少なくとも僕等にとっては信じ難い事が起きた。

「あー、神屋は……理由は知らんが欠席だ」
そう、ハルが休んだ。

人間、誰しも体調の優れない時や、気分の乗らない日があっても全くおかしく無い。

いや、むしろそんな気分屋な感じが彼のアイデンティティーと言っても過言ではない。

しかし、そんな彼だからこそ誰にも迷惑をかけないように努めている。

担任がHRの終了を告げ、教室を出ていくと、クッシーと玉ちゃん僕が僕の席にやって来た。

「サク、ハルからメール在った？」

「ううん、クッシーにも連絡無し？」

「うん、そうなの」

（もしかして、玉ちゃんに？ いや、それは有り得ない……か）

ふと、視線をクッシーに向けると、思い詰めた表情をしていた。

（何か、心当たりでもあるのかな？）

しかし、僕の口から言葉は出なかった。

それから僕等は各々に感情を抱き、それぞれの所へと静かに戻った。

それにしても最近、珍しい事が頻繁に起きているような気がしてならない。

何かの前触れか、それともただの偶然か。

何にせよ、今まで退屈だった日常が変わりつつある、それだけは確かな事実だった。

しかし、全てを納得している訳じゃない。
むしろ、腑に落ちない事の方が多々ある。

例えば、二日前に出会った夢の少女はどうして住宅街跡に居たのか、とか。

昨日、クッシーはどうして宿題を忘れたのか、とか。

同じく昨日、住宅街跡の野良猫達は一体どこに行ったのか、とか
そして今日、どうしてハルは何の連絡も無しに休んだのか、とか
この短期間中に数え出したら限が無い程の、非日常^{きじ}を体験した。
けれども、そのどれもが夢ではなく現実で、受け入れなければいけない真実。

そう、あの出来事も……。

正直、どうしてあんな事が起きてしまったのかは僕にも分からない。
い。

いや、僕如きに分かる筈も無かった。

正確には人間如きに未来が分かる筈も無い、だ。

三段論法的な表現で表すと……。

人間に未来は分らない。

僕は人間だ。

だから僕に未来は分らない、と言った感じだ。

確かに未来を知っていれば、何かと楽な点も多数あるだろう。

しかしながら、未来を知らないからと言って不便な訳でも無い。

現に僕らは今より先の未来を知らないに、生きていけている。

そして、その生活は充分過ぎる程に充実している。

それで充分では無いだろうか？

むしろこれ以上、何を求めるのだろうか？

自由？

それとも、叡智？
はたまた、信賴？

どれも努力次第で勝ち取れそうなモノばかりだ。
そこまで分かれば、答えは簡単。

人間は未来を知らないのでは無い、知る必要が無いのだ。

と、納得のいく答えが出たところで、そろそろあの不思議体験を
説明していくべきだと思う。

そう、昨日起きた不可解な事件の説明を……。
そして何故、彼女が狙われたのかを僕はきつと知らなければなら
ない。

たとえ、僕が望まなくても。
いや、おそらく知る事になるだろう。

根拠は無いけれど、そんな気がしてならない。

僕と彼女との接点はあまり無いのだが、彼女という存在を全く遠
くに感じない。

この不可思議な感覚が、僕が彼女に抱いている感情。
即ち‘興味’だ。

彼女は、今までに僕が会った事の無い種の人間だ。
しかし、それだけではこんなにも彼女に惹かれる理由としては動
機不純だ。

けれど、これ以外に抱いている感情と言われても……。

「懐かしさ……」

不意に出た言葉は、自分でも意外なモノだった。

あの日、出会う以前に僕は彼女と会った事が在るのだろうか？
記憶を辿り、過去を振り返るがそのような記憶は一切無い。
彼女とはあの日、初めて出会った。
それは間違いない。

では、この懐かしさは一体どこから湧いてくるのだろうか？

知らない、分からない、消えない。

彼女について考えれば考える程、謎は深まっていく。

そして僕が彼女について知っている事はとても少ない、という事を自覚させられる。

でも、名前は知っている。

しかし、歳は知らない。

しかも、どこに住んでいて、何が好きなのかも知らない。

それに誕生日も知らないし、メルアド（メールアドレス）も知らない。

そう言えば、どこの学校の生徒かさえも知らない。

思い返せば、彼女の顔を鮮明に理解したのは昨日の朝だ。

言われてみれば、どうして彼女が僕に対して敬語なのかも知らない。

そして、会おうまで彼女が電波さんだった事を知らなかった。

けれど、僕は 彼女の温かさを知っている。

「非日常への参加」

二〇〇六年六月七日

夕暮れ時を過ぎ、辺りは一気に暗くなり出した。六月だというのに、日が沈むと未だに冬のような寒い風が吹いた。いや、きっとそんなに言う程、冷たくは無かったと思う。そう感じたのはおそらく……僕が淋しかったからだ。

見渡す限り生物の生息を感じ得ない無機質な空間が、そこに在った。そして、その中心に僕は佇んで居た。何をするでも無く、何を見るでも無く、何を知るでも無く……。ただ立って居た。そうしている内に、猫達が帰って来てくれると、どこかで信じていたからだろう。

しかし結果は、現実は厳しかった。

五、六分待った しかし誰も帰って来なかった。

更に五、六分待ってみた けれど誰も帰って来なかった。

それから十分待つてみた　そして僕も帰る事にした。

辺りはすっかり真つ暗になってしまい、電柱や街灯の無い住宅街跡を歩くのは随分と困難なものになった。

それでも、僕は歩くしかなかった。待つていたのは僕の意味だし、帰つて来なかつた猫達が悪い訳では無いからだ。誰のせいでもない自分の責任を、僕はひたすら感じて歩いた。そんな自分に対して、慰めの言葉や前向きな発言は思い浮かばなかつた。

重く、辛い現実を見た後では、どんな言葉も薄つぺらな希望にか聞こえないからだ。そんな言葉が何の役に立つ？　誰かがそんな言葉で変わるのか？　夢や希望を抱いて明日を生きようと頑張れるのか？

答えは限りなくゼロに近いだろうけど、何人かは救える、救われるだろう。そして、その救われた人の半分は再び病むだろう。

実際、人生というのはそんな事の繰り返しだと思う。人生の四分の一を掛けて様々な事を学び、次の四分の二は学んだ事を生かして国に貢献し、最後の四分の一は世間や若者から邪魔者として扱われ生きていく。この流れのどこに夢や希望が在ると言えるのか。

おそらくそれは、最初の四分の一で決まる。ここで頑張らなければ、夢や希望は捨てる事になる。なぜなら社会に出れば嫌でも現実を知るからだ。理不尽や不条理なんて当たり前前の低俗で陰湿な淀み切つた世界に自分は居るのだ、と。

ドスンッ

「ん？　何か落ちた……音？」

自分の愚かさを棚に上げて、世界の不公平さを愚痴つていた頃、何か大きなモノの落下する音が住宅街跡に響いた。その音は不意打ちだつたにせよ、植木鉢や洗濯物が落下した音で無い事は容易に分かつた。もっと大きな何かが相当な高さから落ちた、そんな音だつた。

（確かめるべき……かな？）

好奇心と期待が込み上げた。何が落ちたのか知りたいという好奇心と、もしかしたら聞き間違いで猫達の発した音かもしれないという期待。その二つが生じて、消え、混ざり、一つと成り、気づけば僕は音のした方に走り出していた。

「はあっ、はあっ、はあ……ふう。確か、この辺りのはず……なんだけど」

真っ暗で何も見えない。場所はおそらく間違いない、と思う。なぜなら、僕の傍らには住宅街跡の中でも一際高い建造物が建っているからだ。

もしこの建物の一番上から落ちたら……たぶん骨折じゃ済まないと思われる。しかし、それはあくまで人間が落ちた場合の話であり、まだ落下したモノが見つかっていない以上、何とも言えない。

（……いや、ちょっと待て）

それ以前の問題で、もしも人間が落ちていたとしたらそれは自殺か？ それとも殺人？ どちらにせよ、ここは事件現場って事になるのか？ そんな所に僕は居ていいのか？

そんな仮定の自問自答をしている内に、この事態の打開策に気づいた。

「そつだ、携帯」

持っていた通学鞆の中から、無断で持ち込んでいる某有名携帯会社のイノセントブルーでカラーリングされたスライド式携帯を取り出す。

スライド式携帯の難点、画面が傷付くという誰もが持つ悩みに少なからず僕も悩まされていた。使い勝手は良いのだが、どうにも画面が傷付くのはあまり嬉しく無い。慎重に使っているはずなのだが、気づけば新しい傷が増えている一方だ。一体、何が悪いのやら？

そんな事を考えながら、携帯を辺りにかざすが視界は全く良くならなかった。

「あれ、おかしいな？ …… あつ、そうだ。電源入れて無かった」
校内で鳴るのは流石にマズイのと、校内では全く使用する機会が無い為、いつも電源をオフにしているのだった。

（それにしても、こんな所で役立つとは…… 思いもしなかった）
携帯の画面に待ち受けが表示されたのを確認し、僕は目の前にかざした。すると、照らし出された空間には想像していた様なモノは一切無かった。在るのは、そこに当然のように置かれ、寂れた住宅街跡の風景だった。

（おかしいな…… 確か、この辺だったはずなのに……）
納得のいかない現実^{こたえ}に対し、憤りを感じながらも冷静な判断を怠る訳にはいかなかった。もしかしたら、そんな考えが僕の頭の中をグルグルと駆け回った。

（僕は一体、何を期待しているのだろうか……？）
感慨に耽^{ふけ}込んでいると、何処からとも無く声が聞こえてきた。

死体？

それは注意深く聴くと、以前にも聞いた事のある声だった。

（確かあれは…… クッシーが宿題を忘れた日の朝の事だったような……）

声の主は僕の解答を待っているようだったので、少し考えてから口を開いた。

「いや、縁起でも無いし、不謹慎過ぎるし、常識的に考えて有り得ないし、何よりも見つかったても何も嬉しく無い」

と、一気に告げると、次の質問がきた。

じゃあ、宝物？

「そもそも、そんな分類^{カテゴリー}の物がこの世に存在しているとしたら確実に博物館行きだし、仮に在ったとしても僕のものには決してならないだろうし、何よりも僕が持って居たとしても宝の持ち腐れだ」

それなら、名誉や地位？

「えーっと、あれ？ そういつのって、あんな大きな音をたてて落ちて来る物だったっけ？」

すると声はもうしなくなってしまった。それは声の主が僕の返事に納得した、という風に受け取っていいのだろうかと内心、複雑な心境のまま打ち切る事にした。

さてと、本題に戻ろう。

「たぶん、この辺りに落ちたのは間違い無い。だとすれば、後は風潰しに探すしかない」

考えを声に出す事で使命感を持たせ、ヤル気を上げる。

（まあ、そんな事をしなくても、この問題を解決（納得）するまで帰る気は無いけど……）

落下物探しを始め、数分が経過した頃、日は完全に沈み住宅街跡に深い闇をもたらした。

しかし、搜索を中断する事は無かった。むしろ一層、搜索意欲が湧いた。その辺りが普通の人の感覚と異なっているのは重々承知の上だ。それでもこの気持ちを抑える事は出来なかった。

胸騒ぎにも似た焦燥感が、僕を搜索へと駆り立てた。

そう、決して僕を駆り立てた感情は好奇心では無い。自分でもよく分からない焦り、早く見つけなければいけない、そうしないと……。

そんな根拠の欠片も無い感情が、僕を突き動かしているのだ。

（……それにしても、おかしい）

もう随分と長い間、探しているのだが一向に見つかる兆しが見えてこない。確かに落下の音は大きかったが、そんなに遠くで聞こえた訳でも無かった。それに、いくら建物が密集して建っているからと言って、音が乱反射して聞こえてきたとも思えない。そして、気掛かりな点はもう一つ在った。

住宅街跡は、その名の通り住宅が街のようにたくさん並んだ所だ。しかし、勘違いしてはいけない事が在る。それは……大きさだ。いくら田舎の古風な街の寂れた住宅街だったとしても、精々百数十メートルも在れば大きい方だろう。そしてここは大きさでも有名だが、

それでも高が知れている。

つまるところ、僕が言いたい事とは……一体どこまで住宅街跡は続くのか、という事だ。

(……一度、引き返すべきかもしれない)

しかし、決断できなかった。

妙な焦燥感が僕を後押しし、足を前に進ませる。まるで自分のしている行為を正当化するかの如く、ただひたすらに歩み、探し続けた。

在るとも、無いとも言い難い幻のようなモノを……。

二××六年六月七日 午後七時三十分(住宅街跡に入っておよそ一時間の経過)

どれだけの距離を歩いただろうか……？

仮に秒速一メートルで歩いていたとして、かれこれ彼は……と、不意に遠くの方で、何かの割れる音が聞こえた。しかし、歩みを止める事は無かった。振り返りもしなかった。どうせ老朽化した装飾が落ちて壊れた音だろうから。そんな事でいちいち止まっていたら、振り向いていたら、とつくに引き返している。

そして、どれだけのモノを見ただろうか……？

ゴーストタウンのような誰も居ない寂れた通りに置かれた、旧式の家具用品や使用済みの消耗品、使い古された生活用品の数々。そのどれもが今、探しているモノでは無い為、ただのゴミという風に脳内で処理する。

最後に、どれだけの時間を無駄にしただろうか……？

普段の今頃は……きつと夕飯を終えて、部屋に戻って一人で居る時間帯だろう。特に何かする訳でも無く、ただ上の空に虚空を眺めている時間。いや、きつとその短い時間で、その日に起きた事を整理しているのだろう。

しかしよくよく考えてみると、どれも質問の答えとしては不充分極まりない解答だった。

（まあ、自問自答である以上、納得〃答え、でいいのではないだろうか？）

自分に甘く、人に優しく。

信条、というよりは無意識下で行っている事なのでこの場合はプライド、という表現が一番良いのかもしれない。

と、感慨に耽^{ふけ}込んで、不意打ちの様に置かれた何かに躓^{つまず}き、豪快に転んだ。それだけならまあ、少なくともまだ良かった。最悪だったのは転んだ事では無く、転んだ先に水溜まりが在った事だ。それも何故か妙に温かく、暗いせいか（この液体自体に色が有るのか）は知らないけれど、この水溜り……色がドス黒い。

気分駄々下がりそのまま、何とか身体を起こし、地面に座る。

「はあ、痛いなあ……」

誰に言うても無く、溜め息と愚痴を漏らしながら身体を捻^{ひね}り、転ぶ原因となつたモノの方を見ると、そこには……。

「……って……えっ？」

今まで歩いた距離も、今まで見てきたモノも、今まで費やした膨大で無駄な時間も、答えになっていない答えも、信条の様なプライドも、先程の転倒も、そのせいで、どこからとも無く現れていた不思議で黒い水溜りに突っ込んで制服が汚れた事も、全てどうでもよくなるくらい、頭の中が真っ白になった。

しかし強いて言えば、今はそんな事どうでもいい、それが答えだった。

そう、僕は出遭つてしまった。ひたすら一生懸命になつて探していた、モノに……。

しかし、出遭つてはいけなかった。もしかしたら、あの不可解な焦燥感はこの事を予期していたのかもしれない。

そして改めて、見る。しかし、何も変わっていない。それから、自分の目を疑うように瞬きを繰り返した。けれど、景色は一ミリも変わらない。いや、正確には黒い液体が絶える事無く、溢れている。それだけが見て取れる変化だった。水溜りはどんどん大きくなり、

直ぐに足元まで来た。液体が地面に付いていた左手を浸した時、僕はやっと我に帰り、現状を理解する。

「えーっと、君、大丈夫？ ……冗談だろ……？」

僕は黒い液体の中に居る彼女に、急いで駆け寄った。

そう、惨劇の中心に居たのは夢に出てきた少女に間違い無かった。

小さい頃に転んで膝を擦り剥き、泣いた経験は誰にでも一回くらいは在るだろう。例に零れず、僕にも在る。そして、そんな時の為にいつだって母は絆創膏ばんそうこうを持って僕の傍に居た。それでも泣き止まない僕に、母がよく言った魔法の言葉が在る。

イタイノイタイノドコカニトンデケ。

当時の幼い僕は、その言葉の意味は分かっていたいなかっただろうけど、母が笑顔でそう言うとは何か元気になり、痛みも忘れて、また遊びに駆けて行っていた気がする。

そんな誰にでも在るような、他愛も無い記憶。それを今、思い出したのは、きつと止血作業という応急行為への逃避の念に駆られていたからだろう。

「くそつ、どこから血が！ 傷ばかりで分からない！ 全部止血……そんな時間あるのか？ どうする？ どうすればいい？」

状況は最悪だった。彼女の四肢には無数の擦り傷、身体には右腕の付け根から脇腹の辺りまである大きな斬り傷、おまけに意識は薄弱、というか無いに等しい。しかも悲しい事に彼女の状態が悪化した原因は、僕に在るかもしれない。

そう、あの転倒だ。あの転倒時、僕は間違い無く彼女に足を引っかけ転んだ。もっと言えば、あの時、僕は彼女を蹴ってしまった。

その結果が現状だ。彼女から流れ出る赤黒い液体が辺り一帯を染めていく。もう迷っている時間さえも惜しい。

（僕に出来る事から、やっていくしかない……。一先ひとず……。手足の方から消毒、止血の順に応急処置をして……。それから身体の方を………する？）

頭の中で工程を確認し、作業に取り掛かる。もう事態は、やるのかやらないのかでは無く、やるしか無かった。誰でも無い僕自身が作業は思いの外、難しかった。頭の中で思い浮かべた通りに作業は進まず、当然の如く焦った。しかし、ミスは許されなかった。

どう見ても、彼女の出血量は尋常じゃなかった。一刻も早い止血と輸血が必要不可欠なのは明白だった。けれど、此処にそんな高等器具が在る筈も無かった。と、なれば残された道は病院への搬送が最優先事項なのだが、生憎な事に携帯の電池が底を尽きかけた挙句、此処は圏外だった。そういう訳で止血を優先し、その後、急いで救急車を呼ぶ事にした。

（だから……この止血、ミスは出来ない）

記憶の片隅に眠っていた震災時の応急処置講座を思い出しながら、出来るだけ手際良く行う努力をした。

消毒液？ そんな物は無い。包帯？ それも無い。でも、お茶で湿らせたハンカチを代用した。そして幸いな事に手足の傷は身体程、深刻なものでは無かった。

そう、問題なのは身体の方だった。

見るのも避けたくなる様な、紅い直線的な傷と黒ずんだ染み。そして今も彼女の内から外へと止まる事（とど）を知らない液体は溢れ、地面を染め続けていた。

「よしっ……やろう」

決断。そうだ、彼女を救う為にこの一時間、歩き続け、好きでもない物を見続け、君と出会う為に転んだのだ。

そう思うと、何だか気分が楽になってきた。

人間とは実に不思議な生き物で、窮地に逆転の発想をすると、何だか何でも出来るような気になるのだ。これは一種の錯乱状態なのかもしれないが、これで救える命が在るのならば、僕はいくらでも壊れ、狂い、乱れ、酔い痴れよう。

（それが他ならぬ彼女の為ならば勿論、喜んで……）

僕の奮戦は十数分に渡り続いた。

かくして、素人の応急処置がどれ程通用するかはさて置き、僕に出来る応急処置は終わった。

しかし問題は山積みだった。例えば、地面に散らかった（彼女から出た液体の）後始末だとか、携帯に残った電氣量バッテリーであとどれくらいの通話が出来るのかとか、この付け焼き刃同然の応急処置が、電話を掛けに行つて戻つて来るまで持つのかどうかとか、様々な不安が僕には在った。判断を樂觀的にするのもいけないが、悲觀的に成り過ぎるのも返つて事態を悪化させ兼ねない。つまり今必要なのは、冷静で現実的な判断だ。

しかし時間的な猶予は無い。試行錯誤をして失敗したら次の手、という訳にもいかない。正しく僕は、一発本番の本氣ガチの決断を迫られていた。

緊張に包まれる中、静かにけれど迅速に答えを、より良い答えを模索する。模索開始から数秒後、始めに浮かんだ七つの手段から答えを二択にまで絞った。

一、彼女を此処に安置し、圏外の外まで僕は走り救急車を呼ぶ。
二、大声で助けを呼び、協力して彼女を此処から出し、近くの病院まで運ぶ。

どちらにもメリットとデメリットが同じように在り、当然リスクも在る。

因みに一のメリットは、彼女を無理に動かさない様にする事で怪我の悪化が防げる事。デメリットは電話を掛けに行つている間、彼女の身に何が遭つても傍そばに人が居ない事。それに加えて問題も在る。それは圏外の外を探す為に携帯を点けていないといけない事と、此処がどこかという事だ。

参考までに二のメリットは、この場から僕が動かなくていいという事。デメリットは彼女を動かすという事。そして問題はこの近くに徒歩で行ける病院が在るかという事と、そもそもこの周辺に人が居るのかという事だ。

リスクはどちらも五分と言ったところだが、果たして此処から目を離すのと、彼女を無理矢理動かすのは、どちらがより危険なのだろうか？ そんなものは専門的な知識を持った人か、医者ぐらいしか分からないだろう。むしろ此処で、僕が在りもしない危険を恐れ、てどちらの選択もしない、という事の方が余程問題だ。

（選ばなければいけない、どちらかを……）

そして、ここでもやはりミスは許されない。一瞬の判断ミスや、戸惑いさえも彼女の命に関わる。そう考えれば考える程、迷い、時間がただ流れていく。

例えばどんな結末が待っているかが、僕は選ばなければいけない。二つの選択肢から選ぶのか、それともどちらとも選ばないのかを、選ばなければならない。そして、その先の未来を受け入れなければならない。大切な事だから二回言おう。

例えばどんな結末が待っているかが、僕は選ばなければいけない。

しかし、意外な形でシンキングタイムは中断させられた。

異変に気づいたのは、選択の中心に居る彼女の真上に暗い影がかつてからだった。不思議に思った僕は上空を見上げると、信じられない物が目に映った。

僕が見た物、それは 何の前触れも無く倒壊を始めた、大量の家屋達だった！

彼の有名な大震災を体験した人でも真つ青な、そんな倒壊をしている目の前の家屋その一。大きさから察するに、全盛期はマンションかアパートだったのかを想像させる大きさの家屋その一は、下敷きになるこちらの事情などお構い無しで崩れていった。

一番手は規則的に造られた窓から降る、破片の雨。その次を落ちてくるのは、その窓を突き破って出てきた貸し屋の電化製品オフション。それに続くのは（どこが壊れたのか）学校の机大のコンクリートだいの塊が五、六個。そして最後は建物自体がこちら側にゆっくりと、穏やか

に傾いて来ている。

然も当然の様に起きた倒壊は、誰かによって仕組まれたものとは、考えつかない規模だった。正に大震災のプレイとも言えるその光景に唖然となり、言葉は出てこなかった。そして悲嘆や驚愕も無く、ただひたすらに思考は止まり、空回りしていた。

（えーっと、あれ？　こういう時はまず……どうするのですたっけ？）

目に映るのは、数秒先の未来。自分と彼女が潰れる未来のみ。それはまるで、暗い闇に閉ざされた住宅街跡のようだった。

彼は此処には、もう随分と前から希望だとか救いだとかいう類のモノが訪れていない。その代わり、と言っては何だが絶望やら、失望やら、孤独と言ったモノは腐る程に集まっている。そんな中での希望の光とは風前の灯に等しく、頭に浮かんだ打開策は一瞬で塵となる。

しかし、考え直す時間も秒単位しか残っていなかった。
（どうする？　どうすればいい？　何を優先する？　自分？　それとも……）

迫り来る物体、逃げ場の無い状況、自分よりも大切な彼女の命不意に浮かんだ単語は、僕の行動を決定付けた。何よりも大切な彼女を守るにはどうしたらいいか？　その答えは現状一つしか無い。きつと、この答えが正解に違い無い。そう信じて、疑わなかった。

僕は彼女の上に覆い被さり、しっかりと頭を抱えた。

そうだ、何も僕が助かる必要は無い。むしろ、僕だけが助かるなんて想像できなかった。今まで誰かの為に自分を犠牲にしようなんて思った事は無かったが、案外それも悪くないと今は思える。他ならぬ彼女の為ならば……。

そう、僕は捨て身の覚悟だった。助かる気なんて毛頭も無かった。それでも、彼女だけは守り抜くつもりだった。その結果、僕が死に彼女が助かるのなら、僕の死は大いに意味の在る死だ。ただ情性に満ちた日常を送り寿命で死ぬ、有り触れた受け身だけの死よりも幾

分かマシだった。尤も、死を美化するのは余り良くない。でも今回だけは見逃してもらいたい。洒落に成らない一生のお願いだ。

そうして僕は静かに、その時、を待った。

しかし、いくら待っても、その時、はやって来なかった。それどころか、落ちて来ていた筈の様々な物体が地面に届く事さえも無かった。

あのガラスの破片達は？ 電化製品のオンパレードは？ コンクリートの塊共は？ あの穏やかに傾いてきた、マンションもどきは一体どこに？ そして僕の決死の覚悟は？

数秒前の惨劇からは予想もつかない静寂の中、僕は当然の如く不思議に思い空を見上げた。

「そんな、まさか……！」

眼前には、先程まで僕を襲おうとしていた多種多様な物体など一切存在しない、ただの闇が広がっていた。

（もしかして……夢だったのか？ もしくは幻覚か妄想の類だったとか……？）

しかし、推測を覆す光景が目の前に在った。

不自然な形に空いた空間

丁度、倒れて来たマンションもどきと同じくらいの大きさの何も無い空間がそこに在った。それは住宅街跡の中で不自然、極まりない（又は異常とも言える）空間だった。

住宅街跡の名称の由来は、住宅が街の様に立ち並んでいるからその名で呼ばれていたもので在り、決してこのような隙間を含んでいたとは到底、考えられなかった。

例えるのなら、物質消失マジックの様な事が其処にだけ起きていた。それもテレビに出るような、著名マジシャンも顔負けの物質消失マジックが、だ。しかしただのマジックとは全く異なる点が在った。それはこのマジックには、タネも仕掛けも無い事だ。正真正銘のそこに在った物をただ消し去る奇怪マジック。

残されたそこには破片やゴミ、塵一つとして無い綺麗な空間が在った。それはまるで、其処には初めから何も無かったかのようにひっそりと不気味に在った。

それから立ち尽くす事、数十秒。有り得ない事実^{げんじつ}に少しずつ頭が慣れ出した頃、目の前の異常^{くわかん}を照らしていた星々の光や月の明かりを遮るように影がかかった。

（まさか……時間差！）

次の瞬間、予想に反した第二の異常^{じんぶつ}が降ってきた。

因みに僕が予想した最悪は、落下物は健在で今になって降ってきたという悪夢の様なものだった。その時は最悪の悪夢が現実に成らなかった事に胸を撫で下ろしたが、それも束の間の休息に過ぎなかった。そう、まだ異常は続く。

「はあ、間に合って良かったです」

降ってきた異常^{ソレ}の第一声は、意外にも日本語だった。しかしもつと驚いたのは異常^{ソレ}の格好だった。現在の日本では絶滅危惧種^{てんねんきんぶつ}、と言っても過言では無い‘着物’姿の女性が毅然と立って居た。それも（後姿だが）凄く様になって、だ。

（いや、それ以前の問題でこの人はどこから降ってきたのだ……？）
左右に聳^{そび}え建つ家屋を一瞥するが、どの窓も開いていない。それどころか、左右のどちらも優に五メートルはある建物だった。しかし目の前に君臨する異常^{ソレ}は確実に落ちてきたのだ。

いやいや、ちよつと待て。仮に落ちてきたのが正しかったとして、無傷でいられるのか？ もしもこの人の体が丈夫ならば、もしかしたら無傷でいれるのかも知れない。それでも、地面が凹まないなんて事が在るのか？

仮定の話、約五メートルの高さから質量（見積）四十キログラムの物体が自由落下しました。さて、問題です。この物体が地面に着く時、どれくらいのエネルギーを持っていてでしょう？

考え方：物体の質量×落下距離×重力加速度（一般的には九点八

メートルパーセカンド」落下エネルギー

答え：一九六〇^{ジュール}」。このエネルギー量がどれくらいのものか分かりづらいと思うので、分かりやすい比較を一つ。地球上で一〇〇キログラムの物体を一メートル持ち上げる時に必要なエネルギーの約二倍のエネルギーと同等。

前言撤回しよう。この人の身体がいくら丈夫だったとしても、無傷などあり得ない。

と、当たり前過ぎる結論に至った頃、目の前の異常^{ソレ}は僕という存在をやっと視界に入れた。

「えーっと、木花^{このはな} 佐久夜^{さくや}……様ですか？」

「えっ？ はい、まあ、僕は木花^{このはな} 開耶^{ひくや}です……けど って……」
腑に落ちない。目の前の彼女が僕の名前を知っている事も、様を付けて呼ぶ事も、話しかけてきたのに僕をスルーする事も。

しかし、僕は何となく分かっていった。だから特に咎める事も無く道を譲った。僕の名前を尋ねてきた時から、既に彼女の目が僕の後ろ、即ち横たわって居る彼女の方に降り注いでいたのは、何となくだが分かっていった。そして分かっていったのだ。彼女が重症の彼女を何とかしてくれると……。

僕の横を素通りして行った異常^{ソレ}は、重体患者の横に膝を突いた。ここから先は、もう僕にはどうしようも出来ない領域だと悟り、離れた場所からこの治療の行方を見守る事にした。

しかし異常^{ソレ}は僕の予期していた医学的な処置とは、全く異なる事を始めた。

「ちょ、ちよっと、待ったー！」

「はい？」

異常^{ソレ}はまるで、何か御用でも？ と、でも言いたそうな顔をしていた。むしろ、何か間違っているの？ という訝しげな表情をしていた。

「えっ？ えーっと……いえ、何でも無いです」

そんな堂々と振舞われたら、何故かこちらが間違っている気がし、引き下がってしまった。自分にはきつと見間違いだ、と言い聞かせ再び行方を見守った。

しかし、異常は先程と寸分違^{たが}わぬ動作をして見せた。やはり見間違いでは無かったと確信するも、彼女達の美しさに見惚れ、ツツコミを入れるタイミングを失ってしまった。

異常は倒れた彼女を抱き上げ、唇に唇を重ねた。傍から見ればキスでしか無いのだが、それを平然と異常はやった。そして、その瞳には何か確信めいたモノが見受けられた。まるでこれが最善の策の様に二人はずっとそのままだった。

二XX六年六月八日 朝

今思えば、どうして僕はあの崩壊から奇跡的に助かったのに、彼女を助ける選択を放棄していたのだろうか？ それどころか、消えた建物の方に気を取られて、彼女の事など軽く忘れかけていた。自らの無力さを嘆くのは同情の余地が在る。しかし、こればかりは自分で自分が嫌になる程、自分を恨む。何が、自分の命よりも大切な彼女の命だ？ あの時の誓いは、助かった途端に忘れてしまう様な軽い考^{おも}えだったのか？

違う。絶対に違う。それだけは自信を持って言える。そして誰にも否定させない。それに、これだけは確実に言える。彼女は僕の大切な……。

「佐久夜様……佐久夜様！」

夢現^{ゆめうつ}の僕を起こすのは、昨日、知り合った……着物^{ぎもつ}の彼女。

「ん？ ああ、えーっと……ウ、ウズ」

「鈍女^{うづめ}です。佐久夜様」

「そうだった、ごめん。ウズメさん」

「いえ、お気に為さらず。それよりも……瓊瓊杵^{ににぎ}様の事ですが」

二ニギとは、夢に出てくる少女の方で通称（いろんな意味で）

重症'の彼女、だ。

「二ニギ……あつ、そうだ！　あの後、一体どうなったのですか？」
「大変、危ないところでした……一命は取り留めました」

「……はあ、良かった」

あの前触れも無い倒壊事故から一晩が明け、彼女達は僕の家泊まった。流石に時間も時間だったのと、ウズメさんには二ニギについて積もる話が在ったので丁度、良かった。しかし、疲れていたせいか僕は家に着くなり寝てしまったようだ。そして今、ウズメさんに起こされた、と言う訳だ。

二ニギと言えば、かなりの重症だったのだが驚異的治癒能力と、ウズメさんの百パーセント医学的では無い治療のおかげで、今は睡眠中だが安定しているらしい。それと言うのも、面会謝絶'と書かれた紙が、彼女の寝ている部屋の扉に貼り付けられていたからだ。

しかもその部屋の前を通る度に、ウズメさんから、'ダメですよ、オラを纏まとった微笑みをされる始末だ。

（これじゃ事情を聞くのは当分、先だな……）

大方の見当は付いているのだが、やはり本人の話聞く方が何倍も信憑性が在る。それに、これはもう彼女だけの問題では無い。見て、知って、関わってしまった以上、もう知らない振りなんて出来ない。それが仲間だから、だ。

そう、僕は二ニギを傷付けた犯人を探す。それが途方も無い事だつて分かっているし、危険だつて事も重々承知の上だ。それに、もしかしたら彼女にとっては有難迷惑ありがためいわくかも知れないし、母さんやハル、クッシー、玉ちゃん達は反対するかもしれない。

けれど、それが彼女を放って置く理由には成らない。

きつと、みんなも分かってくれるはずだ。

大切を傷付ける罪深さ、大切を守りたいと思う気持ち、大切の傍二ニギに居たいという願い。

そう言えば、未だに分からない彼女との関係。でもきつと、無意識で優先するくらいだから、普通以上に親しい仲だったのは間違い

ない。それを忘れてしまう僕は相当のバカ野郎だが、分からないからと言って見捨てるクス野郎よりは余程マシだろう。

それにしても、今週は妙に不可解な事ばかり起こっている。以前は一週間に一回単位で、三週ほど続けば良い方で、今週の様な事は稀まれを通り越して異常だ。一体全体これからどうなるのだから、さっぱり見当もつかない。ただ、嫌な予感だけが常に消えなかった。

僕はまだ知らなかった。この時、既に僕は非日常へと踏み込んでいて、もう引き返せない所まで進んでしまっていた事に……。

木花開耶物語 4 話 前編（前書き）

4 話は少々長めになりそうなので、前編と後編に分けることにしました。

ちなみに後編は現在執筆中なのですが、全く書き終わる気がしません（泣）。

木花開耶物語4話 前編

PROLOGUE

二XX六年六月八日 昼

「サクーっ、今日はどこで食べるー？」

まるで何事も無かったかのように、陽気な口調でやって来るクッシー。

「あつ、そうだ。今日のお弁当は、何と私の手作りなんだ！」

そんな彼女の三メートル後方には、せかせかと机の上を片付けている玉ちゃんが見えた。

「玉ちゃんのタコさんウィンナーに対抗して、私はカニさんウィンナーを……」

ガタンツ

クッシーとの会話を絶ち切るように、立ち上がる。勢いよく立ち上がったせいか、椅子が倒れてしまった。

乾いた空気の中を椅子の倒れた音が反響する。周囲の視線が僕等に集まった。

「ごめん、クッシー。今日は、お弁当忘れたから食堂に行くよ」

しかし特に構う事も無く、用件を告げ、教室を去った。

「そっ……じゃあ、ね」

僕の後姿を茫然と眺めながら呟く、彼女の声は何故か震えていた。

南海市立南海高等学校（つまり此处）には、食堂と購買が共に存在する。

特に深い意味は無いようだが、創立以来ずっと在るらしい（校長談）。

しかも食堂と購買は敵対関係では無く、むしろ協力関係に近い。ある奴から聞いた話では、食堂で使える食券を購買で売っていたり、購買で買った弁当を食堂の日替わりメニューにしていたり、更

には食堂のおばちゃんと購買のおじさんが一緒に帰っているという目撃情報も在るらしい。

まあ、そんな事は正直どうでもいい事だ。誰が誰と仲良くしようが、日本では決して罪では無い。それこそ誰かの邪魔をしている訳でも、何かの迷惑になっっている訳でも無いのだから、訴えようも無い。いや、そもそも訴える必要性すら無い。

そんな事を考えながら、食堂への道を歩いていた。確かにその筈だったのだが、目の前は全く別の場所。

この理解不能な現状に対して、不思議に思う暇も、疑問に思う事も無く、容易に理由が分かった。どうやら考え事に夢中になって、階段を下がり忘れていたらしい。

現在地は、食堂の真上。正確には、旧二年A組の教室前だ。

（食堂は……まあ、いいか。別にお腹減って無いし……）

今の僕には食事よりも、ハルが休んだ理由を満たす答えの方が欲しい。

ハルは何故、休んだ？

反省文が嫌だったから？

いいや、そんな事は無い。むしろやって来る筈が無い。どうせ……

「あー、なんだ。やってみたのですが、デキがイマイチでさー」

「結局、やって無いんでしょ？」

「流石、クッシー。その通りだ」

「威張^{いは}って言うな！」

あははは。

こんな具合になる事を予想していたのだが、見事に裏切られた。それはもうあっさり、しつかりと。ここまで完璧だと逆に清々しい程だが、どうもそんな気分には成れない。

そう、僕の念頭に在るのは昨夜の事件。被害者は二二ギ、犯人は依然として逃走中の（と言っても、警察に申請したりしている訳では無い）アレだ。現段階で犯人の特徴は全く掴めておらず、今は被害者である二二ギの回復を待っている。

それよりも気掛かりなのは、犯人の目的だ。もし二二ギを襲った理由が無い、若しくは無差別だったとすれば、ハルが襲われる可能性も充分に考えられるのが現状だ。現時点では可能性の域を出ないこの予想が、本当に起きない事を祈るぐらいしか僕には出来ない。けれど、妙に胸騒ぎがして収まらなかった。

二XX六年六月八日 同刻 とあるビルの屋上

晴天の下、強い風が颯爽と吹き荒れる其処に、天国と地獄（携帯の着信音）が虚しく木霊する。粋な計らいか、曲に合わせてバイブレーションが動く。

しかし、持ち主は軽快な音楽とは裏腹に頭を抱えていた。

「あれ？ えーっと、どのボタンだったかなあ……？ うーん、コレかな……？」

と、電源ボタンを押してしまった屋上の生物は、耳に当てた携帯電話からツー、ツーという音しかしない事に首を傾げた。

「あれー？ おかしいなー？」

本来なら、この向こうからは愛しの彼の声がする筈だったからだ。しかし、彼の声は一向に聞こえてこなかった。

されど、屋上の生物は自分が間違っている等とは全く考えていなかった。

「まあ、いいや」

最終的に、彼に買って貰ったばかりの新品携帯は、遊び飽きた玩具のように放り投げられる始末となった。

その数十秒後、再び着信。

放り投げた携帯に急いで駆け寄り、今度はこっちと言わんばかりに、先程とは逆のボタンを押す。すると……。

「お、やっと繋がった。……さっき、右側のボタン押しただろう？」

「ううん、コレがおかしいの。私は言われた通りに押したもん」

携帯の向こう側では、それは深い溜め息が漏れた。

自分の非を全く認めないどころか、責任を買ったばかりの携帯に

押し付けるとは、もうお手上げだ。

（こりゃ、手っ取り早く用件だけ済ますに限るな……）

「で、目的の奴は居たのか？」

「ううん。でも……」

「でも？」

「面白そうな物が在ったよ」

またも深い溜め息が携帯の向こう側から聞こえたが、当の本人は御構い無し。どうやら、その面白い物とやらが相当お気に召したようだ。

「あつそう。……で、その玩具はコレよりは保ち^もそうか？」

「うん、ハル様」

ノンフィクション・マイライフ
「非現実的日常」

二XX六年六月八日 夕方

日は西へとゆっくり傾き始め、それに比例するかのように気温のグラフも下降線を辿っていた。とは言ったものの、一や二の微妙な変化を察知するほど、僕等は敏感な肌を持ち合わせていない。だから結局のところ、熱い日である事以外の何物でも無かった。

そして僕等の掃除に対するモチベーションも限界に達する直前だった。

「……暑い」

「うん、そうだね」

「……はい、そうですね」

いや、訂正しておこう。もう限界だった。

彼は、掃除を始めてから現在に至るまでの五、六分間はこんな感じのやり取りの繰り返し^{エンドレス}となっていた。それは到頭^{とうとう}クッシーの頭が過熱したのか、それとも僕に幻聴が聴こえているだけなのか、はたまた全員が同時に白昼夢でも見たのか、という光景だった。

要するに僕等は狂っているのだ。

原因は一概に暑さとは言えないが、要因の一つとしては充分だ。

けれど、やはりしっくりこない。暑いのは今日に始まった話では無いし、年々暑くなっているからと言って今日が過去で一番暑い訳でも無い。

しかし事実、僕等は狂っている。

同じような会話を延々と繰り返しても誰も止めないし、きっと掃除は終わっているのに誰も帰ろうとしないし、何よりも誰もハルの心配をしていない。それどころか、話題にすら上がらない。これを狂っている、と言わずして何と言うのか。

そんな何かするでも無く、上の空で屋上に居続けて早二分が経った頃、今まで僕等を苦しめてきた日の光が唐突に陰った。その時、皆の視線が一斉に空に向く。しかし空は澄み渡っていて、冗談でも御世辞でも無く、快晴の青空だった。

それで我に帰ったのか、クッシーが口を開く。

「掃除……終わったよね？　じゃ、帰りますか」

「えっ……あ、はい」

その不意打ちの様な発言に、玉ちゃんが少々遅れて返事をする。そして二人が出口へと歩き始める中、まだ僕は空を見上げていた。何故か、陰った理由が空に在る気がして空を睨んでいた。その内、答えが降ってくる気がして淡々と睨んでいると……

「サクっつ、置いてくよっ？」

と言う、クッシーの声。僕は視線を落とし、出口を見る。二人が手を振って待っていた。

「……今、行くよー」

軽く返事をして、再び空を見上げる。しかし空は晴れ渡ったまま、やはり雲は一つも無かった。

（気のせいか……？　いや、気のせいだ）

そう、自分に言い聞かせて僕は空へと背を向ける。すると、いつも似た風景が目の前に拡がっている。ただ一つを除いて、だが。

もう、それだけでいいじゃない

空から声が降ってきた、そんな感じの音がした。どこか掴みの所の無いその声は、一体誰に向けて放たれたのか？ 僕か？ そうだとしたら、一体誰が？ クッシー？ それとも玉ちゃん？ いや、二人は前に居る。じゃあ、誰が？

確かめようと振り返った時、僕の目の前を突風が吹いた。

それはまるで、とても大きな物……例えば飛行機とかそういう類の物が、目の前を駆け抜けた時に生じる風圧に似た、そんな風だった。

「サクっ！」

「こ、木花君！」

二人が慌てて駆け寄って来て、初めて気がついたのは自分が地面に座っていた事だった。

「大丈夫？ 急に座り込むから、体調でも悪くなったかと……」って大丈夫？」

心配して話しかけてくるクッシーの後方で、慌てふためいて右往左往している玉ちゃんが可笑しくて、つい見入ってしまった。

「えっ……ああ、うん」

「良かったー 一時はどうなるかと……」

彼女が胸を撫で下ろすのを見て、後方の彼女も状況を察したのか、安堵の溜め息を吐く。

「えーっと……それよりも、僕って急に座り込んだの？」

「へ？ 覚えてないの？ こりゃ、マジでヤバいかも……」

と、妙に変な心配を掛けてしまいそうだったので、これ以上の質問は控える事にする。当たり前だが、空から声が聞こえた、などと口走った日には精神科への直行は免れないだろう。

そして、不意に見上げた空は赤く染まり始めていた。

日の容赦無い照りから、幾分かマシになった放課後。グラウンドは先生の怒声と生徒達のやる気の声で満たされ、校内も吹奏楽だか、管弦楽だかの演奏で賑わっている。唯一、静かである筈の図書室さ

えも監督不在で無法地帯と成っていた。

そんな頃、僕は一人寂しく大通りをゆっくりと歩いていた。

（あの陰は？ あの声は？ あの風は？）

そんな疑問が頭の中をぐるぐると廻り、僕を掻き乱していた。思いつく限りの答えを出し切っても、全く以て納得しない自分に少々嫌気を感じながらも、あの時の事を鮮明に思い出そうとする。

「……つと、ととつ？」

「ひゃ、きゃあ！」

バタンツ

目を閉じて歩行するのは、危険だ。そんな小学生でも（下手すれば三歳児でも）分かるような当たり前を見落としていた僕は、見事なまでに悪い例を世に見せつけてしまった。

要約すれば、転んだ。より明確に表すとすれば……段差に躓いて、前から歩いて来た人を巻き込んで転んでしまった。つまり、弁解の余地も無い程に僕が一方的に悪かった。

「す、すみません。大丈夫ですか？」

と、言いながら先に地面から起き上がろうと、手を突いた。

「ん？」

その時、異様なモノを掴んだ。転んだショックで多少朦朧としていた意識は、ソレを平気で掴んでしまった。ソレの形状は強いて言うならば、プリンの様に軟らかかったのだけは明瞭に覚えていた。

しかし、その行為が事を思わぬ方向へと進めていく引き金となった。

「いやゝ 最近の若者は結構、大胆不敵だねゝ」

と、言われも無い見解を述べる声がしたのは、紛れも無く僕の下からだった。駄洒落でも、冗談でも、妄想でも無く、確かに声がしたのは下からだった。

背筋が凍ったかの様な、悪寒が僕を包んだ。恐る恐る、視線を落とすが既に悪い予感しか無かった。

「まあ、襲われるのは私に魅力が在っての事だから嬉しいんだけど

……流石に時と場所くらいは選んで貰いたいね。」

漸く意識がはつきりし、自分の置かれている状況を把握できた。とは言っても、そんな冷静になっている場合では無かった。

僕は巻き込んでしまった人の上に馬乗りに跨り、更に地面を突いた筈の手は、その人の胸を堂々と掴んでいた。そしてそれを視認した瞬間、血の気が引き、その場に凍りついた。

（あれ、これヤバくないか？ 何とか弁解しないと……。いや、待てよ。この状況、どう見ても僕が悪くないか？ 前方不注意と公然わいせつ……）

軽く警察沙汰だった。それもまだ、電車の中とかそういう勘違いや冤罪にされやすいシチュエーションでは無く、普通の路上で、だ。しかし、とりあえず幸いだったのは、被害者様が悲鳴を上げなかった事と、この近くに偶々僕等以外居なかった事と、南海市の警察署が此処から遠い事だった。

だが、安心も出来なかった。事実、幸いだった事は直接的な問題解決にはあまり関係無いからだ。つまり、大袈裟かもしれないがここからの言動一つひとつに僕の未来がかかっているという事だ。因みにこんな所で、まだ見ぬ輝かしい未来を失う気は更々無かった。

そんな御世辞にも立派と言え無い決心をした頃、被害者様が軽い感じで話しかけてくるのだった。

「コノハナ サクヤくん、とりあえず退いてくれると助かるんだけど……」

「え？ あつ、すみませんでした」

そういえば、ずっと彼女の上に乗り続けていた事に全く気づかなかった。それに輪を掛けて胸も掴んだままで、どう見てもこれから弁解して如何こうなるとは思えなかった。そして、誤解と分かって貰える確率（と言うか可能性）がボーダーを下回った、そんな気がした。

ネガティブオーラを無意識に放出しながら、静かに腰を上げ、彼女の上から退く。

しかしこの行為もまた、問題の解決には直接関係は無い。むしろ、
解決云々如何とかの前にすべき事だったと、反省中。

「どうも……よつ、と」

そう言つて、体操選手のような身の熟しこなで起きあがる彼女。ふと、
彼女のショートカットの髪が揺れたのが目に留まる。その何の変哲
も無い動作が、何故か魅力的に感じた。

（理由はおそらく……女性的な魅力……だろう）

実際、僕の周りで女性と呼べるような人が、母以外に居るだろう
か？ ああ、そういえばウズメさんはこっちの類かもしれない。何
にせよ、僕は女性と呼べる人に対しての免疫（と言うか耐性）が無
い。もしくは低いようだ。

そんな現状どうでもいい事を、彼女を見て改めて感じていた。
「ん？」

僕の視線に気づいた彼女が、不思議そうに首を傾げる。

（まあ、無理も無い。結構、凝視してたし……）

またも墓穴を掘る僕。弁解どころか、どんどん悪い方へ悪い方へ
と進んでいく。正に負の連鎖に嵌はまった愚か者の様だった。

と、その時、ある名案を思いついた。これはいける。何の根拠も
無い自信が湧いてきた。そして何のシミュレーションもしないまま、
僕はその名案とやらを実行するのだった。

「……えーっと、さつきはすいませんでした。あの、その。……ぶ
つかったのも、さ、触ったのも事故で……」

「あー、胸の事？ 別にいいよ 減るモンでも無いし」
「えっ？」

即答。訊き返したくなる程、スムーズな解決に呆氣にとられる。
そんな僕に構わず、彼女は続ける。

「そんな事より、ほら、行こう」

「はい、何処へ？」

「そりゃ……ヒ・ミ・ツ、でしょ」

余談だが僕の閃いた名案、それはよくよく考えてみれば途轍も無

くバカな作戦だったと思う。なぜならその名案は所謂いわゆるこの、それが出来れば苦労していない、と一蹴されてしまふ、身も蓋も無い名案だった。

偶たまに疑問に思う事が在る。小さい頃は、どうしてあんなにも明日が輝いて見えていたのか。その問いに対する解答を言えば、そんな事に理屈も理由も無い、だ。だが、強いて言えば、何も知ら無かったから、そう言われればある程度、納得がいく。

つまり、明日も今日と同じような事の繰り返しなど知らず、明日は何か違う事が、明日こそは何か起きる、そんな理想を抱いて生きている訳だ。それを若さと言うのか、幼いと言うのかは置いといて、そんな頃がどんな人にも在ったのかについて考えたい。

とりあえず、僕には在った。何の根拠も無く、明日は今日より楽しくなると信じてた時期が。そして、それは知らぬ内に止めてしまった。原因が何だったのかは覚えていない。ただ覚えているのは、あの最低放浪親父が帰って来ると信じて待っていた、幼き日の残酷な僕が居た事だけだった。

学校を出てから約三十分が経過し、屋上で見た青空とは正反対の赤い空が頭上に拡がっていた。日が沈み出した事で夕方の気温は昼間に比べ、随分と過ごしやすいくところまで下がっていた。しかしながら、春の心地良い風から、夏の生温かい風に変わりつつある今日この頃、この街には熱気が籠こもっていた。朝も昼も夜も外は例外無く暑く、正に生き地獄と化していた。

そんな頃、僕は被害者様のお願いに従い、途方も無い付き添いをさせられていた。

「……あの、どこに向かつてるんですか？」

本日、三回目の目的地確認。因みに一回目と二回目の返事は、寸分違わず同じだった。三度目の正直、という諺ことわざが在るように少々な期待を抱いて尋ねるが……。

「んー？ ヒ・ミ・ツだよ」

この一点張りで、会話が全く成り立たないのが現状。それに加えて、目的地は依然として不明。推測もこの人の行動からは不可。

どうやら、道に迷ったらしい。しかも目的地の場所も覚えていないらしい。彼女は、秘密、と言っているが、これは一種の強がりの様なものであつて、僕をからかっている訳で無いのは理解できたし、その心理状態に陥るのも少なからず分かる。

さて、まさか自分の安請け合いがこんな事態を招くとは、誰が予想できただろうか。そもそも無駄にバカなもの、必要以上に頭が良いのもの、最高に無口なもの、言動が電波さんなのも困るが、この人はそれとはまた違う意味で困る。

（いや、一先ず落ち着くべきだ。冷静になれば、愚痴を言っても状況は変わらない。思考を切り替えよう）

とりあえず、南海市はそんなに広く無い。浅間区と、大室区と、伽藍区がらんの三区で構成されたこの南海市の総面積は大体一五平方キロメートル未満だ。建造物も、観光地も、名所も、全く無いこの辺鄙な地で、待ち合わせの目印に成りそうな場所と言えば……あそこしか有り得ないのだが、其処そこはもう通り過ぎた。いや、それ以前の問題で迷うような所では決して無い。余程の方向音痴や、天賦てんぷの才で無意識に道に迷う人でも、間違いなく辿り着ける其処は完全に候補から外れていたが、よく考えれば南海市には其処くらいしか近未来の物は無いではないか、という田舎の発展途上事情はさて置き、恐る恐るダメ元で尋ねてみる。

「……あのー、もしかして駅に用ですか？」

「……そうだった、駅だった。よく分かったね」

こうして、僕の悲惨な付き添いは一転し、意外な場所への道案内へと変わったのだった。

南海市は田舎だ。

それはどこと比べて、という訳で無く平均的に見て、だ。

まず着目する点としては、コンビニの数だ。三区在るのに対して、コンビニは二つしか無い。言うまでも無く不便極まりない状態だ。しかも、二十四時間営業では無い。

次に自然の占める度合い。市の南側一帯は海なので浜だ。しかし、それは北側がアスファルトだらけという意味では無い。北側にはまづ南海高校が在るのだが、位置は山の中腹だ。つまり、北は山、南は海と超自然的な街だ。

最後に知名度。これははっきり言って、書店で売っているような地図帳には地名が載らない程の低さだ。かなり専門的で細かい地図帳ならもしかしたら、というレベルの問題だ。

それに加えて、わざわざ此处を尋ねるような有名で特殊な物も無いこの街は、当然の様に閉鎖的だ。来訪者を迎える気なんて更々無い。例えば大阪や京都、沖縄の人なんかと比べれば一目瞭然だ。

田舎で、発展途上で、閉鎖的で、超が付く程、自然に優しい（誰得？）我が街は、残念ながら墮ちるとここまで墮ちている、そう言われても仕方が無い……筈だった。

「えゝ、何コレ？」

目を輝かせ、未知の物体に心を躍らせている被害者様は軽い足取りで僕の前に行く。

「あー、それは駄菓子屋ですよ」

自分の街に在りませんか、と訊こうとして止める。なぜなら、それは田舎発言だからだ。田舎ではよく在る事だが、自分達の街で少し有名な店はどこにでも在ると勘違いするタイプの田舎発言だ。

自称・駄菓子屋のボロボロになった看板を横目に、胸を撫で下ろす。

（発言はよく考えてからしよう……）

そう、固く心に誓うのだった。

そんなこっちの気も知らず（まあ、分かる筈も無く）、被害者様はどんどん道に行く。そしてまた何か見つけたのか、奇声にも聞こえる興奮染みた声を発している。

「わゝ、スゴイ〜!」

やれやれ、と思う反面、こんな街でも楽しんでもらえて良かったと感じつつ、どうしてこんな事になったんだっけと思いつながら、被害者の指さす方を見た。

「あつ……」

「ね〜ね〜、コレ何の入口〜?」

僕の傍らでピョンピョンと跳ねながら、彼女は尋ねてくる。それは、もう不思議そうに其処を眺めながら。

「此処は……」

「ココは?」

次の言葉が出なかった。いや、正確には出さなかった、だ。何と表現したらいいのやら、と柄でも無い気遣いよろしく、先程決めた縛りを鑑みつつも、やっぱり此処はああ呼ぶしかないと断念する。

「此処は……住宅街跡の入口です」

「……」

無言。意外性が高過ぎる反応だった。

この人とは初めて会ったが、この数十分間でどういう人かは大体分かったつもりだ。

まず、この人は空気を読まない。もしくは素で読めないのかは定かでは無いが、特に酷かったのは……ああ、思い出したくも無い。

次にこの人は、筋金入りのバカだ。日常生活にこそ支障は来さないが、おそらく学校などに通っていたとしたら、問題児は確定だろう。良い例として、彼女はおそらく地球は自分を中心に回っていると考えているのではないかと思われる。

最後にこの人は、常に喋っている人だ。それこそこちらから話しかけなくても喋っているし、こちらが返事をしなくても喋っているとにかく、喋っている人なのだ。

そんな人が黙ってしまった。それが意味するのは、つまり想定外の出来事の発生。もしくは、勿体振ったわりには（いや、そもそも

勿体振った訳では無いのだが……）拍子抜けだった為の思考停止（彼女に思考というモノが在ればの話だが）かもしれない。

「……」

沈黙は続き、当然誰も居る筈の無い住宅街跡の入口は静寂に包まれた。ゴクリ、と僕の息を呑む音が自棄に大きく聞こえた。次の瞬間、予想通り予想外な発言で彼女が沈黙を破る。

「おお、ココがあの住宅街跡の入口ですかー！」

と、何故か大好評の住宅街跡。もう意味不明を通り越して、笑えてくる。

「……なんですよ」

「ん？」

「そうなんですよ！ 此処が彼の有名な住宅街跡の入口なんですよー！」

彼女の無駄に高いテンションに同調。無謀過ぎる行動に出てしまった。しかし……。

（ヤバイ、ちょっとコレ楽しいかも……）

等と末期まで堕ちてしまった僕と、始めから堕ちている彼女。あの意味で僕等は合っているのかもしれない。偶には自棄になったって良いじゃないか、そんな考えが僕を後押し、このままのテンションをキープする事に努める。

さて話が戻るが、さっきとは打って変わった僕のテンションに、普通の人なら退くのだろうが……。

「へー、ココってそんな有名なんだ」

と、全く動じない彼女。分かつてはいたけれど、やっぱりこの人……バカだ。

そう言えば、話が前後する事になるのだが、何故、僕達が住宅街跡の入口に居るのかの経緯を話していなかった。そんな改まった話では無いのだが、一応。

僕と彼女が出会った（事故った）場所が、駅から学校へと続く大

通りの約中間地点。それから彼女に連れられ、学校側（駅とは完全に反対方向）へと向かい、学校を通り過ぎ、山の山頂まで上がり、東側へと下った所で、目的地の指摘をし、駅へと向かった。その道中に住宅街跡の入口（北端）が偶々在った訳だが、中々に無駄な時間を過ごしたと思える。特に……いや、止めておこう。何もかもが無駄だった訳じゃないし、楽しくなかった訳でもないし、何よりも気が紛れた。そして決心もついた。

「へー、ココが住宅街跡か。ホントに何にも無いね。」

僕の三メートル前方を歩く彼女は、スキップをする様な勢いで住宅街跡を出口（南端）へ向かって行く。その光景を臆気に捉えながら、後ろをのんびりと付いて行く。

「住宅街跡の入口あつちに行つたのは初めてだけど、住宅街跡こつちに来るのはこれで二回目かな。」

「へー、そうなんですか。」

どこがあつちなのか、こつちなのか、ツツコミどころとツツコミたい気持ちは在ったが敢えて無視スルー。簡単な相槌で済みます。しかしそんな事も全く気にせず、会話は進行する。

「前に来た時は飛んで来しきた、暗かつたから、こんな感じとは知らなかつたな。」

（とんできた？ 方言か？ まあ、いいや）

と、少々の疑問を抱きながらも、あつさりと流し、我に戻ったところで、この勝手に始まった勝手過ぎる話題に乗ってみる事にする。「そうなんですか。……因みに一回目っていつ来たんですか？」

「うーんとね。昨日……だったかな？」

「昨日……ですか。」

「うん。けど、用もすぐ済んだからさつさと帰っちゃった。だから、しっかりと来るのは今日が初めて。」

本当に楽しそうに微笑む被害者様の傍らで、僕は浮かない表情かたわをしていた。しかしやはり予想を裏切らないKYさで、彼女はほとんど

ん前へと進んで行った。しかも鼻歌を口ずさみながら。因みに、曲は……現状と何の関連性も感じられない「海」だった。

とりあえず僕等は歩き続け、気がつくと住宅街跡の出口が目と鼻の先に在った。そういえば丁度その頃、日が西の空に沈むのを二人で見送った。彼女が太陽に手を振るのを見て、苦笑しながらも、昔の自分を見ている様で目を逸らした。

何もかも無条件で信じていた幼き日の僕

そんな自分の愚かさに気づいたのは、父親が約束を破ったあの日。世界は僕を中心に廻っているのでは無い、と気づかされたあの日。そして、自分という小さく、愚かで、弱い存在を実感した日だった。それ以前の僕は少なからず、幸せに生きている人達、と呼べる人種だっただろう。日々が充実していて、何の不自由も無く、思うまま、望むままに動いていた世界。そして、いつだってその中心には自分が居て、それ以外は考えられなかった世界。常に自分が優先で、周りなんて視界にも入って無くて、でも独り^{ひと}は嫌いで、いつの間にか人に従い、人を従える上下関係だけの世界。そこで勘のいい奴や、察しがいい奴は気づく、世界の中心に自分は居なかった、と。

けれど、僕は違った。いや、正確には違う。僕は最初から知っていただけだ。世界の中心に人は居ない。在るのは……だって。

（あれ、何だっけ？）

「わーい、イチバンー！　コノハナ　サクヤも早く、早くー！」

と（悪気は無いだろうし、計画的行動はこの人には無理そうだから、おそらく素なのだろうけど）、邪魔されて、我に帰る。前方数メートル先にピョンピョン跳ねる（ある意味）規格外生命体を発見し、溜め息を吐いてから小走りで駆け寄った。

「そんなに急かさなくても、あと少しで駅ですよ」

「もう、そんな釣れない事、言っつゝつまんないじゃん」

「はいはい、すみませんでした」

「ホントにそう思ってるの？」

「えーっと、そうですね……スズメの涙くらいは思ってますよ」

「へー、スズメって泣くんだ」 知らなかった」

言ってからなんだが、もっと彼女にでも通じるような言い回しが在ったのではないだろうか、と模索してみるが、既に後の祭り。僕が今から説明しても、しなくても、たぶんもう手遅れだろう。

「んー、スズメが泣くなら他の動物達も泣くのかな？ あー、イヌとかネコとかも泣くのかな？」

そう、既に彼女の頭の中は動物が涙を流す等などという、ファンタスティック極まりない妄想で溢れていた。そもそも動物は鳴くだろうが、泣きはしない。だからスズメの涙も言葉の綾だ。

（いや、待てよ。もしかしたら、言葉の綾も通じないんじゃないか？）

とりあえず、今回の一件で分かった事は、彼女に諺ことわざや比喩ひゆの類は通じないという事だった。

と、まあ、予期せぬ事から、予期していたのに回避できなかった事も含め、様々な事が在った訳ですが、何か忘れていないだろうか？ そうだ。これだけの時間、一緒に居たにある事を聞き忘れていた。

そう気づいたのは、住宅街跡の出口を西に進み、線路沿いの通りに出て、駅が肉眼で確認できる位置になってからだった。

我が事ながら、どうして今まで気づかなかったのか、不思議でしようがないその問いは、本来なら出会ってすぐにも確認すべき事柄だった。けれど、結果として別れる前に思い出したので、これ以上自分を罵倒するのは止めた。

「あのー、そういえばまだ訊いてなかったんですけど……」

「んー？ 何を？ スリーサイズ？」

「とりあえず、初対面で訊く事じゃないですねー」

うーん、と頭を抱える事、三秒。閃ひらめいたらしく拳手をしてきた。仕方がないので、指名。

「はい、分かりました！ 答えは……私に彼氏が居るか、居ないか、だ！ ちなみに、彼氏じゃないけど、心に決めた人は居ます」

「えーっと、違^{ちが}うし、そんな情報、どうでもいいんですけど……」

えー、と項垂^{うなだ}れてから三秒後、性懲^{しょうこ}りもなく、挙手。またまた、仕方がないので指名。

「はい、今度こそ分かりました！ 答えは……私の歳、だ！ ちなみに……」

「はいはい。全く違いますし、訊く気も、意識した覚えも無いですから」

「じゃあ、なんなの？」

改まって訊かれると、なんと答え辛い解答だった。端的に言えば、失礼を通り越して最低という評価を貰い兼ねない質問には違いなかった。それでも、今後の事も踏まえて、これだけは訊いておかないと不味^{まず}かった。だから、仕方なく彼女に訊く事にする。

「失礼ですが、貴女^{あなた}の……名前は何ですか？」

「私？ 私の名前は登陽^{とみや} 毘美^{ひみ}！ トミ、ミヤ、マッサー、マサミン、呼び方は何でもいいよ」

やはり彼女は、僕の常識^{よそづ}をあつさりと裏切ってくれる。予想が外れた脱力感と、無駄にかかっていたプレッシャーが消え、気づいたら笑っていた。すると、彼女も何故か笑ってこっちを見ていた。

（……さて、と。彼女の事、何て呼ぼうかな）

そんな楽観的で前向きな事を考え、駅へと入った。その先に何が在るとも知らずに……。

木花開耶物語4話 前編（後書き）

あつ、書き忘れていましたが、この物語はフィクションです。実在する……（中略）……ご了承ください。

木花開耶物語 4・2話（前書き）

読みにくいところもあるかもしれませんが、最後まで読んで頂けると幸いです。

木花開耶物語 4・2話

あらずじ……

この物語は、第四話 P R O L O G U E の空白の昼休みに何があったのかを主人公・木花^{このはな} 開耶^{さくや}の視点からお送りします。

二××六年六月八日 昼

友達からの昼食の誘いを断り、食堂に向かって歩いていたはずが、気がつくと目の前は旧二年A組だった。

（別に食堂に用があつたわけじゃないし、ここらで暇でもつぶそうかな……）

ここは去年まで二年生の階だった。正確には夏休み明けの朝礼で、二年生の教室移動が発表されるまで。公^{おおやけ}に理由は発表されていないが、噂によると自殺があつたそうだ。原因はいじめ。それ故に公表できなかったらしい。しかしそれだけでは教室を替える必要は無いのは明らかだ。これも噂だが、それを不思議に思った生徒が二年A組に無断で侵入したらしい。そこで生徒が見たものは天井に深々と刺さっている釘と、床と壁にびつしりと掠^{かす}れた赤いペンキで書かれた、許さない、という文字らしい。あくまで噂のためどこまでが本当かは定かではない。しかしこの噂が流れた後、流した者といじめていた二年A組の一部の生徒が退学になったらしい。聞いた話によると、失踪したらしい。そこでまたまた公表できず、退学ということになったらしい。

当時も今も変わらないのは、事を大きくしないためにこの教室の出入りを全く規制していないところ。仮に入つたとしても、特に罰せられはしない。それに退学（失踪）した生徒のおかげで、呪いだとか自殺した生徒に憑依されるとか、南海高校七不思議に追加だとか、心霊スポットだとかで、入ろうと言い出す生徒は、ここでは変人扱いだ。

そんなことがあり、この辺一帯には人があまり寄り付かない。幸か今は生徒の多数が昼食を取っているため廊下にいる生徒もいない。
(今のうちに……)

未知を目の前に、恐れること無く踏み出す。ドアに手をかけ、押す。意外にも入室を禁じていないという噂は本当だったらしい。ドアには鍵すらかかっていなかった。あっさり開いたドアの奥に進み、静かに閉めた。

突然だが、幽霊は存在しないと思う。さらに神様も天使も悪魔も天国も地獄も異世界も存在しない。そう思う明確な理由はないが、一つ定義づけるとすれば、見たことがないから。逆に言えば、見れば何でも信じるということだ。こんなことをこのタイミングで思い出すのは、きつと一人で入ったことを後悔したからだ。

入ったはいいが、明りが無い。窓は外から中が分からないように木の板が隙間なくはりつけてあるため、太陽の光や廊下の明かりも入らない。教室に必ずある電灯は、誰の仕業か老朽化のせいかどうかは知らないがスイッチを押しても点かなくなっている。かろうじて、ドアの隙間から光が入るため出口に迷うことはないが、これでは暇をつぶすところではない。探索もとい噂の解明を中断し、ドアに向かうと廊下の方から話し声が聞こえた。

「ねえ、さっき誰かここに入らなかった？」

全然知らない女子の声。

「そうか？　こんなところ、誰も入らなくね？」

質問に答える男子の声。これも知らない。

「えー、でも確かに誰かが入って行くの見たんだよ……」

再び女子の声。やはり聞き覚えがない。

「んじゃ、中、見てみつか？」

やや間があき、再び男子の声。

(つて、ヤバイ！)

見つかつて怒られはしない、しかし周りからは変人扱い。これ

は何としても回避しなければならない。ここに入る前もそれだけは無いように気をつけたはずなのに……。

再度、聞き耳を立てると男子の提案に女子がためらっていた。しかし女子は負けず嫌いらしく、自分は確かに入って行く人を見たと言い張りだした。すると遠くの方から大きな声がした。

「そんなとこで何やってんの？」

どうやら、教室の前にいる二人の知り合いのようだ。性別はおそらく女子。しかし僕は全く知らない。

「コイツが、こん中に誰か入ったって言うんだよ」

男子が呆れたような声で返す。

「えゝ、マジで？ そんな変人、居なくない？」

(……残念ながら居ますよ、此处に)

聞き間違いかもしれないが、距離が縮まっている気がする。

「ホントに見たんだよ……」

言い張っていた女子が泣きそうな声でそう言うと、男子が「分かった、分かった」と言って、なだめる。それをさっきの遠くからきた女子が「あゝあ、泣かせたゝ」と茶化す。

そんなやりとりを聞いていると、いつもの四人の楽しい日々を思い出す。今初めて仲が良い集団を客観的に見ることができた。普段の僕達の立ち位置が、どれだけ重要か改めて考える良い機会になった。こういう集団がクラスに一つあるだけでどのくらい場が和むか^{なご}を実感した。

議論の結果、中を確かめることになったらしい。どうしたらいいか迷ったが、隠れることを選択した。決定的な理由は、仮に僕が見つかったとして「やっぱり居たじゃん」では終わらない気がするからだ。事態は急を要する。僕の今後の学校生活がかかっていると書いても過言ではない。そのことを念頭に置いて、隠れる場所を考える。

(それにしても、こうも暗いと何があるか分からない……)

無闇に歩き回って、大きな音でも立てれば速攻アウトだ。そのため慎重に足場を確認しながら、教室のもう一つのドアの方へと向かった。

そこに向かったのには二つ理由がある。

一つ目は、このドアが封鎖されている事。何故かは知らないが、こちらのドアだけ開かないようにされている。これは入る前に確かめたので間違いない。

二つ目は、入口のドアが開いた時、明かりが絶対に届かないからこれはかなり試行錯誤したが、多分間違っていないと思われる。

以上の事から、選択したが、吉と出るか凶と出るか、といった感じだ。願わくは、入ってこないでほしい。耳を外に集中させると、まだ声がする。どうやら、入る順番を決めているようだった。

壁を頼りに少し歩いたが、教室のつくりが異なるため、当てにならなかった。仕方ないので、床に手をつき、前進する。

また少し進むと、手に硬いものが当たった。一体何なのかと触れてみると、すぐに分かった。障害物の正体は横に倒れた机だった。ちょうど目が暗闇に慣れ始めたので、凝らして見ると、多くの机が横倒しになって、ドアへの最短ルートを遮っていた。それはまるで誰もそこに近づけたくないように見えた。しかしこちらも考えている猶予は無い。目と手の感覚を研ぎ澄まし、一步一步慎重に進んで行った。

あと少しでドアの前という所で、最大の問題が発生した。端的に表現するならば、壁。それはよく見ると、机と椅子が積み重なってできているようだ。そこから判断できることは、これは誰かが、何かの目的で作ったということ。

（この奥に何かが……）

僕の中の恐怖と焦りが期待と好奇心に変わった。既に頭の中は隠れることを忘れ、この奥に何かあるのかを確かめることではいっぱいになっていた。

外から聞こえる声が止み、僕の学校生活の終焉が近付いているが、どうにも壁を越えることができない。考えて作ったのか、それとも適当に積んでいっただけか、どちらにしても越えられないことに変わりはない。解体しようかとも考えたが、どこを外しても間違いく大きな音が出るため却下。それ以前の問題で、もし崩れたら奥を確かめる前に埋められてしまう。

（そんなことよりもどうしたものか……）

机は規則正しく配置され、二台の机の上に一台といった感じで、天井付近は椅子を逆さにしてのせてある。隙間などはどこにも無く、動かそうものならほぼ確実に崩れて圧死。

しかし逆に燃えてきた。このようなすごいバリケードで守られているモノとはいったい何なのか……。伝説の剣や隠された秘宝なんてファンタジーな事は想像しない。あるとしたら、学校側が隠さなければならぬようなリアルな事。しかも、それは消そうにも消せない、と察する。もし消せるのなら、自分たちに都合の悪いモノなど早々に処分するはず。それをこのような形で残してあるということは、消したくても消せない、と考えるのが道理。そこまで分かって、中には入れなければ全ては仮定の話として終わってしまう。しかし時間は限られている。僕が見つかるのは既に時間の問題だ。

ふと、見つかった方が得策ではないか、という考えが頭を過ぎった。もし見つかった場合、僕は学校内で変人扱いになる。しかしそれを逆手にとれば、ここへの出入りは公認となり、噂と隠された謎の解明を心おきなくできる。

自分勝手な行動を正当化するには充分過ぎる理由だ。そこには自己満足しかなく、残るのは後悔と真実。今、在るのは迷い……。

（ハル達も僕のこと軽蔑するのかな……）

「せーので開けるからな？」

先程の男子の声。どうやら先頭になったらしい。

「分かったから、はやく」

と言つのは後からやって来た女子。

「絶対、居るもん……」

と言い張るのは、言うまでもなく、事の発端はつたんの女子。
ドアのノブが回る音がする。

「いくぞ、……せーのっ！」

勢いよく押し開かれる扉。

「おっとっと、うわっ！」

勢い余ってか、開けた男子は前のめりになり転んだ。

「大丈夫？ ……けど誰も居ないね」

男子の後ろを悠々と辺りを見回しながら歩いてくるもう一人の女子。

廊下の明かりが差しこみ、教室の前半分が照らしだされる。教室の後ろ半分もぼんやりと見えるようだが、机が積まれていることまでは分からないようだ。

「奥は？ ホントに誰も居ない？」

言い張っていた女子は、怖くて入れないようで、二人に外で指示を出している。

「暗くてよく見えないけど、多分、誰も居ないぜ」

起き上った男子が後ろ側を凝視して答える。

「ってか、早く出ようぜ！ こんなとこ誰かに見られたら俺らが変人扱いされちまう！」

男子の意見に異存はないようだ。男子が静かに扉を閉め、三人は去って行った。

「ふうーっ。」

息を吐いた。結論から言うと、僕は見つからなかった。間一髪のところ壁の向こう側に辿り着いたのだ。

さかのぼ
遡ること三分前（僕視点）

外の話し声から得た情報によると、彼らが扉を開けるまでそう長

くないようだ。

やはり見つかるべきか……。いや、まだ諦めちゃダメだ。まだ何かあるはずだ。

（考え、考え、考え抜け！）

その時、自分の推理を思い出す。

学校側が隠さなければならぬようなリアルな事。

隠す、ということは、そのモノがまだそこに在るかを定期的に確認する必要がある。定期的に確認するのに、毎回この壁を崩してまた組み立てているとは考えにくい。とすれば、答えは簡単だ。どこかに抜け道があるはず。

（どこだ？ ……どこだ？）

壁の周りを歩き回るが、一向に見当たらない。ドアの周りが一層騒がしくなった気がした。扉が開かれるのはもう間近まで迫っていた。

（もうダメ……か？）

諦めて、壁の横に座りこむとある事に気がついた。ここの机は全て旧式で、足を前に出せる形になっている。つまりそこから内側に入ることができる、という事。こんな初歩的な事をどうして忘れていたのかと自分の頭を疑いたくなる。自分のお粗末な頭の事は置いて、中に入ることにした。

ちょうどその時、ドアノブが回る音がしたので、驚きのあまり頭を机にぶつけたが、その音は先頭で入った男子がこけた音で消された。それからは息をひそめ、こちらに來ないか観察した。思いの外あっさり帰ったのはラッキーだった。

そして今に至る。一息つき、達成感に浸っていた。一時は見つかるうかとも考えたが、なんとかここまで辿り着いた自分。しかし、自画自賛は虚しいだけで何も生み出さない。分かっている、無意識にしてしまう自分に嫌気がさしてきた。

気持ちを切り替えて、学校側が隠している秘密とは何なのか暴く

ことにした。

「さて、と。」

そう言って振り返る。目は既に暗闇に慣れてしまい、ガムテープで隙間からの光を遮られたドアの前でも充分に何があるか理解できた。そこに在ったモノは……。

旧二年A組を出た。いろんな事が一気にあつたため、今になってどつと疲れがきた。少し目眩めまいもする。廊下の明るさを少し眩しく感じる。何よりも、結果が結果のためなんのやる気も起きない。

今までの僕の頑張りを過大評価する気は全く無いけれど、僕の目の前に広がった光景を誰が見ても、納得はできないと思う。

何も無かった、というわけではない。モノは在った。しかし予想や期待をしていたモノとはとてもかけ離れたモノが。

僕が見たモノ、それは誰かが居た痕跡。「そんなの、どうして分かるんだよ？」と訊かれればこう答えよう。

勘、そう根拠は無い。しかしそこを見ると、何故か誰かが居るような気がしてならない。そう思わせるのは、床に無造作に置かれたゴミがそこで誰かが生活しているように見せていただけかもしれない。もしかしたら、僕が入る以前に誰かが入っていたのかもしれない。そんな風変わりな奴はそうそう居ないはずだが、絶対に居ないとは言えない。実際問題、自分の意志で入った奴がここに若干一名いるわけだし。

(やめた、やめた)

自虐じこつしていても何の解決にもならない。結果的に分かった事は、あそこには誰かが出入りしているということ。当然、僕以外の誰かあと、僕を追って入って来た彼らも除く。これも当然だが、教師も除外。もし出入りしているのが教師なら、あんな壁を作る理由が無い。生徒なら今回の僕と同じような状況の時のために使用するのが目的だろうが、教師ならばどこの教室に入るのも自由だし、戸締りの確認と言え出入口でいりしでいりしても全く怪しくない。それとゴミの量

はそこまで多くはなかったが、どう見積もっても、一食の量ではなかった。そう考えると、「出入りしている」と言うよりは「住んでいる」と言う方がこの場合正解ではないだろうか？　しかしここで暮らすメリットとはなんだろうか？　通学が楽？　住む場所が無い？　今どきそんな漫画みたいな人、居るかな……？

様々な考えが浮かんでは落とされ、結局のところ納得のいく答えは出なかった。

しかし僕の頭の中は奇妙な達成感で満ちていた。そのせいか、今回の事をいい意味で結論保留とした。

それから数十分間、「あれでもない、これでもない」と旧二年A組前で結論模索をしていた。保留にしたからといって、考えることを諦めたわけではない。更に言えば、今僕の頭の中は「今度はいつ入ろうか」とか「次は懐中電灯とビニール袋、それと手袋も」などの考えでいっぱいだ。今の情報量だけでは「絶対に結論には至れない」そう実感した。というかさせられた。

しかしこれは僕にとって、良い事なのかもしれない。今まで退屈していた学校生活に新たな兆^{きざ}しが見えた。

学校で習うことは一般的で、調べれば答えなんてどこにでも転がっている。しかしこれは違う。

（常用外、って言う……のかな？）

今の僕が知っている言葉では言い表せない、そんな体験をした。気がつくと昼休みももう残り五分となっていた。予鈴を聞き、僕は急いで次の授業の支度に向かうのだった。

果たして開耶の考えは間違っていたのか……。その真相が明かされるのは遙か先の話。

木花開耶物語 4・2話（後書き）

この作品は、大分前^{だいぶん}に書いた木花開耶物語の番外編です。色々と誤字脱字あるかもしれませんが、随時修正する予定です。

本編の続きの方は今、滞っている状態で出来上がりの目処は未定です。あと一週間粘つても更新できそうにない場合は、もう一つの番外編・クシ玉物語をアップロードする予定です。

この番外編は木花 開耶が、神屋 春樹の無断欠席に放心し、無謀な行為に走る回でした。それだけ彼の中でハルという存在が大きかったことを表しています。

それはさて置き、彼の周りで頻繁に起こるようになった非日常現象はとどまる事を知らず、その間隔もどんどん狭まっていく。果たして、彼の非日常^{にちじょう}はどこに向かつていくのか……？ そして、辿り着いた先に待っている真実^{しんじつ}は、誰の望んだモノか……？

ここまで読んで頂きありがとうございました。次回もよろしくお願ひします。 by c r o w

木花開耶物語4話 後編（前書き）

何とか間に合って良かったです。

最後、変な終わり方になっていますが、後々説明が入るのですみません、スル してください。

木花開耶物語4話 後編

二XX六年六月八日 夜

ひよんな事から始まった浅間区約一周ハイキング大会は、もうゴール寸前だった。しかし、それ相応の時間も経過していた。ふと見上げた空には、先走った一番星がまだ少し明るい空を照らしていたけれど、眩^{まぶ}しくはなかった。むしろ、弱過ぎる光は心細かった。何故か途切れてしまいそんな感覚に襲われ、その光から目を逸^そらしたくなる。

そんな真ん中で、僕はある異変に気づいた。

「駅に……人が、いない……？」

確かに、電車の来ない時間帯は人が居なくても何もおかしくはない。そもそも、電車の来ない駅なんてただの建物か、それ以下の存在だ。他にする事も無いし、電車の到着を待つ以外に出来る事も無い。実に不便な場所だ、と電車の利用を全くした事の無い僕は考える。

「……そうだ、電光掲示板」

全く利用しないからと言って、何も知らない訳ではない。自分の住む街の駅なのだから、ある程度は知っている。という訳で、彼女に何も告げず、時刻表を確認しに行く事にする。

「えーっと、確かこの辺りに……あつ、あれか」

上りと下りの時刻を早い順に二つずつ掲示した電光掲示板は、この駅の中でも特に浮いて見える。理由はとても単純で、駅の内装が古いのに対して、コレだけが新しい物だからだ。

以前、ハルに誘われて、まあまあ都会の場所、に遊びに行った事が在る。そして、その時の事は今も覚えている。正に都会、というモノを味わった日だった。

まず、降りた駅の改札口には意味深な装置が設置されていて、切符売り場はタッチパネルが備え付けられており、駅の周辺と地下に

は店が構えられていた。とりあえず、僕の知る駅というモノを覆された。

次に、都会は人だらけだった。しかも、ぶつかっても謝らないし、謝っても聞いていない。人が密集していて暑いのに、人は想像以上に冷めていた。それでも、南海市よりはマシだと思った。

最後に、僕はやはり田舎者だった。そう、実感せざるを得なかった。何もかもが、僕の知っている物や事と違った。それはもう、訊き返すのが恐ろしくなる程に違った。

そして僕は、僕の田舎に帰った。それ以来、駅には行かなかった。この街を出た先はどこに行こうが、異世界だと知ったからだ。そんな所に何も知らない僕が行く筈も、行ける筈も無かった。

最近の様に遠い過去を振り返り、苦い思い出を噛みしめながら、本題に戻る。

(一番早い電車は……)

七時五分 上り行き 二番線 普通列車 四両編成

確認してから電光掲示板の隣に、ひっそりと吊るされた、古びた時計に目を移す。これは昔から、二分ずれている。そして時計が指し示す時刻は七時。

「今は……七時二分前か……」

人が居ない理由としては、おかし過ぎる。ちょっと用心深い人なんかは、このくらいの時間帯に居てもおかしくないし、学校帰りの学生がホームで暇を潰すのなんて常套手段だ。

しかし、駅には誰も居ない。

「……あれ、あの人は？」

ふと気づけば、自分と一緒に駅に入った筈の人が消えている。

「……ホームの方が？」

改札を通った音も、そもそも切符を買った音すら聞こえていないが、あの人なら無人の改札口くらい通つてしまいかもしれない。いや、「ラッキー、私ツイてるよ」とか言つて絶対通るだろう。

思い返してみれば、彼女から目を離したのも、電光掲示板を見に行くのを伝えなかったのも、無人だからって改札口を通っちゃいけないのを教えなかったのも、全部僕の責任問題が問われるのだろうか。いやいや、それは流石に理不尽過ぎるだろう。責任は半々……だと良いけど。

そんな事を考えながら、やむを得ず僕も改札口を乗り越えるのだった。

改札を飛び越え、数歩進んだ所で立ち止まる。ふと、忘れかけていた決意を思い出したからだ。

僕は目的地が駅だと分かった時、正直に案内を辞めようかと思っただ。駅なら僕に聞かずとも、来た道を戻れば自ずと着くし、この街の住民も出て行く人には親切だろうし、何よりも僕にとって駅は異世界への入口だったからだ。確かに面倒臭いと思う気も在ったが、それに勝る恐怖という思いも在った。出来る事なら金輪際、駅には近づきたくもない、あの日帰って来てからずっとそう願っていた。そんな僕が、常日頃から拒んでいた駅に来た理由。それは、ハルに会いに行く為だ。

ハルの家は南海市から、上り二駅いった相良市駅さがらの近くに在る。一年生の頃に何度か遊びに行った事も在る。彼の家は、一戸建て三階ベランダ、屋上付き、加えてフットサルくらい可能な庭のど真ん中にバスケットゴールが鎮座している。当然、一度来れば忘れないだろうし、もし忘れたとしても周りとは違う雰囲気いづのその家を見逃す道理は無い。

会いに行くのは、他ならぬ安否の確認だ。妙な胸騒ぎがして、収まらない。何も無ければ、それに越した事は無いし、もし怪しまれても御見舞って事で誤魔化せるだろう。だからとりあえず、一目会って納得したい訳だ。

目的を見失わないようにどうして此处に来たのかを再確認し、彼女の搜索へと向かう。

（一体、どこに居るのやら……？）

で、少々小走りでホームを徘徊したところ、車両はゼロ、加えて乗車希望者もゼロと、不可解な空気を漂わせる南海市駅ホーム。何か遭ったのか訊きたくても、駅員すら居ないのである。これじゃまるで、住宅街跡を歩いているようだ。

「まあ、明りが在る分、本物よりは幾分かマシだけど……」

と、愚痴を零し^{こぼ}つつも辺りを見回すが、やはり人は居ない。

ホームの天井から吊るされた古びた時計は、もうすぐ七時五分になろうとしていた。電車が時間ピッタリに来ないのは知っているが、来る気配もアナウンスも無いのはおかしい。

（もしかして、切符売り場の方に戻ったのかな……？）

改札を出るとホームは東西に大きく広がっており、僕の現在地はホーム東端。もしも彼女が西側に居て、この異変（流石にここまでおかしければ彼女でも気づくと思われる）を僕に報せ^{しら}様と切符売り場に戻ったのなら、入れ違いになっているかもしれない。そうだとしたら、切符売り場に僕が居なくて、また彼女は何の当てもなく動き出すかもしれない。それに、これ以上面倒事になるのはあまり得策とは思えない。

（とりあえず切符売り場に戻ろう）

と言う訳で、ちよつと全速力で改札口へと走った。

「……はあ、はあ、はあ」

単刀直入に……期待を裏切る結果がそこに在った。

約百メートルを、鞆（約三キログラム）を抱えながらほぼ本気で走った労力に対する結果としては、現実は厳しかった。結論から言えば、彼女は切符売り場に居なかった。そして他の人（駅員含む）も居なかった。現状をおかしさで言えば、非日常にも負けずとも劣らず状況だろう。

それはさて置き、彼女が次なる罪を犯す前に見つけ出さないと、

冗談抜きでヤバいかもしれない。今は何故か、人が居ないから騒ぎになってないけど、どう考えても許されない行為をしている。

（僕は巻き沿いつていうか、これに関しては被害者……いや、同罪かな……？）

なんて悠長な事を思いつつ、今後について真面目に考えてみる。

極端な話、道案内は済んだので僕の役目というか義理は果たせた訳で、これ以上は僕の管轄外、もとい預かり知らぬところだ。今後、彼女が何をしようが、どこに行こうが、それは彼女の意思であり、彼女の責任だ。だから僕が彼女を探す道理は無い……のだが、こういうのは理論とか理屈では無い、と思う僕が居る。はつきり言つて、こんな別れ方は後味が悪過ぎる。それに今度また会った時は笑つてあの時はどうも、つて話したい。だから……。

「よし、もう一回ホームを探そう。今度は西側に行つてみよう。もしかしたら、居るかもしれない」

そう、誰に言うでもなく呟く。

そんな僕のやる気は充分。けれど、そんな彼女の見つかる可能性は五分五分。でも、諦める道理は無かった。

そして僕は、再び改札口を飛び越えて行つた。

小さい頃に、不審者に出遭つたら大声を出して逃げなさい、と教わつた人は少なくはないだろう。僕も例に漏れず、教わつた内の人だ。

しかしながら、僕ら人間は本当に恐ろしい物や事に直面した時、大声を出す事は出来るのだろうか？ 答えは当然、否だ。そもそも、皆がみんなそんな事が出来れば少年少女の誘拐事件や、性犯罪は起きていない。それどころか、未然に防げるだろう。しかし現に起きているし、減つてない現状を見れば、嫌でも分かるだろう。人間は本当に恐ろしい物や事に直面した時、大声を出す事は出来ない、と。もっと簡単な例を挙げてみよう。遊園地などに在る、絶叫系アトラクションは御存知だろうか？ あの類のアトラクションが落ちた

り、最高速になったりした時に聞こえる悲鳴、あれは誰の悲鳴だろうか。そのアトラクションに嫌々、乗せられた人の悲鳴？ いや、違う。あれは間違いなく楽しんでる人の奇声だろう。ならば嫌々、乗せられた人はどうしているのか？ その問いの答えは実に明快だ。その人達は悲鳴さえも出せず、ただただ早く終わるのを小さくなくて待っているだけ。つまり、結果は先程の不審者と対峙した時と同じという訳だ。

何故、今さらになって、そんな事を思い出しているのか、そう、疑問に思うのも無理は無い。しかし僕自身、何から説明すればいいのか、少々頭がパニック状態に陥っている。ただ、一つ分かった事が在る。人は本当に意味の分からない物や事に直面した時も、声を出す事が出来なくなる、と。

僕の目には、黄金の装飾が施された、それは大層な船がホームに堂々と泊めて在り、その船の淵の所に彼女と、身長二メートルは優に在るだろう人間らしき物体が映っていた。

即ち、それは 理解不能だった。

とりあえず見れば見る程、おかしい物がそこに在った。因みに僕の混乱は未だに続いているのだが、現状分かる範囲でこの場の状況を整理したいと思う。

まずは現在地。此处は間違いなく駅のホームだ。詳しくは改札を出て西へ数十メートル進んだ位置だ。そして、それを証明する看板が僕の右斜め約四メートル先に在る。その一見すればただの錆びついた看板には、最近塗り替えられたのか、外装とは釣り合わない綺麗さで、南海市駅、と書かれている。

次に目の前の物。それは最初に提言した通り、船以外の何物にも見えない物体。詳細を加えると、船には大中小のマストが一本ずつ在るが帆は見当たらず、一番大きなマストの後ろにブリッジらしき所が在り、大きさは大体電車四、五車両分は下らないだろう。あとは至る所に施された黄金の装飾。冗談抜きで、全盛期の金閣寺とい

勝負の輝きを放っている。最後に一番不可解な点、どういう原理かこの船は地面に着いていないようだ。つまり宙に浮いているのだ。正に波に乗っているかのように、今もユラユラと微妙な揺れをしている。

最後に目的。確か僕は此処に彼女を探しに来た訳で、こんな帆船に用は無い。しかし、その用の無い帆船の甲板には、最重要捕獲候補生命体の彼女が居る訳で、僕は思考停止のジレンマに陥っていた。現状を確認したところで本題に戻ると、なぜ彼女が甲板に居るのは置いておくとして、こんなところを誰かに見られたら一大事だ。こんな近未来的アイテムは、まだ登場していい年代では無い。いや、登場するのは一向に構わないが、此処で登場するのは望ましくない。早々に立ち去って貰おう。

「あのー、すみません。これー、あなた達の船ですかー？」

「……」

「」

何やらお取り込み中の様で、甲板の彼女と大男にこちらの声は全く届いていないらしい。何を話しているのかは、僕の位置からでは聞き取れないが、そんな事はどうでもいい。おしゃべりも口論も喧嘩も、別に此処でやる必要性は無い。むしろ、船が無かったとしても他所（そこ）でやって頂きたい程だ。

「あのー、聞いてますかー？ もしもその船、あなた達の物でしたら、早々に此処から……」

出てって下さいと、言おうとした瞬間、僕は固まった。

その時、僕は確かに大男の眼が僕を見据えている様な気がした。その瞳はまるで「五月蠅（うるさ）い。黙っている」と言っている様だった。そんな訳で、本来ならどうという事も無いその行為に、僕は怯んできました。

それは単純に、その大男の背格好と風貌が異様だったからかもしれない。大男は二メートルを優に超える身長を持ち、体格もガッチリとしていた。しかし、その長身を包む服は以外にも着物だった。

それも船の装飾に負けずとも劣らぬ豪華振りを見せている。それに加えて、大男の顔には歌舞伎役者の様な濃い白粉化粧（？）と、目元には赤色の隈取りがされていた。少々威厳が効き過ぎているその大男の眼力は、見た者をその場で凍りつかせるには打って付けの代物だった。

（まあ、百聞は一見に如かずで、実際に体験する事をお勧めします）

尤も、そんな怖い人がホイホイ外を出歩ける程、日本は放任主義では無い。因みに僕は、極めて遠慮の方針で。だってこんな体験、一生に一度でさえ充分過ぎるでしょ？

ホームに無断停泊する近未来型の異様な帆船に、か細い星々の光と半分欠けた月の光が様々な角度から降り注ぎ、黄金の装飾がそれを乱反射する。その悪意無き光が目にあたったり、当たらなかったりをさつきから延々と繰り返している。その度に目を閉じたり、開いたりと面倒臭いのだが、まともに受ければ視界が眩むのは明白だった。それに輪を掛けて、大男の視線はまだ僕から離れず、こちらが一瞬でも隙を見せれば大男に喰われそうな（実際には有り得ないのだが……）雰囲気を漂わせていた。

（先に動いた方が喰われる……か？）

両者の間に、張り詰めた空気が流れる。しかしこの状況は思いも寄らない終わり方をする。

「あゝっ、コノハナ サクヤだゝ！」

と言う彼女の声で、喰われそうな雰囲気も張り詰めた空気も全部ぶっ壊れてしまった訳だ。

二〇〇六年六月八日 七時七分

「おゝい。こっち、こっち」

と、船の淵から乗り出し、こちらに向かって手をブンブン振っている規格外生命体。その光景を茫然と見ながら、そこに居るのが疑

う余地も無く、彼女なのだとな得した。

それにしても、彼女のKYさが全開なのは別に悪い訳ではないのだが、時と場所と場合を考えてもらいたい。いや、それが出来ないからKYなのか。

結論に至ったところで、やれやれ、と溜め息混じりに零し、船へと歩み寄って行った。

「コノハナ サクヤ、遅い」

それが必死になってホームと改札を疾駆し、無条件で大男に睨まれた僕への彼女の第一声だった。もう不憫さに対する怒りを通り越して、用件だけを伝える事にした。

「はいはい、すみませんでした。そんな事よりも、この船、早く退けてもらえますか？」

「えー、なんで？」

「なんで、って誰かに見られたら大変な事になりますよ」

「ふーん、そうかな？」

危機感ゼロ。渦中に居るのに、まるで我関せず。むしろ、他人事のようなのだ。

（と、言う事はこの船と彼女は関係無い……？　じゃあ、どうして船に乗ってるんだ？　もしかして、この大男が……？）

いや、行き過ぎた妄想も、信憑性が皆無の推測も、常識を逸脱した仮定も何の役にも立たない。事実、この大男が彼女に何かしたのを見た訳ではないし、彼女が助けを求めている訳でも無い。だから誘拐は考え過ぎだろう。そもそも、彼女は誘拐されるような歳ではない。いや、前言撤回。知能レベルは、誘拐されてもおかしくない歳だった。

（それはさて置き、兎にも角にもこの船を何とかしないと。いや、して貰わないと……）

どう考えても、彼女が集まった野次馬に説明できるとは思えないし、この大男も知的には見えない。何よりもこんなハイテクノロジ

な産物が、こんな辺鄙な地に在る理由など僕にも思い付かない。早々に何とかしないと、手に負えなくなるな、きつと。

「ねえーねえー、そんな事よりさ」 さつき、どこに居たの？」

「さつき？ …… ああ、さつきは時刻表を見に行つてたんですよ」

と、律儀に答えている辺り、少なからず僕も危機感の無い奴だろう。 いや、むしろ他人事だ、とどこかで思っているのかもしれない。「それよりも、急に居なくなったので心配したんですよ。どこに行つてたんですか？」

確かに、僕は心のどこかでこの船が誰かに見つかるうが、どうなるうがどうでもいい、と考えている。けれど、彼女が居なくなつた時、本気で心配したのも事実。だから、彼女がどこに行つていたのかを訊くぐらい許してもらいたい。

そう、誰に請うでも無く心の中で呟いた。その思いが届いたのかどうかは知らないが、彼女の口が開き、真相が語られたのはその直後だった。

「あゝ ごめん、ごめん。悪気は無かつたよ」 私も一言、声を掛けてから行こうと思つたんだけど、コノハナ サクヤがどこにも見当たらず、それに…… 様が急かすから……」

語尾の方が上手く聞き取れなかつたが、彼女の仕草から誰が急かしたのかは容易に分かつた。

どうやら、僕が余計な心配をする羽目になつたのも、無断で改札を飛び越える違法行為に及ばざるを得なかつたのも、ホームを必死に走る羽目になつたのも、この大男のせいらしい。何が悲しくて、こんな愛想の欠片も無い大男の為にこんな事をしてしまったのか、過去の自分が恨めしい。もしも過去の自分に何かしてやれるのなら、切符売り場で彼女が居なくなつた時、改札を飛び越える前に止めてやりたい。

そんな、半ば^{なか}どうしようもない事を延々と考えた結果、自然と視線が大男を睨^{にら}んでいた事に気づいた。そして大男の方も、僕を無言で睨^{にら}んでいた。少し意外だったのは、KYな彼女も口を閉ざしてし

まい、沈黙がただただ続いた事だ。

僕は太男から目を逸らさなかった。しかし今回は、先程の様に本能的に逸らさなかったのでは無く、自分の意志で逸らさなかった。僕はそれ程、太男に対して怒りや憤りを抱いていた。そして、太男もまた僕から目を逸らさなかった。太男が僕を睨む理由こそ定かではないが、何故か根に在る感情は同じ気がした。

（この太男も怒っている……のか？ 何に？ 誰に？ 僕に？ そんなの理不尽だ！）

僕が太男に対して怒りを覚える理由は山のように在っても、太男が僕に対して怒りを覚える理由は微塵も無い。今は確かに睨み合っているかもしれないけれど、それ以前には何も無かった訳だし。

（それとも、デカイ図体だから細かい事は気にしない性質ですか？ 理由？ そんなモノねえよ、的な解釈ですか？）

もしもこの太男がそういう考えの持ち主だとしたら、このまま殴り合いとかに発展し兼ねない。因みに僕のケンカの成績は無敗だ。正確にはゼロ戦ゼロ勝ゼロ敗だが……。

それから二分後。

「……………」

「……………」

「ん？」

駅のホームでは無言の睨み合いがまだ続いていた。しかも両者は、微動だにせずひたすら相手を睨んでいるだけの、見ている側としては心底詰まらない展開を繰り返していた。

不意にどうすればこの無意味、極まりない意地の張り合いが終わるのか気になった。

（先に動いた方が負け……か？）

いや、冷静に考えてこの太男にそんなルールが通用するとは思えない。と言うよりは、それ以前の問題で、言葉が通じるかどうかさえ怪しい。

（さて、どうしたら無傷でお互いに納得のいく僕の勝ちを収められるだろうか？）

と、飽くまで勝ちを目指す方針は変えない。なぜなら負けるといふ事は、僕がこの大男に怒りの感情を抱かれても仕方ない、という不正な事実を無条件で認める事になるからだ。それは余りにも理不尽だ。だから認める訳にはいかない、という意地が僕には在る。

そんな風に意気込んで、勝利を目指して燃えてきた時、意外にも大男の方が先に動いた。

「えっ？ えええっ？」

驚嘆の音がホームに響く。しかしそんな事はお構い無しで、大男は歩み続けた……船の中へと。そう、大男は何の前触れも無く、身を翻し、船の奥へと消えていった。

その行動は流石に思いつかなかった。僕に逃げる、という選択肢は無かった。しかしそれは相手も同じ条件だったはずだ。僕等は互いに許せないモノが在るから、睨み合い、睨み合っていたのだ。そして、それを放棄するなど言語道断。大男は信念を捨てたという訳だ。

（つまり、この勝負……僕の勝ち……でいいのかな？）

大男の予想外な行動のせいで、あんまり実感が湧かない。それに加え、勝手にこの睨み合いを勝負としてしまった事や、勝手に勝敗の判定を決めた事など、多々在る自分勝手な所業を後ろめたい、善良な心が歓喜の声を抑えさせる。

だが、結果として僕の目的は達成された。その事に対して、深いふかい溜め息が漏れる。

「……はあ　ん？　うわっ！」

安堵の溜め息を吐いた僕は突然、発生した強い向かい風に吹かれる。このタイミングの悪さは、彼女のKYさ振りにも匹敵する。気を取り直してもう一度、深呼吸。

「ふっ……はああ　ん？　ちよっ？　……マジですか？」

緊張から解放され、胸を撫で下ろし、溜め息を一つ……のはずが、

身体はその場に凍りついた。本日、数回目の予期せぬ事態が今、正に目の前で起きた。

ホームに先程まで在ったはずの 船が消えた。

二××六年六月八日 七時十二分 駅 上空にて

「……ねえ、どうして急に退いたの？」

遙か彼方、下にある駅を眺めながら、船を独断で動かした張本人にその心意を尋ねる。

「……………」

しかし彼は口を固く閉じ、沈黙を続けた。

彼と出会ってから、約一ヶ月が経過した。私的^{わたし}には出会った頃に比べれば、随分と打ち解けた気がするのだけど、未だに彼が何を考えているのか分からない事の方が多い。特に無視（沈黙？）される事も多く、そうなった時は無理に問い詰めないようにするのが得策っぽい。

（まさか……とは思うけど、コノハナ サクヤに気圧^{けお}された？）

いや、詮索は止めよう。どうせ私の予想は当たらないし、当たらない予想は妄想でしかないんだし。何よりも優勝候補の彼が、あんなのに引けを取る筈が無い。だからきつと、何か理由が在つての撤退なんだろう。

そう、信じて疑わなかった。と、言うよりは彼以外に信じられる者は無かった。

「……えっ？ ちょっと、それで何する気？」

彼の心意詮索をあつさり諦め、甲板へと振り返った私の眼には異様な光景が映った。

どこから持って来たのか、彼はマストにも劣らない大きさの棒状物体を、闇で溢れる下の世界に向け、狙いを定めていた。流石の私でも、彼の狙っているターゲットは容易に分かった。しかし、どうして狙っているのかは さっぱりだった。

（腹癒^{はらいい}せ？ それとも、第二ラウンド開始のゴング代わり？ いや

いや、そんなコトしたらタダじゃ済まない事ぐらい分かっているから……投げる、って事は無い　と思うけど……）

はつきり言つて、彼ならやり兼ねない。彼の性格は外見からも分かる通り、他人から見た自分の評価や、世間体なんか全く気にしない。

しかしそんな彼だからこそ、私は絶対の信頼を置いている。さっきの行動も、今からするだろう行動も、恐らく何か意図が在ったのことだろう。もし、そうだとしたら、私に彼の行動に対して口出す権利は無いから、黙って見ているしかない。たとえそれが明らかに間違つていようが、常識から逸脱していようが、私は彼に付いて行くと決めた。疑う余地は無いんだ。

かくして、数分先に起きる南海市を襲う小規模地震は上の彼女にも、下の彼にも止める事の出来ないモノとなつた。

二××六年六月八日　同刻　浅間山頂上^{あさま}

そんな非常事態に陥っているとは露も知らず、先の怪奇現象の解明に没頭していて、真つ先に犠牲者になりそうな可哀想な人物が一名、無人のホームを右往左往している。

そして、その数十メートル上空では元凶の乗る、異様な装飾の帆船がどういふ原理か浮いて居て、更に縁^{へり}からは物騒な棒状^{ぼうじょう}物体が下方に向けて、今か今かと発射待機中。

何時^{いつ}、何が起きてもおかしくないこの最高潮^{クライマックス}場面に、乱入しようとしているのが若干一名。いや、二名か。しかしながら、その二人が発射に間に合うかどうかは五分^{ごふん}、といったところ。だから、この発射の引き金^キとなるのは実質一名という事になる。つまり下の奴が上の存在に気づいた時、奴は間違いなく、そして躊躇^{ちゅうちよ}なく放つだろう。

「阻止する道理は無いな。下の奴が生きようが、死のうが、俺には関係ない。飽くまで俺は、まだどちらの側に付く気も無い。むしろこれであつちが消えるのなら、奴の方に付くのも悪くはないかもし

れん。でも……」

（もしも、この窮地をアイツが切り抜けられるのなら あっち側に付くのも……いや、それは早とちりか……？）

何にせよそろそろ、か。どちらに転ぼうが、面白い展開になりそうだな……。

二××六年六月八日 同刻 駅のホーム

誰かの思惑通りなのか、もしくは本当に偶然でこんな異常事態が続いて起きているだけなのか。どちらだったにせよ、僕が巻き込まれる理由は見当たらない。しかもそのどれもが、簡単に斬り捨てられるような浅い出遭いではない、という事まで共通している。これが運命の悪戯いたずらと言ふのなら、少々度が過ぎている。それか、僕は相応な勢いで神様に嫌われているのだろう。

（身に覚えは無いけど……）

自分の客観的には幸運で、主観的には不運過ぎるこの境遇に、強引に理由を付けて、無理矢理納得。消えた船の搜索を再開する。

「って、言っても、見渡す限り何の変哲もないホームなんだけど……」

船消失から一分程が経過した今、本当に此処にそんな物が在ったのかさえ不安になる。もしかしたら、夢でも見ていたんじゃないのか、と今までの事に自信が持てない。

でも、だからこそ船を見つけ出し、今までの事を本当だったと証明したい訳で、それ以上もそれ以下もない単純な理由が僕を突き動かす。それに、そのついでで規格外にKYな彼女も助けられれば、後味も悪くないだろう。

なんて調子の良い事を想像（妄想？）しながら、軽い足取りでホームをもう一回りするのだった。

「あれ、おかしいな……？」

二分前の軽い調子とは打って変わって、焦り混じりの言葉が漏れ

る。

搜索の開始から中断、再開から現在に至るまで、見落としぜ口。そして人も、またぜ口。まるでよくあるホラー映画の舞台に、運悪く迷い込んだ哀れな主人公っぽいこの状況に嫌気が差す一方、急に冷えた夜の空気を肌で感じていた。冷めた風がホームの中を行ったり来たりして、僕の煮詰まった頭を冷やしていく。

「すうー……はあぁ」

目を閉じて、深呼吸を一つ。心を落ち着かせて、神経を緊張からリラックス状態へ。ただそれだけの事をしただけで、周りの景色がより鮮明に見えてきた。すると、ある異変に気がついた。

（あそこだけ、変な影が……）

線路を挟んだ向かいのホームに、明らかに異様な形の影がかかっていた。その影は太く、長かった。しかし、南海市にビルなんて高度な建造物は無いし、三階建て以上の建物も無い。けれど、そこには確かに太く、長い異形な影がかかっている。

ふと、影を注視していると大きくなったり、小さくなったりを繰り返していた。それはまるで、何かが浮き沈みするように緩やかに淡々と続いた。

そこで将^{はた}と思^{おも}い至^{いた}り、雨除^{あまよ}けで隠された夜空を見上げようとした、その時。

「はあ、はあ。佐久夜様！」

予期せぬ人の声がホームに響いた。当然、僕は驚きのあまり立ち止まっていた。そして、声のした方を振り向くと、そこには何故か息を切らした彼女の姿が。

「はあ、はあ。瓊瓊杵様、やっと追いつきましたよ」

と、遅れてやって来たウズメさんの様子から察するに、此处に来たのは彼女の独断専行なのだろう。恐らく、まだ怪我は完治していない。

（なのに、どうして……？）

立ち尽くす僕に彼女は早足で歩み寄り、雨除けの奥へと引き戻す。

「ニニギ、まだ怪我、治っていないんだろ……どうして、此処に？」

「佐久夜様、早々に此処から去りましょう。危険です」

此処から去る、という言葉が引つ掛かり、足が動かない。

（去るって、船は？ まだ、見つけてない。アレは夢じゃないんだ。
証拠^{ふね}を見つけないと ）

「お取り込み中、申し訳御座いけません。危機が迫っているので、説明は後ほど必ず致しますので……」

と、横からウズメさんが割り込み、全く動こうとしない僕を抱え、駅の出口へと駆け抜ける。見る見ると遠ざかっていくホームとニニギ。こうして、僕は強制的に駅より退出させられた。

木花開耶物語4話 後編（後書き）

誤字脱字等ありましたら、随時修正予定です。

修正後は活動報告をする……と思います。

多分、話が大きく変わる事は無いと思うので、スル して構いません。

クシ玉物語（木花開耶物語 番外編） 1話（前書き）

本編には直接関わってこない物語です。番外編4・2話がサク（開耶）視点で展開したので、こちらはクツシー（夏澄）と玉ちゃん（美七）視点の同じ時間の物語を書いてみよう、という作品です。ネタバレをしない為に、前書きはこの辺で切り上げます。

読み辛いところもあるかもしれませんが、是非読んでみてください。

クシ玉物語（木花開耶物語 番外編） 1話

あらずじ……

市立南海高等学校に通う主人公・木花 開耶（愛称・サク）は親友・神屋 春樹（愛称・ハル）の突然の欠席に落ち込んでしまう。それにいち早く気づいた仲良し四人組の残り二名、櫛灘 夏澄（愛称・クツシー）と豊玉 美七（愛称・玉ちゃん）は、サクを元気づける為、昼食に誘う。しかしサクはそんな二人の厚意も知らず、教室を出ていってしまう。

この物語はその後の教室で在った二人の物語……。

午後十二時十六分

「じゃ、二人で食べよつか」

私は後ろでそわそわしている玉ちゃんにそう告げて、自分の席に向かって歩き出した。

（そういえば、玉ちゃんと初めて知り合ったのは、去年の今ぐらいだったっけ？ それにこう二人きりになるのは、出会ってから初めてじゃないかな……？）

ふと記憶を辿った。

出会い

同じ中学の出身で、去年も同じクラスの友人・ハルの誘いで、クラス親睦会に出席した。その時に、同じクラスでわりかし仲の良い男子・サクから紹介された友人が彼女だった。

後で知ったんだけど、このクラス親睦会はハルが（内緒に）準備した合コンだったらしい。私はなんとなく気づいていた（仲の良い女子を誘って来てくれ、とハルに言われてたからだ）。しかし集まったのは私とハル、サク、玉ちゃんだけだったので、予告通りのクラス親睦会になったらしい。あれから今ままで、いや今も二人はあ

れをハルの厚意で開催した親睦会だと信じている。事実、サクはハルにとって大切な友人となった。私も玉ちゃんと出会え、仲良くなり、大切な友人が一人増えた。結果だけ見ればすべてうまくいっている。だから、私も黙っていることにした。この関係を壊したくなかった。

みんなが笑って居られる日常

これ以上幸福なものはない。だから私はそれを目指す。たとえ辿り着くまでに、自分を何度も裏切ることになったとしても……。

去年の夏休み

八月の中旬、サクの提案で南海市の夏祭りに、いつものメンバーで参加した。

「お待たせ」

私は気合を入れて、浴衣を着て行った。浴衣の着付けが手間取ったせいで、待ち合わせの時間に少し遅れてしまった。

「いいよ、まだハルも来てないし」

待ち合わせ場所にはサクと玉ちゃんしか居なかった。ちなみに玉ちゃんは普通に私服だった。

周りは夜店に向かう人の通り道のように、すごく賑^{にぎ}わっていたのがとても印象的だったから鮮明に覚えている。そして道行く人の視線が不思議なモノを見るように私を見ていたのも……。

この夏祭りはとても規模の小さいもので、やって来るのは市民と隣の町の人ぐらいなもの。当然、その中に浴衣を着るような気合の入った人など居なかった。そういう意味で私は、周りの人から異端視されていた。

それでも「帰りたい」とは思わなかった。知らない人に何とかわれても構わなかった。それよりも二人が素直に「似合ってるね」と言ってくれた事の方が、私をここに繋ぎ止めて置くのには充分過ぎる理由だった。

不意に泣きそうになった、でもここでは笑顔で居たかった。だか

ら自分の泣き顔を殺し、涙を棄て、満面の笑みで返す。

「ありがと」

このやりとりが終わるとちょうど、ハルが駆け足で来た。

「ごめん、ごめん。寝てた……」

手を合わせて謝る彼が可笑しくて、笑ってしまふ。それを見て、サクが、ハルが、最後には玉ちゃんも笑い出す。ハルの寝坊は今に始まった話ではないし、それを咎めたところでハルには無意味。その時は反省するが、次に活かされることは決して無いのだから。だからハルの謝る光景は、見飽きるほど見てきた。それは既に私の中で「呆れ」を通り越して「笑い」となっていた。

その後はいつも通り、みんなでワイワイ騒いで夜店を回った。特に目新しい物が在るわけでもなく、普通ばかりが立ち並んでいたが、私にとっては夏休みで最高の思い出となった。理由は単純明快。みんなと一緒にだったから！ ただそれだけ。

去年の体育祭

保健委員の私は、救護テントの下で怪我人の手当てが優先のため、どの種目にも出場できなかった。それに関して知った時、私に反論は無かった。特に出たい種目も無かったし、このクラスの誰もが優勝など狙っていなかったし、少し面倒にも思っていたから。

しかし、個人の種目決めになって事は起きた。いつもこういう時は寝ている彼が、挙手して発言する。

「やるからには勝ち、目指そーぜ！」

教室は一瞬、静まり返ったが、サクが一人拍手をした。それに便乗して他の生徒も賛成しだした。こうして私を除く私のクラスは一致団結して、優勝を目指した。最初は嫌がっていた生徒も、ハルのしつこさに負け、一人また一人と放課後の練習に参加するようになった。

当日、見事な体育祭日和になった。

炎天下で行われた体育祭は、当然の如く熱中症者を出した。救護

テント内は忙しさを極め、全く競技を見ることができなかった。

それは昼が過ぎても変わらず、落ち着いたのは最後の競技の中盤が過ぎてからだった。なまじ競技に出た方が楽だったかも、と後悔しながら、最後の種目・クラス対抗リレー一年の部を見た。私のクラスは練習の成果を存分に発揮して、二位と半周差をつけて独走していた。

ちょうど、次のバトンをもらうのはハルだった。綺麗なバトンパスでタイムロスなく、ハルはスタートした。ハルはどんどんスピードを上げた。最下位の走者と並んで走っていた姿は明確に覚えている。

応援席でみんなが「抜かせー！」とか「がんばれー！」とか言ってるのが、とても悔しかった。私もそちら側に居なかった。そう後悔したのが馬鹿みたいに思える出来事が起きるまでは……。

「よう、クツシー。救護、お疲れさん」

今までグラウンドを走っていたハルが、私の目の前に居た。当然、私は慌てた。何がどうなっているのかさっぱり分からなかった。夢かと思ったが、現実だった。そして彼は言う。

「一緒にゴールしようぜ。だから、走るんだよ。何でって、……クツシーが手当てしてくれたから、今のクラスおれたちが在るんだ。クツシーもクラスの一員だ！なかま だから最後は一緒に、だ」

とてもうれしかった。放課後の練習が始まってから、クラスの誰とも話せなくなった。自分は仲間外れになってしまった、としか思えなかった。いつもの楽しい昼食の思い出が、帰ってから何も思い出せなかった。そんな苦痛な日々は今日で終わり。団結していたクラスは、またバラバラになる。

本気でみんなを恨んでいたのが、馬鹿らしくなった。みんなは私に近づこうとしていたのに、私が勝手に勘違いして避けていただけだった。

その時、私は保健委員になったことを後悔した過去の私に後悔した。

そして私はハルに手をひかれて、トラックに出た。他クラスの生徒達や教師達がざわついていたが、関係無い。そんな事よりも、今は「一緒に走ってゴールする」という事の方が私にとって最重要だったから。

それから私はハルと一緒にゴールテープを切った。ゴールにはサクと玉ちゃん、その他にもクラスメイト達が待っていた。みんなが私達を持ち上げて胴上げをしてくれた。突然の事だったけど私は快く受け入れることができた。私は独りでは無かった。こんなにも、同じ感情を分かち合える人たちが居ると気づいた。

しかしながら、リレーを一位でゴールした私達のクラスは、優勝する事は無かった。

原因は私の参加だった。私の途中参加が不正行為とされ、リレーの得点は二位のD組に取られ、私達は反則負けとなった。

リレーの得点は私達の優勝計画には必須条件で、これが無ければ優勝することはほぼ不可能だった。結果として、私達は優勝できなかった。

「みんな、……ごめんなさい」

片付けを終え、教室にみんなが帰って来たのを見計らって、私は言った。深々と頭を下げて目を瞑った。みんなの視線が私に集まった。

（分かっている。みんなきつと怒っているだろう。私がハルの無鉄砲な考えに乗らなければ、クラスは優勝していた。私は責められて当然なの……）

しかし、私を責める言葉は一向に聞こえてこなかった。あの時、聞こえたのはだんだん近づいてくる足音だけだった。

足音が止み、私が目を開けると、足元には誰かの靴があった。靴から足を辿りだんだん顔を上げていくと、そこにはよく見知った人物が居た。彼は言う。

「胸、張れクッシー！ 誰が何と思ったって、クラスの優勝は変わらない！ あんなもん誰も気にしてねーよ。そうだろ、みんな？」

ハルの問いかけにみんなは、拍手や奇声などを発して賛同した。中には、「クツシーだって、頑張ったし」と言ってくれる子も居た。そして私はまたハルに手をひかれ、教壇に上がった。そこでハルは宣言する。

「おれたちクラスの一員なかまの完走と、おれたちクラスの優勝を祝して、ここに来年も優勝することを誓う！」

言うまでも無く、みんな大賛成だった。

去年のクリスマス

丁度、部活も休みですることも特に無く、家でゴロゴロしていると、携帯に一通のメールが届いた。

送信者：サク

内容：クツシー、暇？ 暇なら今日、みんなでクリスマス会やろうと思うんだけど、適当に女子誘って、サクの家、来てくんね？

文面から察するに、送ったのはハルだとすぐに分かった。おそらくサクの携帯を借りてやったのだろう。どう考えても「サクの家、来てくんね？」は可笑し過ぎる。読んでて笑ってしまった。

しかしもう一つ思う事もあった。ハルがまだ合コンを諦めていない、という事。最終的にみんなが楽しめるものなら、私も大賛成だが、みんなの知らない人を連れて行ったとして、お互いに楽しめる気がしない。それならば、と私はあの子を誘うことにした。メールの返信は「いいよ、サク」にした。

そして木花家到着。

「お邪魔しまーす」

呼び鈴を鳴らして、誰も出てこなかったので、遠慮なしに中に入ってしまった。

「……勝手に入っていいんでしょうか？」

彼女は心配そうに私に尋ねてきた。笑顔で「大丈夫、大丈夫」と

言つて奥へと進む。実を言うと、サクの家に来るのは、これが二回目だ。一回目は、夏休みに（ハルの）勉強会に付き合つた時に訪れた。だから中は把握済み。私は居間に繋がる廊下を抜け、扉を開いた。

パン、パン

開くと同時にクラッカーが鳴つた。やつたのは当然この家に居る二人。

「よう、クッシー。（女子連れて来てくれて）ありがとな。で、クッシーは誰を誘つたのかな」

そう言つて、私の後ろでクラッカーの音に驚いて、縮こまつている彼女を見た。

「つて、玉ちゃん!？」

そう、私が呼んだのは玉ちゃんだつた。やはりハルの思惑通りになるのは、無視できなかった。そんな理由もあつたけれど、本音を言えば彼女だけ誘わないのも無視できなかった。

「な〜に〜、ハル？ 玉ちゃんじゃ、いけないの？」

「……そ、そんな事、無いよ」

私に考えがバレていると分かつたハルはたじろぎながら言う。彼の言葉には全く説得力が無かつた。後ろで静観していたサクが寄つて来て、ハルをフォローする。

「玉ちゃんの私服姿がかわい過ぎて誰か分からなかつたんだよ。……たぶん」

何についてのたぶんなのかは、突つ込まないことにした。そこまですると（良い意味で）関係ない玉ちゃんまで被害を受けない、とも言えない。ハルへの制裁はこの辺にして、私は来る途中で買った沢山のお菓子とジュースをサクに渡した。

「おー、こんなに？ こつちで用意した分より多いよ。ありがと、クッシー」

「そんな事よりも、みんなで楽しもうね」

私は釘を刺すように言つて、奥で放心状態になりかけているハル

を、起こした。

クリスマス会は思ったよりも楽しいものだった。プレゼント交換、サンタについての思い出話、クリスマスケーキの創作、ツリーの飾り付けなど、いろんな事をした。

それは私の中で、とても楽しい思い出となった。

今年のお正月

今回は私がみんなを誘って初日の出と初詣はつもつでに行く、と決意した。

振り返れば、私はいつも受け身ばかりだったから、「今回は」という考えが在った。しかし思いついた時は不安でいっぱいだった。

（みんな来てくれるかな……？　もう違う人と約束してるかな……？　みんな忙しいかも……？）

マイナスな考えばかりが浮かんて、私は一斉送信メールの送信ボタンを押すのに戸惑った。

結局、思いついたその日にメールを送ることは出来なかった。私は私が嫌になった。

次の日、冬休み中だったけどテニス部の活動日なので、学校に行った。

部活は午前で終わったけれど、私の迷いは全く解決してなかった。その日の部活に出て、良かったことは十二月三十日～一月五日までは部活が休みと知った事と、一時的にはいえ、悩みを考えなくていい時間が在った事。

しかし逃げていても何も始まらない。それは分かっているが、勇気が不安を上回らない。

そんなどうしようもない戦いが続き、気づけば家に着いていた。あの時は昼食を食べる気にならず、すぐに部屋に行った。部屋に着くとベッドに倒れた。

（ああ、どうしよう……）

そんな事をずーっと考えていると、いつの間にか寝てしまった。夢の内容はとても人に言えるものではなかった。

それは置いて、私が目を覚ますと辺りは薄暗くなっていた。目覚まし時計に手を伸ばし、時間を確認すると午後七時を示していた。冬は日が早く沈むので一日をとて短く感じる。

昼に寝始めたので部屋に明りは点いていなかった。そのはずなのに、部屋の中は青色の小さな光が規則的に点滅していた。寝起きの私は、それが携帯の「着信有り」のことだと気づくには、相当時間がかかった。机の上に無造作に置かれた、私の少し傷ついた折り畳み式の白い携帯を取る。受信メールは三件。送信者と内容は……。

送信者：ハル

内容：よう、クッシー。一月一日ってテニス部休みかー？ 休みならみんなで、はつもうで行こうぜ！ ってか行くぜ！ 準備しとけよ。寝坊すんなよ！

送信者：サク

内容：こんにちは、クッシー。一月一日の事なんだけど、もしも部活が休みならみんなで、初詣なんてどうかな？

送信者：玉ちゃん

内容：こんにちは、一月一日なんですけど、皆さんで初詣に行きませんか？ 弓道部が休みなので、もしかしたらテニス部も休みかと思つて、違つたらすみません……。

このメールは、今も私の携帯の奥底に在る。消すなんてできない、何よりも大切なメール。この時の事は「今まで生きてきた短い人生の中でこんなにも嬉しかった思い出」として私の心に刻まれた。

メールの返信はもちろん「行く！」だが、勇気を振り絞って一つ付け加えた。

送信者：クッシー 受信者：ハル、サク、玉ちゃん

内容：もつちろん、行くよ！ でも初詣もいいけど、みんなで初日の出も見に行かない？ 南校の近くにある山ならきーっと綺麗に見えると思うの……。どうかな？

返信は言うまでも無い。今年の一月一日は、朝から夜までみんなと一緒に過ごせてとても楽しかった。

小学生みたいな感想かもしれないけど、あの一時は本当に「楽しい」という言葉以外で表すことはできない。きつとこれから先、様々な言葉を知っていくかもしれないけど、この時の事を表すのはやっぱり「楽しい」しかないと思う。

午後十二時五十分

「あ、あのおー、大丈夫ですか？」

私は、箸でミニトマトを持ったまま、ずーっと考え込んでいる（ように見える）彼女の顔を覗き込みながら言った。

彼女が何かを考え込んでいる内に昼休みは随分過ぎました。そして彼女は、まだ半分以上残っているお弁当を急いで食べ始めました。

「そ、そんなに、急ぐと危ないよ……！？」

私が心配して言ったけれど、彼女は「大丈夫」と言って、ご飯を頬張り続けました。

しかし彼女の動きは三秒ともちませんでした。彼女は顔を真っ赤にして嘔せ始めました。私は急いでコップにお茶を注ぎ、彼女に渡した。彼女はお茶を一気に飲み干すと、一息ついきました。私は彼女が少し落ち着いたのを見計らって、本当に大丈夫か尋ねました。

「……大丈夫？」

「うん、もう平気。いやー、死ぬかと思ったよ。ありがとね、玉ちゃん」

そう言ってコップを返してくれました。その屈託のない笑みを見ると、彼女がどんな失敗をしても許してしまいます。そんな魅力が彼女には在るのです。

当然、彼女は私の憧れの人です。勉強ができて、いろんな人から好かれて、居るだけで場が和む、そんな存在の彼女はたぶん生徒の憧れだと思います。私には無いモノをたくさん持っている彼女に、勝るモノを私は何一つ持っていない。

その事に関して彼女を恨んでいるわけじゃないの。ただ……同じ人間、いえ同じ女の子なのにここまで違うのは何でだろう、って思っただけです。

こんな風に思い始めたのは、彼女と仲良くなってすぐでした。彼女の周りは常に人が居て、彼女はその人たちに必要とされていた。そんな彼女を見る私は、いつも独り^{ひと}りで、誰からも必要とされていませんでした。

ある時、自分の席で読書をしていると彼女が私を訪ねてきました。「ねえ、豊玉さん。読書もいいけど、今日はみんなとお喋り^{しゃべ}りでもない？」

そんな誘いを受けたのは生涯で初めての事で、当時の私はとても戸惑いました。今となっては、どうしてそんな事で戸惑ったのかが不思議に思えます。

結局、あの時の私は何も答えませんでした。そんな事はお構いなしの彼女に連れられ、クラスの女子の輪に入りました。最初は当然、その輪に入っても何も話せませんでした。

しかし彼女だけは、諦めず私に何度も話題を振ってきました。その内みんなが……

「豊玉さんって何が好きなの？」

「趣味は？」

「何部だっけ？」

と、まるで転校生にするような質問を訊いてきました。しかしそれも仕方が無いことだったのです。当時の私はとても閉鎖的で、一日クラスの誰とも会話を交わさない日が日常的でした。

そんな私を変えたのは、紛れもなく彼女です。だから、私が彼女を恨む事など一つも在りません。私に無いモノを持っている彼女が

居たから、何も持っていない私の「今」が在るんですから。それに、開耶君（口には出せないけど）と仲良くなれたのも、春樹君とも知り合えたのも彼女のおかげだから……。

でも最近、私が悩んでいる事は彼女との関係についてです。

彼女はとても面倒見が良くて、私みたいに一人ぼっちの人を、ほっとけなかつたんだと思います。じゃあ、もしも私が普通の女の子だったら、彼女は私と仲良くなってくれたでしょうか？

私にとって彼女は尊敬すべき人であり、良き友達です。しかし彼女にとつての私は「助けるべき対象」でしかない、のかもしれないと思うのです。

要するに「私は彼女を友達と思っているけれど、彼女は私の事を友達とは思っていないのかもしれない……」という事について悩んでいるのです。

（クラスで、いえ学校で有名な彼女と、近くに居られて舞い上がった私の勘違いだったのかな……？ それとも彼女は純粹に独りだつた私を助けただけで、私が勝手に彼女に付き纏^{まと}って居るのかな……？ 今訊いてみようかな……？）

午後十二時五十五分

「え、えーっと、あの、その……。」

「ん？ どしたの？ ……そういえば、サク遅いね。」

流石に直接訊く程の勇氣はありませんでした。開耶くんの事も心配ですが、聞けるチャンスは今しかないと思うから……頑張ります。

「そ、そうですね。……あの、その、変な事訊きますけど、どうか答えてください。わ、私って、夏澄ちゃんの……友達です……か？」

言えた。勇氣を振り絞って、今まで疑問だった事を自分の力で何とかできた。昔の私だったら、疑問を疑問のままにしていたかもしれないけど、私、変わったんだ。

たとえこの質問の答えが、とても残酷なものでも受け入れる覚悟ができました。私はしっかりと彼女の眼を見た。

「えいつ」

彼女に軽く頭を叩かれました。それが質問の答えとは思えずにきよんとしていると、彼女は話してくれました。彼女にとつての私を……。

「もう、ホントに変な質問だね。玉ちゃんが私の友達じゃないって、ありえないじゃん！ 誰かに何か吹き込まれたり、自分自身を下に見て『私なんか』って思ったりして、そんな事訊いたのなら、しっかり言つてあげる。玉ちゃんは私のホントに大切な友達だよ」

そう言つて彼女は私の手を握ってくれた。彼女の手はとても暖かくて、まるで彼女の優しさに触れているようでした。

「実はね、初めて玉ちゃんを見た時、昔の自分と重なったの。……小学校に入学した頃の私つて今みたくなってね、いつも独りだったの。そんな時、ハルが声をかけてくれたの、『お前も一緒に遊ばーぜ！』つて。それから私、とっても変わった。

……だから玉ちゃんにも、そういう人が現れたら変われると思つた。けどね、現れるのを待つんじゃなくて、私がそういう人になればいいつて分かったの。昔の私みたいな、独りで寂しい気持ち、もう誰にも味わつてほしくない」

彼女の手を握る力が少し強くなった。彼女が強い信念を持っているのが、手を通して私にすぐ伝わりました。

今日、私は彼女の過去を初めて知りました。そして私は勘違いをしていました。彼女は最初から面倒見が良くて、みんなから好かれる人ではありませんでした。彼女も普通の女の子だったのです。普通の女の子と同じように、努力して、自分の殻を破つて、みんなに認めてもらつたんです。

そして今は普通の女の子の殻を破る手助けをしているんです。

「……やっぱり、夏澄ちゃんはとてもすごい人です」

と、言つた時にはもう彼女の姿は私の前に在りませんでした。教室を見回すと、ここから少し遠くの方にある、人だかりの中心に彼女は居ました。

私の小さな眩きは、彼女を訪ねて来た多くの生徒によって掻き消されてしまいました。が、こちらに向かつて見せてくれた彼女のピースサインと笑顔が、私の言葉が「しっかり聞こえた」と言っているように見えました。

果たして、救った者と救われた者。両者を繋ぐ絆は永久とわに続くのか……。

クシ玉物語（木花開耶物語 番外編）1話（後書き）

この先も続くお話……かもしれないので一応1話として置きました。
続きはまた二人が二人きりになった時にでも……

本編の5話の方はdNOVELsでAパートのみあげて在ります。
残念ながら、まだ書き上がってないので、こちらの方に上げる目処^{めど}
は立っていません。

早めに続きを書く気はあるので、出来れば今月中には……と考えて
はおります。

では、お読み頂きありがとうございます。次回も宜しければ読ん
でみてください。

b y c r o w

木花開耶物語5話 前編（前書き）

予想以上に5話が長くなりそうなので、前後編に分けました。

……と言いますか、これから全部この調子でいくのではないかなあ、と心配です（時間と体力的に）……。

木花開耶物語5話 前編

PROLOGUE

二XX六年六月八日 七時十五分 住宅街跡付近

その時、轟音と共に地面が震えた。

そして音がしたのは間違いない。駅の方だった。しかし地面の揺れは確実に地震では無かった。

「二二ギ……」

ウズメさんに抱えられた僕はなす術も無く、ただ行く末を見守る事しか出来なかった。

（僕は……僕は、なんて無力なんだろう……）

いきなり現れた大男に怯み、怪我人の女の子に心配され、今は僕よりも（見た目）弱そうな女性に抱えられている。無力を通り越して、情けない。

ウズメさんも駅を出てから、黙っている。偶に駅の方を見ているが、声は発しない。

（掛ける言葉も無い、か……？）

自分の不甲斐無さを痛感した、と同時に不確かな目標も見つけた。強くなりたい

ケンカに勝てるとか、腕力があるとか、そういうのでは無い。純粹に誰かを守れる力、誰かに頼られる力、誰かに認められるようなそんな都合の良い力。誰も傷つけずに、でも圧倒的で絶対的な力。そんな夢の様な力、それが在れば……あの大男にも……。

一分前 駅のホーム

「はあ、本当に彼方という人はいつも、いつも私の邪魔しか致さないのですね？」

深い溜め息と共に瓊瓊杵の口を衝いて出たのは、遙か上空に居る誰かに向けての悪態だった。

そんな彼女は本日も以前と同様の、ゴシッククロリータを思わせる格好で、夜空を見据えている。その暗闇に映える彼女の姿は、宛ら女王だった。しかし、そんな清楚で気品のある彼女の風貌から、悪態など縁の無い存在かと思われていたが、実にあっさりと覆されてしまった。どうやら、見た目と中身が比例しない事こそがこの世の理であり、常識らしい。

「彼方がこの戦を、どう勝ち上がっていくのかまで口出すつもりは毛頭ありません。ですが佐久夜様を狙う、とあらば、こちら黙って見過ごす訳にはいきません！」

三十秒前 駅上空

「なーんか、下で怒ってますよー いいんですかー？」

と、お気楽な調子で現状報告をする登陽 毘美。当然、同乗者の大男は無視。ただ先程から、獲物が逃げて行った方を眺めている。

「ねえ、用が済んだなら戻ろうよー？ 此処に居てもしょうがないしー」

無反応の大男。首すら振らない。もう何を考えているのか常人では推測不可の領域。

「ねえ……」

と、話しかけたその時。今の今まで木花 開耶を見ていた大男が、駅に居る者の気配に目を向けた。

「ぬ？ この気は……瓊瓊杵か？」

本日、聞いた大男の第一声だった。

「あつ、ちよつ、どこ行くのー！？ ……………。はあ、今まで黙って居たかと思えば、急に船から降りて、どっか行っちゃうし……はあ」

ただただ溜め息しか出なかった。

十五秒前 とあるビルの屋上

「……でね、って聞いているハル様？」

「ん？ ああ、はいはい」

「うー、絶対聞いてないでしょ？」

「ん？ ああ、はいはい」

「もうっ！！」

日が沈んだ頃から、彼の様子がおかしいのは明らかだった。上の空、と言うよりはどこか遠くを一心に眺めている。けれど、彼の見ている方向には何も見えない。ただ夜空が拡がっているだけ。でも、共通している事もある。それは見ている方角。それだけは毎回、決まって南東を見ている。

（ああ、ハル様（の頭）、大丈夫かな……？）

五秒前 浅間山頂上^{あさま}

「……乱入者共が間に合つて、アイツは逃げ延びた、か。面白いモノが見られると思つていたのだが……仕方ない、これも天の運命^{さだめ}に従わざるを得ないな」

不満そうな口振りの傍観者は、そこまで事を見届けると深い闇へと消えて行った。

果たして、傍観者の目的とは……？

二××六年六月八日 七時十五分 駅のホーム

地が揺れ、空気も震える、そんな夜。一人の落下物と、一人の少女が出遭う。

「む……やはりこの気は瓊瓊杵だったか……」

土煙が立ち込め、視界が思うように晴れない中、大男は確信染みた声で呟いた。事実、大男の言う事は正しいのだが、瓊瓊杵は動じる事も、受け答える気も無いようだった。

「……………」

「むう？ 久方振りの再会にしては硬いのお、瓊瓊杵……」

ホームと線路の間に落ちた大男が、のんびりとした足取りで瓊瓊杵の居る方へと、気を頼りに向かって行く。しかし瓊瓊杵はその行

動を見ても、逃げるどころか、動く素振りすら見せなかった。どう考えても、目の前に居る大男が異常なのは一目瞭然の事だった。それは一概に瓊瓊杵が勇敢なのか、無謀なのか、怖じ気づいて動けないのか、それとも勝算がある故の余裕なのかは、知る由も無い。ただ、一つ言える事は　この出遭いが、更なる非日常への一歩となるという事だけ……。

「知らざる日常」

二××六年六月八日　七時十六分

二人の間を遮るように存在していた土煙は完全に晴れ、本当の意味で初めて対峙した。つまり、相手が相手とする相手をお互いに初めて認識したのがこの時だった。

大男の薄く笑みを浮かべた表情からは、相手が予想通りだった事が見受けられた。それに対して瓊瓊杵の心底、嫌そうな表情も相手が予想通り最悪だった、という事が見て取れた。

「はあ……単刀直入に伺います。私の佐久夜様に何か御用でしょうか？」

話すのも億劫なのか、溜め息混じりに問い質す瓊瓊杵。しかし大男はその問いが意外だったのか、愚問過ぎたのか、失笑してしまっ

た。

両者の間に重い空気が流れる。

しかし、それも束の間の事だった。短い沈黙の後、大男は問いの答えを語り出す。

「用じゃと？　戯けた事を申すな。これは戦じゃぞ、瓊瓊杵。敵に遭えば、戦いを挑むのが道理。瓊瓊杵よ、甘い心構えで臨むのならこの戦から即刻、退くが良い。今のような事を戦の度に問うているようでは勝てぬ、絶対にな」

「そうですか。御忠告、どうもありがとうございました。……ですが、彼方にそのような心配をされる筋合いなどありません。私は、私のやり方で佐久夜様を勝利に導きます」

怪訝な顔で見つめる大男を、真つ直ぐと睨み返す瓊瓊杵。数秒間、睨み合い、先に折れたのは大男の方だった。

「……まあ、よいわ。此度は様子を見に参っただけじゃ。今宵は御前の怪我に免じて、去るとするかのお」

「そうですか。それは、それは残念です。彼方を此処で脱落させられるかと、胸が騒いでいたのですが……御言葉に甘えて、また次の機会に致しましょう」

と、笑顔で返す瓊瓊杵。しかし、その目はまるで笑っていない。むしろ殺意に溢れているようにも見える。けれども、大男はそんな瓊瓊杵の素振りには目もくれず、既に視線は空を見つめていた。

「瓊瓊杵よ」

空を見つめたまま、大男が呟く。

「はあ、今度は何ですか……？」

それに心底、嫌そうに応じる。

「情けを掛けるのは今日限りじゃ。次は容赦無く、……………」

大男の語尾は、突然現れた空飛ぶ船の着陸による風と、それに乗っていた女の奇声で掻き消された。

「あつ、居たーっ！　つて、女の子と？　あれあれ？　もしかして

……浮気？　えゝゝっ！？」

「……あのはしたない女子は？」

「我が主だが、異存でも在るのか？」

「……………いいえ、ありません」

込み上げる笑いを必死に抑えながら、瓊瓊杵は何とか言葉を返す。それから大男は無言で船へと乗り、駅を去って行った。大男の連れが終始、瓊瓊杵を睨んでいたが、本人は全く気にも留めなかった。大男以外は眼中に無いらしい。

船が完全に見えなくなつてから、瓊瓊杵も船の去つた方を一瞥し、帰るべき場所へと帰るのだった。

それから駅を出た瓊瓊杵は大通りを通って、住宅街跡へと向かった。その道中、先の揺れに南海市の住民が大騒ぎしているのを見かけるのだった。

「ああ、スズキさん。地震ですよ、地震。避難した方が良いんですかね？」

「そうですね。ここは海も近いので、高い所に避難すれば安心ですよ」

「二人ともー、早く逃げましょうよー」

「はいはい。そんなに慌てると転びますよ、ヤマシタさん。もう若くないんですから」

緊迫している様で、緩やかな、外から見れば微笑ましくも無駄な、そのやりとりはまだまだ続きそうだったので、巻き込まれないように、瓊瓊杵は早足で大通りを出た。

程無くして着いた住宅街跡は、大通りとは正反対だった。灯りの消えた建物はどこか寂し気で、人の居ない道はいつにも増して静かだった。

こういう寂れた空間を、余り好ましく思えない性分の瓊瓊杵だが、此処だけは特別好きだった。そして、此処が開耶と出会った時から瓊瓊杵の住処と成っていた。

とは言ったものの、辺りを見回しても、この時間帯に見えるのは夜の闇だけ。此処は星のか細い光も、不完全な月の明りにも照らされない暗黒地。住処とは言え、夜になると瓊瓊杵にさえも把握し切れない場所となってしまう。それだけが、此処の不便な点と言っても過言では無かった。

そんな葛藤を抱きながら、奥に向かって歩いていけると、数メートル先から人為らざる異様な気配を察知し、瓊瓊杵は本能的に立ち止まる。

「瓊瓊杵様、私です」

その声を聞き、瓊瓊杵の警戒が解ける。すると瓊瓊杵の視界が段々と闇に慣れていき、声の主の姿が目映る。

声の主は瓊瓊杵の前に膝をつき、顔を伏せて待っていた。

「はあ、びっくりした」

瓊瓊杵の感じた人為らざる異様な気配は、先に逃がした^{うすめ}鉦女の気配だった。

「すみませんでした。それよりも、瓊瓊杵様が御無事で何よりです」
その言葉を聞き、瓊瓊杵の顔が少し暗くなる。

「心配をかけて、すまんかった。しかし、奴に対抗しうる力はそなたにない。然らば、そなたをあの場合に残す訳には……」

「大丈夫です、瓊瓊杵様。私も自分の力量は存じております。それに、あの方との決着は瓊瓊杵様の問題です。私が出る幕などございません」

物分かりの良い鉦女には、瓊瓊杵が考えている事はお見通しの様だった。それを聞いた瓊瓊杵の顔から暗さが無くなるのかと思えば、暗さはまだ残っていた。

瓊瓊杵の重い口が開き、暗さの原因が明かされる。

「……そうじゃ、私はもう一つ、そなたに謝らなくてはいけない事があった」

「？ それは何ですか、瓊瓊杵様？」

「それは先程、そなたを敵と勘違いした事じゃ」

瓊瓊杵の中で一瞬でも鉦女を敵と勘違いした事が、ずっと引っ掛かっていた様だ。

「いえ、駅の一件もあり、参加者達が動き出した可能性が否定できないのも、また事実。瓊瓊杵様が、緊張状態だった事も考慮すれば致し方ないかと思われます。

それよりも、今宵からは今までよりも一層、警戒心を高めて過ごさなくてはいいけません。佐久夜様を守る為にも」

それを聞いた瓊瓊杵の顔にはもう暗さは無かった。そして瓊瓊杵は、鉦女が本当に自分の良き理解者だ、と言う事を改めて実感していた。

「そうじゃな。……それよりも鉦女、佐久夜様は^{いずい}何処へ？」

「時間も時間でしたので、自宅にお返ししました」

と、細女が開耶の家の方を指し、答える。すると名残惜しそうに瓊瓊杵がその方を見つめ、小さく低い声で呟く。

「細女」

「はい、何でしょうか？」

細女も瓊瓊杵の声色に合わせて、訊き返す。

「此度こたひの事に付いて、佐久夜様は何か仰おつしやうたか？」

「いえ、特には。佐久夜様の御様子から察するに未まだかと……」

「そうか、それは些いさかおかしいのぉ」

「はい、何者かによって仕組まれた可能性が考えられます」

二人の間に、短い沈黙が流れる。当然、その沈黙を破ったのは瓊瓊杵の方だった。

「まあ、よい。佐久夜様が出るまでも無く、敵は私達で一掃する」

先程の重い雰囲気とは打って変わった口調で、瓊瓊杵が言う。しかし、その言葉に細女は快く了解する。

こうして本人の意見を完全無視した、瓊瓊杵達による、開耶の爲の、開耶を守る作戦が決まったのだった。

「佐久夜様、私は奴を含めた全ての外敵から彼方あなたをお守り致す。然らば、彼方様が望んだ未来を手にする事を、私は冀こいねがう」

それは瓊瓊杵が闇の中より見つけた、流れる輝きに託した切なる思い。

二XX六年六月九日 とあるビルの屋上

目が覚めると、夜が明けていた。それから段々と意識が回復していき、ここまでに至った経緯を思い出す。

（確か、昨日は……）

遊びをせがまれて、仕方なく付き合ったつもりが、気づいたら昼を過ぎてて、飯を食いに街に出掛けた先で変な会話を聞いて、それで……。

「ハル様……むにゃ」

「！？ はあ、何だ、寝言かよ……びつくりした」

俺の隣で、俺の腕を枕に、未だ熟睡中の女の子。見た目（主に顔）こそ歳下に見える（つまり童顔だ）が、中身も相当な幼稚さ加減で成長しているのは背丈と胸と尻だけ。とは言っても、歳は知らない（訊けない）し、身長も一五〇そこそこで、胸と尻は身長割に出てるっただけだ。

（まあ、高校生じゃねえわな……）

しかしこの子こそが、今回の朝帰りの原因である。

まあ、色々ツツコミたい事は俺にも、聞いてる奴等にも在るだろうが、全て置いて、まず聞いて欲しい。

この子は俺の 嫁だ。でも、それだけしか俺には思い出せない……って、おい！

ちよつと待った！ 帰るなつて！ 話は最後まで聞いてけつて！ 冗談じゃないんだよ！ おーい？ 誰か居ますかー？ 居ませんよね？ はあ、これから先、どうなるのやら……？

二XX六年六月九日 南海市立 南海高等学校

キーン、コーン、カーン、コーン

予鈴が鳴った。間もなく担任が来て、HRが始まる。しかし教室内は、それどころでは無かった。原因は満場一致で、教室にある二つの空席だった。残念ながら、この二つの空席が列の一番後ろに在れば、ズレた時期の転校生で納得だった。しかし、その机は私達がよく知る人達の物に間違い無かった。

（サクもハルも、何してるの……？ 早くしないと担任、来ちゃうよ……）

どちらからも、連絡のメールは来ていない。

「玉ちゃん、サク達から連絡あった？」

と、尋ねると申し訳なさそうに小さく首を横に振った。私は玉ちゃんにいいよ、とジェスチャーして向き直る。

もし、遅れて来るなら、担任にバレないように出席確認まで時間を稼いでくれ、というメールが来る。それにこういう時、二人は大抵、一緒に来る。ハルが居なくて、サクが居る時はあっても、サクが居なくて、ハルが居る時は無い。

しかし、どちらからも欠席の連絡メールも、遅刻の連絡メールも来ていない。

（このまま、何もなくていいの？）

そう、思った時、教室のドアが開く。教室は一斉に静まり返り、みんなが入って来る者に注目した。そして願った、入って来るのが二人である事を……。

しかし、そこに現れたのは 無情にも担任だった。

「よし、出席、取るぞー」

ドアが閉まるのとほぼ同時に、この教室の現状をまるで知らない担任が口にする。それを聞いた生徒達が再びざわめく。

その中で私は一人、試行錯誤をしていた。サクとハルは本当に来るのだろうか、と。

もし来るのなら、私のすべき事は時間稼ぎ。

もし、二人とも来ないなら、どうして来ないのか担任に尋ねるのが私のすべき事。来ない理由がサボりなら心配は要らないけど、もし風邪とかだったらお見舞いに行かないと、心配で何事にも身が入らない。

こんな風に成ったのには、明確な理由がある。

それは小さい頃のある出来事で、それ以来、私は自分の知らないところで、自分の知らない事が起こっていると思うと、何もかもが怖くなった。だから、私は何もかもを知りたい。知らないという事が無い程に知りたい。知らないという恐怖を知っているから、知らないという事を 無くしたい。

こんな自己満足で自意識過剰な行いが、誰かに受け入れて貰えるとは思ってない。それでも私は、全てを知らなくてはならない。自分の為にも、そして周りの為にも……。

と、過去の私なら考えていただろう。けど今は変わった。もう自分を優先するような、嫌な自分とは別れたのだ。だから、私は二人が来ると信じて　時間を稼ぐ！

そんな、心配性とは似て非なる感情を追い払うのに、時間をかけ過ぎてしまった。気づけば、担任はもう出席を取り始めていた。

「えーっと、次は……かしわぎ 柏木」

「……は、はい」

（もう、柏木ちゃん！？　何でもいいから話を逸そらさなきゃ……！）

「あつ、あの、先生……」

「ん？　どうした、クッシー？」

ここで注釈を入れさせて頂くと、一部の教師は私の事を友人達が呼ぶように「クッシー」と言う。因ちなみに、その第一人者がこの担任だった。

思い返せば、初対面時から妙に馴れ馴れしい（良く言えばフレンドリーな）感じだった。しかし、この担任の深層心理は未だに謎な部分が多かったりする。楽観的かと思えば、急に真面目な話をしたり、何の前触れも無く授業を変更したりと、正に破天荒な教師なのだ、この人は。そして、そんな担任を私は自然と危険視し、近づくかなくなった。

「え、えーっと……ですね」

因よって、私は固まった。

話し掛けるのまでは、何の問題も無く円滑に進んだが、その先は何も考えていなかった。とりあえず、出席確認を止める。それしか考えていなかった私のミスだった。

いつもは前もって連絡が在る為、共通の話題を用意して置くけど、今日は突然の事だったせいとか何の話も無い。つまり、私には沈黙以外の手は無い。いや、そもそもこんな（良い意味で）変人と合う話題なんか、常日頃から持ち合わせられる訳が無いのだ。

「どうかしたのか、クッシー？」

「えっ、はい。あの、その……ですね」

万事休す、教室の扉に視線を送るが、誰かが入って来る気配は無い。そして会話を引き延ばすのもこれが限界。これ以上は、私の手に余る。

（どうすれば……？ サク、ハル……私に出来る事って、なに？

それとも、私ってなにも出来ないのかな……？）

俯いたその時、クエスチョンマークを頭上に浮かべていた担任が、何か閃いたかのように納得し出した。

「ああ。分かった、分かった。それなら俺も知ってるからー」

「えっ？ 何の事ですか？」

勝手に（悩ませたのは私のせいだけど）悩んで、勝手に納得されても、こっちはさっぱり。当然、唐突に状況説明を求めた。

「は？ だからサクやは今日、休むって、保護者から連絡きてたぞーって話」

「えっ？ そ、そうなんですか？」

担任の意外過ぎる発言に、思わず訊き返してしまった。

「は？ それが言いたかったんじゃないの？」

「ええ、まあ。いや……いえ、はい」

とりあえず丸く収まった事を良しとしようとする気持ちと、他人の厚意（？）に甘えてしまつて良いのかという後ろめたさが交錯し、答えを曖昧にってしまう。

「どっちなんだよ。まあ、いいや。それよりも問題なのは、連絡をしてきた奴だ」

「え？ サクの……あつ、開耶君のお母さんじゃなかったんですか？」

つい、教師の前で愛称を使ってしまった。

この担任はそういう細かい事を気にしない人だけど、それが習慣になつてしまい他の教師の前でも出るように成つては問題だ。優秀な生徒としてではなく、一人の人間として、それが礼儀であり暗黙のマナーだ。

（いや、前提として私はこの人を教師と認識していないんじゃない

かな……？)

「ああ。なんか声が随分と若かったし、サクヤの事を様付で呼ぶから、おかしいなあ、と思ったんだよ。それで、サクヤとはどういう関係ですかー、って思い切って訊いてみたんだよ」

(やっぱりこの人、やる事が教師っぽくないなあ……)

「そしたら、ソイツ『私ですか？ 私は佐久夜様の嫁ですが』って平然と答えやがったんだよ。だから俺も『はい、そうでしたか』って切ったよ」

「……………」

とりあえず、教室は白けた。別に、そういう作戦を前以って立て居た訳でも、合図を取った訳でも無く、一斉に音が止んだ。そして、みんなの視線は自然と最後に喋った担任に向けられた。

そこで空気を讀んだ担任は、今、私に話した内容をもう一度ゆっくりと話し出す。

「だからな、よく聴けよ。サクヤの嫁を名乗る謎の人物から、欠席の連絡が俺に来了。お前等はコレをどう思う？」

「サクを速攻、学校に連行してその嫁とやらについて尋問します！」
目に怒りを浮かべた男子一同が口を揃えて言う。

「今すぐサクくんからお話を伺いたいです！」

笑顔の女子一同もまた、口を揃えて言う。

どちらも今の話で何を想像したのかは分からないけれど、教室内が乱れ始めている事に変わりなかった。

もう私、一人だけでは收拾がつかない程に教室は荒れていった。

最初は周りの人達と喋っているだけの小さな塊が、段々と強者の居る塊に飲まれ、巨大化していき、最終的には二つの塊と成り、騒いでいる。

一つは、サクの嫁を見たいと主張するグループ。多数派、メンバーは主に女子で構成。

そしてもう一つは、そんなサクを敵対するグループ。少数派、メンバーは主に男子で構成。

因みに私と、玉ちゃんと、元凶は中立と司会進行役。

「さあさあ、全員がどちらに付くか決まったところで、穏便に話し合いで解決しようじゃないか？ どちらかが、どちらかを納得させれば勝ち。その方が公平だし、お互いケンカには成らねえだろ？」

それに納得できねー奴は、反論すればいいんだから、なあ？」

かくして、サクの今後が懸かった討論会の火蓋は切って落とされるのだった。

（サク、学校来ない方が良いかも……）

二XX六年六月九日 木花家

「佐久夜様の容体は？」

面会謝絶、という赤字の貼り紙をした、外とは隔離された部屋から出てきた私に瓊瓊杵様が駆け寄り、待ちに待った事を尋ねられる。それと言うのも、佐久夜様の護衛と思つて今朝、自宅に向かったところ、玄関で倒れていた佐久夜様を発見し、今に至るのですが……。

「発熱、頭痛、嘔吐、その他諸々の症状が見受けられますが、命に別状はないかと」

「はあ、良かった。つて、良くない！」

一瞬でも佐久夜様の苦しみを軽く見てしまった事に対して、瓊瓊杵様が御自分で即座に訂正を入れる。それを俗に乗りツツコミ、と言うのは瓊瓊杵様の知るところではないのだからうけれど、私はこの状況下で笑うべきなのか、諫めるべきなのか、対応に困り果ててしまった。すると、助け舟と言うには少々語弊があり、偶然と言うには必然的な言葉が、瓊瓊杵様より発せられる。

「如何にか為らんか、鈿女？」

「如何にか、と仰いますと？」

瓊瓊杵様の心中はお察し出来ましたが、侍女である私が、主である瓊瓊杵様よりも先に申し上げるのは無礼行為。周りくどくなりませんが、こうするのが礼儀であり、私の忠義心の表れと酌んで頂ければ本望なのです。

「佐久夜様の事じゃ。如何にかして、治すか、痛みや症状を和らげる事は出来ぬかの？」

「その事なのですが……。物さえ揃えば私が如何にか出来るのですが……。何しろ彼方とは勝手が違います故、物が無ければ私には如何にも……」

主君に嘘を申すなど、言語道断。つまり、この言葉は事実。その事は瓊瓊杵様も重々承知の筈。そして私の申し上げた『物』と言うのが、此方の『物』でない事も理解して頂けた御様子で、私達の間には重い空気が漂った。

沈黙を破ったのは当然、瓊瓊杵様の方だった。何か名案を思い付かれたらしく、その顔には笑みが浮かんでいました。

「打開策を講じた。聞きたいか、鉦女？」

「瓊瓊杵様、そのような事をまた仰って……」

この態々聞きたいか尋ねるのは、礼儀の類ではなく、瓊瓊杵様の悪い癖なのです。私も私以外の者に、そのような口調を使わないように使用し出した頃から何度も遠回しに注意はしているのですが、瓊瓊杵様は基本的に私以外とは会談される機会がありませぬ故、強く言う事も出来ず、いつの間にか口癖のように成ってしまわれたのです。私の至らない教育が生んだ、悲惨な結果。願わくは、佐久夜様と佐久夜様の前でだけは、この口癖が出ない事を祈るだけです。

「よいではないか、相手は鉦女じゃし。それで、聞きたくないのか？」

「……では、是非聞かせて頂きます」

「と、その前に一つ、伺いたい事がある」

「何でございましょうか？」

「その『物』とは、彼方に在る『物』と同じ効力を有する、此方の『物』で代用は可能か？」

「そ、そうですね。言の葉の上では、瓊瓊杵様の仰っている事は正しいです。……しかし大変申し訳難いのですが、それは限りなく無に等しい可能性です」

彼方に在る物が此方にも同様に存在している、とは限らないのです。むしろ彼方にしかない物が在り、此方にしかない物が在る、その方が理に適つてます。決して交わる事の無い、上と下の世界が等しく結ばれているとは考えられません。

「それはつまり、鈿女。『物』は有るかも知れんし、無いかもしれん、と言う事か？」

「はい。及ばず乍ら私には、その問いの答えを断言する事は出来ません」

私は顔を伏せ、瓊瓊杵様の問いに率直な意見を返しました。すると、瓊瓊杵様が似合わぬ高笑いをし始めました。私は到頭、瓊瓊杵様の思考が如何にもならない問題に対して狂い出したのか、と心配したところ、それは杞憂に終わりました。

「ふふふつ。やはり昨今の私は冴えてるぞ、鈿女」

「と、仰いますと？」

「私の打開策は、この事態を本当に打開できるかもしれん。よいか、まずそなたは……」

二分後

「本気ですか、瓊瓊杵様？」

私は出来得る限り平静を保ちながら、今、瓊瓊杵様が説明して下さった打開策の内容について、率直且つ真面目で冷静な意見を述べさせて頂いた。通常なら、主の意見に訊き返すような真似は致しません、今回ばかりは主の心意を確かめざるを得ない内容でした。

まさか、私と瓊瓊杵様が。

「本気じゃ。これも佐久夜様の為、そう思えば、このような事で怯んでいる場合ではない！ それに今後の事も考え、この策は実行不可欠じゃ！」

と、一人で頷く主を横目に、私はもう回避は出来ないと覚悟をしていました。

（何故か、瓊瓊杵様からは本命の任務とは違う活気を感じるののは気のせいでしょうか……？）

上機嫌な主の後を、腑^ふに落ちない侍女はゆつくりと付いて行く。
その先が既に戦場に成っているとは露^{つゆ}も知らずに……。

木花開耶物語5話 前編（後書き）

お読み頂き、ありがとうございました。

ご意見・ご感想、気長に待ってます。

指摘やアドバイスでも全然構いません。

誤字・脱字の修正は随時行い、行い次第、活動報告する予定です。
内容が一気に変わる事はありません。

木花開耶物語 番外編 キャラクター紹介（前書き）

えーっと、作者のcrowです。ここまで読んで頂きありがとうございます。この度は、書き忘れた事と言いますか、設定を少々書き加えておこうかと思ひまして……。

本題に入りますと、第1話を書き終えてから相当時間が経ちますが、今一度1話を読み返してみたところキャラクターの特徴が一切書かれていない事に気づきまして……。これはマズイ、と思い、設定資料を書き添えていこうと思ひます。勿論ネタバレはしませんので宜しければ参考に……？

木花開耶物語 番外編 キャラクター紹介

氏名：木花このはな 開耶さくや

愛称：サク

所属：南海市立 南海高等学校 2年

性別：男

年齢：16歳

誕生日：8月6日

部活：帰宅部

住所：南海市 浅間区在住

身長：160cm

体重：49kg

頭髮：気取つていると言うよりは、面倒くさいという理由から髪は少々長め。青を限り無く暗くした色。

服装：普段は学校なので制服。休日は動きやすいラフな格好。基本的に家を出ないので部屋着の様な物を想像していただければ……。

氏名：神屋かみや 春樹はるき

愛称：ハル

所属：南海市立 南海高等学校 2年

性別：男

年齢：17歳

誕生日：4月17日

部活：バスケットボール部

住所：相良市さから 榛原区はいばら在住

身長：182cm

体重：72kg

頭髮：短髪……意外に何て書けばいいのかわからない。ちょっと茶髪気味。

服装：私服はパンク風。制服は崩して着てる。
書き忘れていた身体的特徴：細目

氏名：櫛灘 夏澄 くしなだ かすみ

愛称：クッシー

所属：南海市立 南海高等学校 2年

性別：女

年齢：16歳

誕生日：1月11日

部活：テニス部

住所：相良市 さがら 遠江区 えんこう在住

身長：158cm

体重：48kg

頭髮：ショートカット

B：82 W：57 H：78 （この項目は変更する可能性あり）

服装：普段は制服or練習着。私服は意外と少女趣味……？
書き忘れていた情報：絶賛恋愛中！？

氏名：豊玉 美七 とよたま みな

愛称：玉ちゃん

所属：南海市立 南海高等学校 2年

性別：女

年齢：16歳

誕生日：8月1日

部活：弓道部

住所：南海市 なんかい 大室区 おおむろ在住

身長：155cm

体重：50kg

頭髮：セミロング（前髪は目が隠れるくらい伸びている）

B：95 W：62 H：88 （この項目は変更する可能性あり）

服装：普通という言葉が表現した感じ
書き忘れていた情報：意中の人物あり（みんな知ってるか）

本名：天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命
あめにぎし くににぎし あまつひこ ひこほの ににぎ のみこと

愛称：瓊瓊杵 or ニニギ

所属：不明（物語が進み次第追加）

性別：女

年齢：？歳（物語が進み次第追加）

誕生日：？月？日（物語が進み次第追加）

部活：？部（物語が進み次第追加）

住所：？市？在住（物語が進み次第追加）

身長：147cm

体重：40kg

頭髮：スーパードロングヘア

B：68 W：47 H：70 （この項目は変更する可能性あり）

服装：ゴシックローリータ……着物なんかも似合いそうだけど、本人の強い希望で着物着用拒否（鉦女談）

書き忘れていた情報：瞳の色が赤の為、よく人から「人形」みたいと言われる。本人はそれを大変嫌う（鉦女談）

木花開耶物語 番外編 キャラクター紹介（後書き）

と、これ以上は物語が進まないと明かせないので、これにて終了とさせていただきます。他のキャラクターは暇になり次第、更新の予定です。尚、その際には活動報告を致します。それではありがとうございました。

木花開耶物語5話 後編（前書き）

本来なら、もう少し早く公開の予定でしたが、少々家庭の事情を挟みまして……（言い訳？）

言い訳ついでもう一言、この5話はこんなにも長くなる予定ではなかったです。この分だと6話も……？ って感じです。

木花開耶物語5話 後編

二XX六年六月九日 とあるビルの屋上

目が覚めると、夜が明けていた。それから段々と意識が回復していき、ここまでに至った経緯を思い出す。

（確か、昨日は……）

遊びをせがまれて、仕方なく付き合ったつもりが、気づいたら昼を過ぎてて、飯を食いに街に出掛けた先で変な会話を聞いて、それで……。

「ハル様……むにゃ」

「!? はあ、何だ、寝言かよ……びつくりした」

俺の隣で、俺の腕を枕に、未だ熟睡中の女の子。見た目（主に顔）こそ歳下に見える（つまり童顔だ）が、中身も相当な幼稚さ加減で、成長しているのは背丈と胸と尻だけ。とは言っても、歳は知らない（訊けない）し、身長も一五〇そこで、胸と尻は身長の割に出てるっただけだ。

（まあ、高校生じゃねえわな……）

しかしこの子こそが、今回の朝帰りの原因である。

まあ、色々とツツコミたい事は俺にも、聞いている奴等にも在るだろうが、全て置いて、まず聞いて欲しい。

この子は俺の 嫁だ。でも、それだけしか俺には思い出せない

……って、おい！

ちょっと待った！ 帰るなって！ 話は最後まで聞いてけって！ 冗談じゃないんだよ！ おーい？ 誰か居ますかー？ 居ませんよね？ はあ、これから先、どうなるのやら……？

二XX六年六月九日 南海市立 南海高等学校

キーン、コーン、カーン、コーン

予鈴が鳴った。間もなく担任が来て、HRが始まる。しかし教室

内は、それどころでは無かった。原因は満場一致で、教室にある二つの空席だった。残念ながら、この二つの空席が列の一番後ろに在れば、ズレた時期の転校生で納得だった。しかし、その机は私達がよく知る人達の物に間違い無かった。

（サクもハルも、何してるの……？ 早くしないと担任、来ちゃうよ……）

どちらからも、連絡のメールは来ていない。

「玉ちゃん、サク達から連絡あった？」

と、尋ねると申し訳なさそうに小さく首を横に振った。私は玉ちゃんにいいよ、とジェスチャーして向き直る。

もし、遅れて来るなら、担任にバレないように出席確認まで時間を稼いでくれ、というメールが来る。それにこういう時、二人は大抵、一緒に来る。ハルが居なくて、サクが居る時はあっても、サクが居なくて、ハルが居る時は無い。

しかし、どちらからも欠席の連絡メールも、遅刻の連絡メールも来ていない。

（このまま、何もなくていいの？）

そう、思った時、教室のドアが開く。教室は一斉に静まり返り、みんなが入って来る者に注目した。そして願った、入って来るのが二人である事を……。

しかし、そこに現れたのは 無情にも担任だった。

「よし、出席、取るぞー」

ドアが閉まるのとほぼ同時に、この教室の現状をまるで知らない担任が口にする。それを聞いた生徒達が再びざわめく。

その中で私は一人、試行錯誤をしていた。サクとハルは本当に来るのだろうか、と。

もし来るのなら、私のすべき事は時間稼ぎ。

もし、二人とも来ないなら、どうして来ないのか担任に尋ねるのが私のすべき事。来ない理由がサボリなら心配は要らないけど、もし風邪とかだったらお見舞いに行かないと、心配で何事にも身が入

らない。

こんな風に成ったのには、明確な理由がある。

それは小さい頃のある出来事で、それ以来、私は自分の知らないところで、自分の知らない事が起こっていると思うと、何もかもが怖くなった。だから、私は何もかもを知りたい。知らないという事が無い程に知りたい。知らないという恐怖を知っているから、知らないという事を 無くしたい。

こんな自己満足で自意識過剰な行いが、誰かに受け入れて貰えるとは思ってない。それでも私は、全てを知らなくてはならない。自分の為にも、そして周りの為にも……。

と、過去の私なら考えていただろう。けど今は変わった。もう自分を優先するような、嫌な自分とは別れたのだ。だから、私は二人が来ると信じて 時間を稼ぐ！

そんな、心配性とは似て非なる感情を追い払うのに、時間をかけ過ぎてしまった。気づけば、担任はもう出席を取り始めていた。

「えーっと、次は……柏木^{かしわぎ}」

「……は、はい」

（もう、柏木ちゃん！？ 何でもいいから話を逸^そらさなきゃ……！）

「あつ、あの、先生……」

「ん？ どうした、クッシー？」

ここで注釈を入れさせて頂くと、一部の教師は私の事を友人達が呼ぶように「クッシー」と言う。因^{ちな}みに、その第一人者がこの担任だった。

思い返せば、初対面の時から妙に馴れ馴れしい（良く言えばフレンドリーな）感じだった。しかし、この担任の深層心理は未だに謎な部分が多かったりする。楽観的かと思えば、急に真面目な話をしたり、何の前触れも無く授業を変更したりと、正に破天荒な教師なのだ、この人は。そして、そんな担任を私は自然と危険視し、近づくかなくなった。

「え、えーっと……ですね」

因^よって、私は固まった。

話し掛けるのまでは、何の問題も無く円滑に進んだが、その先は何も考えていなかった。とりあえず、出席確認を止める。それしか考えていなかった私のミスだった。

いつもは前もって連絡が在る為、共通の話題を用意して置くけど、今日は突然の事だったせい何か何の話も無い。つまり、私には沈黙以外の手は無い。いや、そもそもこんな（良い意味で）変人と合う話題なんか、常日頃から持ち合わせられる訳が無いのだ。

「どうかしたのか、クッシー？」

「えっ、はい。あの、その……ですね」

万事休す、教室の扉に視線を送るが、誰かが入って来る気配は無い。そして会話を引き延ばすのもこれが限界。これ以上は、私の手に余る。

（どうすれば……？ サク、ハル……私に出来る事って、なに？

それとも、私ってなにも出来ないのかな……？）

俯^{うつむ}いたその時、クエスチョンマークを頭上に浮かべていた担任が、何か閃^{ひら}いたかのように納得し出した。

「ああ。分かった、分かった。それなら俺も知ってるからー」

「えっ？ 何の事ですか？」

勝手に（悩ませたのは私のせいだけど）悩んで、勝手に納得されても、こっちはさっぱり。当然、唐突に状況説明を求めた。

「は？ だからサクヤは今日、休むって、保護者から連絡きてたぞーって話」

「えっ？ そ、そうなんですか？」

担任の意外過ぎる発言に、思わず訊き返してしまった。

「は？ それが言いたかったんじゃないの？」

「ええ、まあ。いや……いえ、はい」

とりあえず丸く収まった事を良しとしようとする気持ちと、他人の厚意（？）に甘えてしまっただけのいいのかという後ろめたさが交錯し、答えを曖昧にってしまう。

「どつちなんだよ。まあ、いいや。それよりも問題なのは、連絡してきた奴だ」

「え？ サクの……あつ、開耶君のお母さんじゃなかったんですか？」

つい、教師の前で愛称を使ってしまった。

この担任はそういう細かい事を気にしない人だけど、それが習慣になってしまい他の教師の前でも出るように成っては問題だ。優秀な生徒としてではなく、一人の人間として、それが礼儀であり暗黙のマナーだ。

（いや、前提として私はこの人を教師と認識していないんじゃないかな……？）

「ああ。なんか声が随分と若かったし、サクヤの事を様付で呼ぶから、おかしいなあ、と思っただよ。それで、サクヤとはどういう関係ですかー、って思い切って訊いてみたんだよ」

（やっぱりこの人、やる事が教師っぽくないなあ……）

「そしたら、ソイツ『私ですか？ 私は佐久夜様の嫁です』って平然と答えやがったんだよ。だから俺も『はい、そうでしたか』って切ったよ」

「……………」

とりあえず、教室は白^{びじ}けた。別に、そういう作戦を前^{まえ}以^もって立て居た訳でも、合図を取った訳でも無く、一斉に音が止んだ。そして、みんなの視線は自然と最後に喋った担任に向けられた。

そこで空気を讀んだ担任は、今、私に話した内容をもう一度ゆっくりと話し出す。

「だからな、よく聴けよ。サクヤの嫁を名乗る謎の人物から、欠席の連絡が俺に来了。お前等はコレをどう思う？」

「サクを速攻、学校に連行してその嫁とやらについて尋問します！」
目に怒りを浮かべた男子一同が口を揃えて言う。

「今すぐサクくんからお話を伺いたいです！」

笑顔の女子一同もまた、口を揃えて言う。

どちらも今の話で何を想像したのかは分からないけれど、教室内が乱れ始めている事に変わりなかった。

もう私、一人だけでは收拾がつかない程に教室は荒れていった。最初は周りの人達と喋っているだけの小さな塊が、段々と強者の居る塊に飲まれ、巨大化していき、最終的には二つの塊と成り、騒いでいる。

一つは、サクの嫁を見たいと主張するグループ。多数派、メンバーは主に女子で構成。

そしてもう一つは、そんなサクを敵対するグループ。少数派、メンバーは主に男子で構成。

因みに私と、玉ちゃんと、元凶は中立と司会進行役。

「さあさあ、全員がどちらに付くか決まったところで、穏便に話し合いで解決しようじゃないか？ どちらかが、どちらかを納得させれば勝ち。その方が公平だし、お互いケンカには成らねえだろ？」

それに納得できねー奴は、反論すればいいんだから、なあ？」
かくして、サクの今後が懸かった討論会の火蓋は切って落とされるのだった。

（サク、学校来ない方が良くいかも……）

二XX六年六月九日 木花家

「佐久夜様の容体は？」

面会謝絶、という赤字の貼り紙をした、外とは隔離された部屋から出てきた私に瓊瓊杵様が駆け寄り、待ちに待った事を尋ねられる。それと言うのも、佐久夜様の護衛と思って今朝、自宅に向かったところ、玄関で倒れていた佐久夜様を発見し、今に至るのですが……。
「発熱、頭痛、嘔吐、その他諸々の症状が見受けられますが、命に別状はないかと」

「はあ、良かった。って、良くない！」

一瞬でも佐久夜様の苦しみを軽く見てしまった事に対して、瓊瓊杵様が御自分で即座に訂正を入れる。それを俗に乗りツツコミ、と

言うのは瓊瓊杵様の知るところではないのだろうけれど、私はこの状況下で笑うべきなのか、諫めるべきなのか、対応に困り果ててしまった。すると、助け舟と言うには少々語弊があり、偶然と言うには必然的な言葉が、瓊瓊杵様より発せられる。

「如何にか為らんか、鈿女？」

「如何にか、と仰いますと？」

瓊瓊杵様の心中はお察し出来ましたが、侍女である私が、主である瓊瓊杵様よりも先に申し上げるのは無礼行為。周りにくどくなりませんが、こうするのが礼儀であり、私の忠義心の表れと酌んで頂ければ本望なのです。

「佐久夜様の事じゃ。如何にかして、治すか、痛みや症状を和らげる事は出来ぬかの？」

「その事なのですが……。物さえ揃えば私が如何にか出来るのですが……。何しろ彼方とは勝手が違う故、物が無ければ私には如何にも……」

主君に嘘を吐くなど、言語道断。つまり、この言葉は事実。その事は瓊瓊杵様も重々承知の筈。そして私の申し上げた『物』と言うのが、此方の『物』でない事も理解して頂けた御様子で、私達の間には重い空気が漂った。

沈黙を破ったのは当然、瓊瓊杵様の方だった。何か名案を思い付かれたらしく、その顔には笑みが浮かんでいました。

「打開策を講じた。聞きたいか、鈿女？」

「瓊瓊杵様、そのような事をまた仰って……」

この態々聞きたいか尋ねるのは、礼儀の類ではなく、瓊瓊杵様の悪い癖なのです。私も私以外の者に、そのような口調を使わないように使用し出した頃から何度も遠回しに注意はしているのですが、瓊瓊杵様は基本的に私以外とは会談される機会がありません故、強く言う事も出来ず、いつの間にか口癖のように成ってしまわれたのです。私の至らない教育が生んだ、悲惨な結果。願わくは、佐久夜様と佐久夜様の前でだけは、この口癖が出ない事を祈るだけです。

「よいではないか、相手は鉦女じゃし。それで、聞きたくないのか？」

「……では、是非聞かせて頂きます」

「と、その前に一つ、伺いたい事がある」

「何でございましょうか？」

「その『物』とは、彼方に在る『物』と同じ効力を有する、此方の『物』で代用は可能か？」

「そ、そうですね。言の葉の上では、瓊瓊杵様の仰っている事は正しいです。……しかし大変申し訳難いのですが、それは限りなく無に等しい可能性です」

彼方に在る物が此方にも同様に存在している、とは限らないのです。むしろ彼方にしかない物が在り、此方にしかない物が在る、その方が理に適つてます。決して交わる事の無い、上と下の世界が等しく結ばれているとは考えられません。

「それはつまり、鉦女。『物』は有るかも知れんし、無いかもしれん、と言う事か？」

「はい。及ばず乍ら私には、その問いの答えを断言する事は出来ません」

私は顔を伏せ、瓊瓊杵様の問いに率直な意見を返しました。すると、瓊瓊杵様が似合わぬ高笑いをし始めました。私は到頭、瓊瓊杵様の思考が如何にもならない問題に対して狂い出したのか、と心配したところ、それは杞憂に終わりました。

「ふふふつ。やはり昨今の私は冴えてるぞ、鉦女」

「と、仰いますと？」

「私の打開策は、この事態を本当に打開できるかもしれん。よいか、まずそなたは……」

二分後

「本気ですか、瓊瓊杵様？」

私は出来得る限り平静を保ちながら、今、瓊瓊杵様が説明して下さった打開策の内容について、率直且つ真面目で冷静な意見を述べ

させて頂いた。通常なら、主の意見に訊き返すような真似は致しませんが、今回はかりは主の心意を確かめざるを得ない内容でした。まさか、私と瓊瓊杵様が。

「本気じゃ。これも佐久夜様の為、そう思えば、このような事で怯んでいる場合ではない！ それに今後の事も考え、この策は実行不可欠じゃ！」

と、一人で頷く主を横目に、私はもう回避は出来ないと覚悟をしていました。

（何故か、瓊瓊杵様からは本命の任務とは違う活気を感じるのは気のせいでしょうか……？）

上機嫌な主の後を、腑に落ちない侍女はゆつくりと付いて行く。その先が既に戦場に成っているとは露も知らずに……。

小一時間後……南海高校近辺

昼前、普段と変わらず南海市は寂れた雰囲気（さび）を醸し出していた。殺風景な街に輪を掛けて無人。無論、昼前は外に出てはいけない、などというルールが在る訳でも、本当に市民全員が出払っている訳でも無い。ただ単純に誰も外に居ないだけ、なのである。

しかし、今日は違った。普段は殺風景なその空間に、二つの人影が在った。

その人影は、然も自分の庭を歩くかの如く、堂々とした振る舞いで大通りを歩いて来た。その歩く姿は、パリコレなどにも充分に匹敵する優美さだった。

しかしその光景を見て、騒ぐ者も、足を止める者も、嫉妬を抱く者も居なかった。

なぜならば、この二人以外、外に居る者が居ないからだ。その点では、二人にとって良かったのかもしれない。それと言うのも、彼女達はコレを隠密行動と称していたからに他ならないのだが……。果たして、この行動のどの辺りが隠密なのかは、知る由は無い。

「それで、この立派な建物（まなびや）が学舎か？」

前を歩いていた少女が学校を指さし、後ろの女性に尋ねる。

「左様でございます」

それに対して後ろに居た女性は、執事のような立ち振る舞いで応じる。

「では、参るかの」

そう言つて、何の躊躇ためらいも無く、校門から学校へと二人は侵入して行つた。

しかし、この堂々たる不法侵入を許す道理は無かつた。と言うか許される筈が無い。これが仮に深夜こつそりと忍び込むのならまだしも、白昼堂々と正面から、というのは些いさか考えが浅はか過ぎる。

それから間も無く、二人は係りの人に呼び止められた。

「ちよつと、そのの。そう、そう、君達。ちよつと、いいかな？」

どうやら、二人はまさか自分達が呼び止められるとは、全く考えていなかった様子。

「何でございましょうか？」

係りの人の呼び掛けに応じたのは、前を歩く少女だった。その少女は、後ろで控える女性を一瞥いちべつしてから、係りの人の方を向いた。

「えっ」

だが、係りの人は驚愕きょうわくした。それは振り向いた少女が、正に「人形」と評して間違いない程に人らしかつたからだ。

風に靡なびく清らかで長い黒髪、服から露出した肌の白さ、そして何よりも印象的なのは大きな赤い瞳。それが彼女の「人形」とよく呼ばれる由縁であつた。そう、人に見えないけど、人の形をしているモノ。だから 人形。

「あつ」

数秒間、見惚れてから係りの人は我に歸つた。常識的に理由もなく凝視されれば、不快に思う。しかし、少女は見られていた事特に気にした風はなく、係りの人を静かに薄く微笑むように見据えていた。その瞳に怒りの色は無く、むしろ穏やかだった。

それから、少女は穏やかな調子で係りの人に問い返す。

「それで、私達に何か御用が在ったのでは？」

「ああ、そうだった。お譲ちゃん達は、何組の生徒だい？」

彼女達にとって、その問いは不意打ちだった。そもそも、学校を学舎と呼称している時点で、学校についての知識が無い事は明白。それに加えて、この正面突破を隠密行動、と言ってるのだから当然、彼女達に答えは無い。

会話が途切れ、沈黙が流れる。所謂いわゆるとこの、気まずい雰囲気は辺りに拡がる。その空気を察してか、係りの人が尋ねた理由を話し出す。

「校則で遅刻の生徒は、係りの人が教室まで連れて行く決まりなのは……知らんようじゃな」

それを聞いて少女は、安堵あんどの溜め息を漏らす。どうやら、この少女達が係りの人の目には、この学校の生徒の一人として見えているらしい。それが有らぬ誤解とは知らず、係りの人はとりあえず校舎の中へと二人を招いた。

南海高校 とある教室

本来ならば、この時間は数字を用いた論理的思考を養う時間であつて、決して私的な理由で討論をし合う時間では無かつた。況ましてや、それを抑止力である教師が促進そくしんさせるなんて言語道断の極み。仮にそれが認められるとしたら、それはもう学級崩壊レベルの事態だろう。

しかし、現に私的理由による討論会が成立し、学級崩壊をしていない矛盾が存在する。

さて、どちらが間違っている、間違っていない、なんていう詰まらない話は後回しにして、そこが今どんな状況なのか見てみるとしよう。

「……であるからして、木花このはな 開耶やへくんの身柄はこちらで一時、預からせて頂きます」

メガネの似合う女生徒が淡々と理屈を述べた。

「ちよつと待ったー！ そんな意見、納得いくかー！」

勢いよく立ち上がる反対勢力。威勢が良いものの、反論としては説得力に欠ける。

「そうだ、そうだ！ 偉そうな理屈なんていくら並べても、こつちには全く通じてないからなー！」

いや、彼等に反論なんて立派なものを求めるのが間違いだった。

「何だと！？ かなり噛み砕いて話してやったつもりなのに……」。

これは作戦を練り直さないと……。奴等の馬鹿さ加減は計り知れないぞ！

メガネの子側のある男子生徒が悔しそうに叫んだ。相手側も、

馬鹿と言われた程度では傷付かない、強靱な精神の持ち主達らしい。

「おー、やれーやれー、盛り上がれー」

この光景を、巻き込まれないように少し遠くから椅子に跨またがって傍

観するのは、元凶もとい教師らしき人物。いや、言動だけでは既に

彼の人物像は、悪ふざけの過ぎた男としか認識できない。

「先生、煽あおらないでください！ 収拾、つかないじゃないですか！」

その教師と同じ立場に居る、クラス代表の女生徒。彼女だけがこ

の大乱闘の中、正しきが何であるのか、はつきりと分かっている人間だろう。

「あー、うー、えー、どうすれば……？」

また一人、その場の空気に流されそうになっている女生徒が。彼女もまた、この討論が始まってから中立地帯に存在していた。しかし前者の女生徒と違い、後者の女生徒はどちら側に付くべきか分からずに中立地帯に居た。

「あー、玉ちゃんはそので待ってて！ 私が何とかするから」

流されそうな女生徒を、クラス代表が制した。彼女にとって、今日は散々な一日に成る事は途中から見ても容易に想像できた。

それで本題に戻ると、これは見事に混乱、と言うよりは混沌と言すべき状況になっていた。そして議題に戻ろう。この矛盾のどちらが間違っているのか。

既に学級崩壊をしているのか？ もしそうであるなら、この討論会は私的な理由で行われている事が成立する。そしてそれが成立すると同時に、この場に居る全ての人間が問答無用で罰せられるだろう。

それとも、この討論が授業の一環で、決して私的な理由で争っている訳ではないのか？ 仮にそういう目論みもくろもの下で行われているのだとしても、現状を見た教師達は満場一致で異を唱えるだろう。

この矛盾の結論は とりあえず、保留とする。その理由付けをするとすれば、予期せぬ来訪者、と提言ていげんしておこう。

そして、事態は更に悪化する。

南海高校北館三階の一番奥が、木花 開耶他三名の所属するクラス的位置である。それが先程までの物語の舞台である。

そして、物語の舞台はその階の廊下へと移る……

「この先が、お求めの教室で御座います、ご主人様」

「爺じいよ、大義であつた。もう己おのが仕事に戻ってよいぞ」

爺と呼ばれた男は少女の言葉に従い、自らの持ち場へと去って行った。そう、言葉を交わしたのは先の不法侵入者と門に居た係りの人だった。

いつの間にこのような関係を築いたのか？ いや、出会ってからまだ三十分と経っていないのにそれは不可能だ。ならば、どうやって？ その答えは雲を掴むようなモノだが、鍵を握っているのがこの少女達、という事だけは確かだった。

「潜入、隠蔽いんぺいと順調な進行じゃな」

再び前を歩く少女が、後ろに付き添う女性に投げ掛ける。

「はい。私も貴女様あなたの手際てぎわの良さに深い感銘を受けました」

すると、女性は皮肉っぽく棒読みの言葉を返した。

「そうであろう？ 彼の有名な軍師も、私の大胆不敵か且つ手練手管てれんてくだに尽きるこの策は思い付かなかったであろう」

そんな女性の皮肉をまるで理解していない少女は無垢な笑みを浮

かべ、上機嫌で語っている。そして、まるで隠密行動と言ったのを忘れたかのように、堂々と廊下の真ん中を歩いて行った。勿論、その後ろで頭を抱えている女性には気にも留めなかった。

それから十数秒後、目的地前に到着。しかし目的地と思しき部屋からは、叫び声や、授業とは思えない物音が外まで聞こえてくる。

果たして、ここが目的地に相違ないだろうか、と後方の女性が少々の不安を抱く中、何の迷いも躊躇いも無く少女は扉に手を掛ける。しかし、扉が開かれる事は無かった。

「お待ちください。中の様子が異常です」

それまで、少女の行為を後方で全て黙認していた女性も今回は只ならぬ気配を感じたのか、流石に止めに入った。

「多少の危険や障害は付き物じやろう。この程度の事で臆してはこの先、やっていけないぞ？ それに案ずる事はない。この先に居るのは全て人の子じゃ」

「それは、そうですが……」

危機感の無い少女が、自分の事を何様だと思っているのかは分からない。しかしながら、少女の言っている事が、全て間違っている訳でもなかった。だから女性も下手に言い返せなかった。けれど、心配性の女性が言うように教室の中が異常な状態なのは少女以外の誰もが気づく状況という事も、また事実だった。

「さあ、行くぞ。私の後に付いてくるがよい」

「……は、はい」

もう誰にも少女を止める事は出来なかった。そして、女性の感じていた嫌な予感は的中するのだった。

一方その頃、教室の中では……

「お前等の提案は一つたりとも認めんし、こちらは妥協する気も無い！！」

と、外見的に馬鹿そうな男子生徒が叫んだ。

「そちらの要求を訊きましょう」

その意見に対して、向かいに座っていた女子生徒が、極めて冷静に提案する。

「いや、議題から話が逸れてます。議題に関係の無い話はご遠慮ください」

クラス代表が注意を促すが……。

「俺達の要求だと？ そんなものは決まっている。こちらが最優先・無制限に、木花 開耶への尋問及びその他諸々もろもろを行えるという権利、それだけだ」

馬鹿の集まりの中で唯一、話が分かりそうなメガネ男子だったが、どうやら見込み違いだった。しかし、話は議題へと戻りつつあった。「何だと！？ そんな人権も血も涙も無い様な非道行為を黙認しろ、だと……？ そんな事が許されるのか？ いいや、決して許されない！ 僕達の目が黒い内は君達に好き勝手はさせない！」

そして話は、再び逸れていく。しかし会場はどんどん炎上ヒートアップしていく。

「だから、議題に直接関係無い話は控えて下さい！」

そして絶対的存在である審判の声も届かず、戦況は堂々巡りへと陥おちいる。

そういえば、まだこの討論の議題について触れていなかった。両者が対立し、争い合う根源たる理由、それが議題。そして今回の議題は知っての通り、木花 開耶をどちらが先に拘束するに値する価値のある行為か、争っている。しかし客観的な立場から見れば、どちらも同等ぐらい如何でもいい内容だ。と言うよりは、どうして争い合う事で結論を出そうとするのか。そちら方が余程、興味深い内容だ。

さて、第三者の意見はこの辺にしておこう。そろそろ、彼女達の登場だ。

「非道行為？ じゃあ、お前達のやろうとしている事は人道的なのかよ？」

狡賢すねかじりそんな男子生徒が、笑みを浮かべながら言い返す。

「くつ、確かに。拘束権を求めて争っている時点で人道に外れている。だが、それならば人道とは何か定義してもらいたい！」

サク敵対グループが沈黙。サクの嫁を見たいグループの予想外な切り返しにグループ内が荒れる。

「おい、定義ってなんだ？」

「いや、定義は分かるだろ。むしろ、人道ってなんだよ？」

「ちよつと、待てよ。分かっている奴等だけで話を進めんじゃねえ」

「お前に説明してたら、日が暮れるだろ」

「そんなこと言ってる暇があるなら、頭を使え。どう考えてもこの勝負、こちらが圧倒的に不利だ」

「どうして？」

「メンバーが馬鹿ばかりだから、だろう？」

「半分正解。正しくは使えない馬鹿ばかりだから、だ」

「どういう意味だ、ゴラア！！」

「そのままの意味だよ！ それよりも、怒ってる暇があるなら辞書でも引け！」

「辞書ってどうやって使うんだよ！？」

「もういい。お前は前線に立って、大声で相手を威嚇いかくしてる」

これが、サク敵対グループ内の現状。どうやら、仲間割れは何とか回避した模様。しかし、次の反論について中々、良いものが出来上がらないらしく、頭の良い連中はその頭脳を総動員して奮闘中。

「あれ？ 私達もしかしてこの勝負、勝てそう……？」

「勝てそうじゃなくて、このまま行けば勝てるよ！」

サクの嫁を見たいグループが、やっと見えた勝利に喜びの声を上げようとした。

その時、教室の扉が開く。

そして入口には、そんな状況など全く意に介さず、我が道を突き進む者が居た。その者は堂々とした振る舞いで教室の中に入ってきて、中心まで来ると歩みを止めた。

「我が名は日高ひだか 二二ギ……転校生じゃ！」

「同じく、転校生の天野 あまの ウズメで御座います。二二ギ様、コホン。二二ギ共々、以後お見知りおきを」
そう、それは南海高校の制服に身を包んだ瓊瓊杵 にじじき と鈿女 にぎは で間違いなかった。

二人が教室に来るまでにあつた会話

「それでは鈿女、予定通り私達は転校生を装って侵入するぞ、よいか？」

事後承諾をウズメに告げて、どんどん先に行く二二ギ。

「お待ちください、瓊瓊杵様！」

そんな彼女を慌てて引き止めるウズメ。そしてそんなウズメに「まだ、何か？」と言いたそうな目つきの二二ギ。それに恐れを感じつつも、冷静に対応する。

「確かに、私達はこの学校の制服を着ています。外見で見破られる可能性は、恐らくないでしょう。ですが、中身で見破られる可能性は充分にあります。お分かりですか、瓊瓊杵様？」

極めて正論な指摘を受けた二二ギは、ウズメを馬鹿にするかのように何度も頷きながら向き直る。

「そうじゃの。それは御尤もな意見じゃ。正体を簡単に見破られては、これまでの努力が水の泡じゃからのお」

この如何にも何か企んでいる口上の二二ギ。しかし、ウズメは彼女の含みのある口調には全く気づきもなかった。それよりも二二ギに今回の提案が通った事の方で頭が一杯だったらしい。どうやらこの策にウズメは異常な勢いで反対の様だ。

「瓊瓊杵様、お考え直して頂けるので……」

「ではまず、鈿女の私に対する敬語を止めさせるとするかの」

「はい？」

思いも寄らない返答に、間の抜けた声が漏れる。しかし二二ギは、そんなウズメに構わず次々と言葉を並べていった。

「次に、私達にも現代風の名を設けよう。私は先程、拝借した書の

中から名に合うものを選んだ。細女には……確か、丁度いいのが……あつたんだが。ああ、あつた。

コホン、そなたの学舎内の名は天野あまの ウズメじゃ。よいな？

それから、私とそなたの関係も改めるべきじゃな。そうじゃのお……トモダチ、という上下の繋がりでではなく、横の繋がりに変更じやな。あとは……」

「瓊瓊杵様、僭越せんえつながら暫ししばお待ちください。私の許容わたくしを越える事態ゆえ、混乱こんらんして居おります」

率直かつ且つ冷静に答えたウズメだが、その混乱の程は尋常ではなかった。

それもその筈だった。なぜならば、ウズメは作戦の中止を前提で話しているのに対して、二ニギは飽くまで作戦を続行する前提で話を進めている。これでは話が噛み合う筈がない。むしろ、今の今まで気づかなかつた事の方がおかしかった。

「瓊瓊杵様。……申し訳御座いませんが、今一度、仰って頂きたい所存であります」

「仕方がないの。面倒……いや、時間もあまりないから、簡潔に要点だけ話すぞ？

まずは、そなたの私に対する敬語を一切禁ず。

次に、学舎内でのそなたの名前は天野 ウズメじゃ。

最後に、私達の主従関係じゃが一時的に無効に致す。以上。

異論は無いな？ さあ、行くぞ」

それまで黙って頷いていたウズメが最後の規則ルールを聞いた途端、血相を変えた。

「お待ちください、瓊瓊杵様！ 主従関係の無効とは、一体どういった……」

「ウズメ、異論は無いな？」

二ニギは静かに言い放った。その表情は頑かたくなで、妥協の色は一切無く、こちらの言い分を何も受けつけない事が、長い付き合いのウズメには難なく理解できた。

当然、それ以上の会話は無かった。そしてこれが彼女達なりに考えた転校生の設定だった。

そして現在……。

二二ギとウズメが教室に入った当初、生徒達は二つの理由で目を奪われた。

まず一つ目は、彼女達の不可解な行動だ。

突然、入って来て「転校生だ」と自らを語ったところで、誰が快く承諾できるだろうか。いや、むしろ生徒達は自分達が全力で挑んでいる論争を一体どのような理由で中断させるのか、憤りと訝^{いぶか}しむ眼差しで黙然^{もくぜん}していた。だから彼女のした返事は、この場に居る生徒達の目を奪うには充分過ぎたのだ。

そして二つ目。それは彼女達の外見上の問題だった。

彼女達の容姿が、他と比べて端麗過ぎるのは言うまでも無い。だが、ひとえにそれだけが理由だった訳ではない。いや、むしろこの点に限るといっても過言ではない。

確かに、彼女達は正体を見破られないようにする為、この学校の制服に身を包んでいる。しかし、それは飽くまで言葉通りの意味だ。これから彼女達の外見を見たままに述べる。それが真実であり、事実なのだ。

下半身の方から順を追って解説を、まずは履物。どこで入手したのかはさて置き、履物には彼女達とは確実に無関係な人物の名が書かれていた。きっと、制服や名簿と同様に無断拝借なのだろう。

次に、靴下……は至って普通なのでスカートへ。これも無断拝借した制服をそのまま着ているだけなので、特に問題は無い。むしろ、これ以外は主に問題ばかりだ。

最後に一番の問題、それは上半身に在った。夏服ブラウスのボタンを全開、その裾が広がらないようにお腹の辺りを帯で留めている光景は、誰がどう見ても異常でしかなかった。

そしてこれもまた、生徒達の目を引き付ける理由としては過大評

価ではなかった。

これまでの解説を総合すると、男子生徒の大半は彼女達の美貌に見惚れ、衣服には全くと言っていい程、興味を示していない。それに対して、大半の女子生徒は彼女達の美貌よりも、制服の着こなし方に釘付け状態だった。そして残る一部の生徒は、彼女達の意外な発言に驚き、茫然となってしまうている。

しかし、このどれにも当てはまらない人物が一人、この教室に居た。

その人物はこの混乱の中でも決して冷静さを欠かず、常に公平な立場から意見を述べ、己が信じる事を貫いていた。それは、このクラスが学級崩壊するのを繋ぎ止めていた、と言っても納得できる頑張りだった。

そして、今、その人物が彼女達と対面し、何を感じ、どう動くのかを見届けている。

「えーっと、確か……日高さんと天野さんだったっけ？ ようこそ、このクラスへ」

そう言つて、その人物は挨拶のつもりで手を差し出した。その距離、僅か数メートル。教室の中央まで来た転校生達は、その人物とはかなり間近な位置関係にあった。

「……誰じゃ、お主は？」

第一声がそうだったように、この転校生の発言には驚かされる事が多い。彼女が平然と発言する一方で、聞き手の生徒達は度肝を抜かれる思いばかりしている。

しかし彼女の発言を咎める声は、意外にも近くから聞こえた。

「瓊瓊杵様！ そのような物言いは……」

意外にもその声の主は、同じ転校生の天野のものだった。

その時、生徒達の頭に常識が過ぎる。彼女達は転校生だ。知り合いの訳が無い。偶然、転校してくる場所と日が同じだったただけだろう。

しかし、現実はその常識的根底を覆すやり取りを、止めなかった。

そしてその光景を目の当たりにした生徒達は啞然となった。

「ウズメさん、お言葉が可笑しくなっておいでですわよ。おほほほ」
しかし会話は続く。天野の注意を軽く笑って受け流す日高、しかしその目は笑っていない。位置関係上、彼女の表情まで見れたのは天野とその人物だけだった。

「うつ……申し訳御座いませんでした」

その威圧感と畏敬のある視線に気圧されたのか、天野はすぐさま謝罪した。

当然の如く、教室は静まり返った。意外に次ぐ意外の連発で、一部の生徒は神経が衰弱し、他の生徒達も状況が飲み込めず立ち尽くした。

そんな中でも、やはりその人物だけは違って見えた。その迷いの無い瞳には、二人の只ならぬ関係は容易に見透かせただろう。

「あのー、ちよつといいですか？」

険悪なムードの中、先陣を切ったのは当然、その人物だった。皆の視線が一点に集まった。

「私はクラス委員長の夏澄です。みんなからは、クツシーって呼ばれてます」

そう、先程から登場していたその人物とは、このクラスの要の一人・櫛灘 夏澄ことクツシーの事だ。そしてクツシーは続けた。

「……今日から、このクラスの一員になるんだよね？ じゃあ、よろしくね、二人とも」

クツシーの思いも寄らない発言に、今度は転校生が茫然となる番だった。それはクツシーが彼女達の間係を問い質すのではなく、無条件で二人を仲間として迎え入れるという行動に出たからだ。

尤も、日高の方はそんな心配など一切抱かず、反応はとても落ち着いており、無言の不動だった。つまるところ、教室は数刻前と変わらぬ騒然な状況へと陥った。

「二人を、クツシーが認めた？」

「って事は、二人はもうクラスの一員ってこと？」

「いやいや、流石にクッシーの一存だけじゃ……なあ？」

「要の四人の内、二人が欠けた状態で決めるのは、些^{いさや}か腑に落ちない」

「でも、どっちもカワイイし、よくない？」

「そういう問題じゃねーだろ」

「いや、それこそ重要視する点じゃないか？」

「モチベーションとか、雰囲気とか、男子のやる気とか、重視するなら、尚の事な」

「女子的には、あの二人をどう思うんだ？」

「まあ、端的に言えば強敵出現、みたいな感じ……かな？」

「あれに勝とうと思うこと自体、既に無駄。生まれた時点でのクオリティーに差があり過ぎ」

などと途方も無い雑談が、至る所で繰り広げられている。

そもそもの事の起こりはクッシーに在る。それはクッシー自身も、重々承知の上だろう。だから、この事態を收拾するのもクッシーは自分の役目だと感じている。

クッシーが即決即断で、混乱を鎮めようと口を開いた時、天野の呟きに教室が一瞬で静まる。

「くらす、いいんちよー……ですか？」

「え？」

呆氣にとられるクッシーと生徒達。まさか、クラス委員長という言葉について訊き返されるとは誰もが想定していなかった。否、想定できる筈もなかった。なぜなら、普通に生活していれば、その言葉の意味など考える必要も無く分かる事だからだ。

「えっと、天野さんの前居た学校だと呼び方が違ったのかな……？」
クッシーにできる最大限のフォロー。しかし……

「えっ？ あ、その……」

返ってきたのは言い淀み、困惑する結果だった。

（何か訳ありっぽい事、訊いちゃったかも……？）

クッシーは「クラス委員長」について訊かれた時、嫌な予感がし

た。それがこの想定外の返答についてだったのかは分からないけれど、もうクッシーにフロアのしようがない事だけは確かだった。

天野の解答に注目が集まる中、今まで悠然としていた転校生が動いた。

「あら、ウズメさん。私達の所では違いましたよね？」

思わぬ方向からのフロアに、天野自身が一番驚いていた。

「??? ニニギさん……ニニギ、どういう意味でしょうか？」

しかし、困惑の方が勝ったのか、日高が言った内容を全く理解出来なかったらしい。そのまま、はい、と頷いていれば事は丸く収まったのだが……。

「だから、私達の居た所ではそのような呼び方はしていませんでしたよね、ウズメさん？」

語尾に行けば行くほど、凄味が増していったのは言うまでもない。ここでもやはり日高は、周りから表情を見れないと判断し、威圧感たっぷりの眼差しを天野に向けた。そんな天野に選択の余地などなかった。

「……は、はい、そうでした。瓊瓊杵様の仰る通りで御座います」

「あら、ウズメさんたら、また言葉が可笑しくなっておいでですよ？ おほほほ」

日高の高笑いだけが、教室の中を木霊する。こだまそしてその高笑いも程無くして終わり、重い沈黙が教室に流れる。

パンパンっ！！

手を叩く音が室内に響いた。皆の視線が音源に集まる。その視線の先に居たのは……。

「おしまい、おしまい。転校生なんだから、この学校について知らなくてもしょうがないじゃん？ だから、これから知っていけばいいんだよ。私達の事も、二人の事も、ね？」

と、場を仕切ったのは当然クッシーだった。彼女にかかれはこの程度、日常茶飯事なので何も迷う必要もない説得だった。

「さあ、さあ。そうと決まったら、早速、歓迎会やろうよ！ どう

せ、四時限目も潰すつもりでしょ？」

「あつたりまえじゃんっ！」

「歓迎会、賛成ーっ！」

その声に應えるかのように、皆が声や手を上げる。その中には、もう彼女達をクラスなかまの一員と認めていない者など一人たりとも居なかった。

「よし、司会・運営系はこっち集まってー！ 体育会系の筋肉さん達は会場設営してー！」

着々と支度は進み、簡易ながらも会場は数分で完成した。

「おい、こっちはもう出来上がったぜー！」

中央に二つの席が設けられ、それを囲むように倍以上の椅子が並んでいる。元々、論争をしていたこの教室に整理整頓された机や椅子などは一切存在していなかったせいもあり、早々に会場は出来あがった。

「はいはい、こっちももう出来たわよー」

それから間も無く、司会・運営側の準備も整い、歓迎会の開始は目前となった。

「並大抵の団結力と、意志の疎通と、行動力では……ありませんね」
その光景を、目の前で見ていた天野の第一声は冷静な評価だった。その評価が、彼女の中の何を対照とした評価なのかは定かではないが、とりあえず断言しよう。

彼女を侮ってはいけない。

それと言つのも……。

「止さぬか、ウズメ。もっと無邪気な風に装えぬのか？」

……邪魔が入ったが、こちらの説明を先にしよう。天野を諭したのは同じく転校生の日高だった。そんな彼女が今まで何をしてたのかと言うと、視線が合った男子生徒に笑顔を振り撒いていたのだが、その度に作業効率が落ちていたのは言うまでもない。

そして諭された天野の方だが、指摘を受ける以前は氷の様に鋭くした視線で辺りを見回し、寄り付く男子のハートを射抜きまくって

いた。当然、こちらでも作業効率低下に繋がった。

「すみませんでした。どうもその様な事に私は疎いようわたくしうとで……」

「よい、気にするな。お主に厳しい環境なのは承知している。ただ、見破られれば全て水の泡じゃからな？　それだけはお主の誇りにかけて、如何にか致してみよ。よいな？」

「分かりました、瓊瓊杵様」

「何の相談？」

そんな二人の前に現れたのは、今現在このクラスの中で誰よりも二人と親しい関係にあると自負しているクッシーと、連れの玉ちゃんこと豊玉 美七だった。

「あつ、そうだった。紹介するね、私の親友の玉ちゃんです！　仲良くしてね」

紹介された玉ちゃんはぺこりと頭を下げた。しかし、まだ人見知りしているのか一定の距離以上は近づかない様子だった。

「そうでしたか。くっしー様のご友人の玉ちゃん様ですか。どうぞお見知りおきを」

「は、はい。こ、こちらこそよろしくお願いします」

ぎこちない会話を交わし、これを自己紹介とした。そして、それから会話を交わす事は出来なかった。それは突然の来訪者が、二人を連れて行ったからだだった。

「あつ、ちよつと!？」

「ぬ？」

「さあ、さあ。二人ともこつち、こつち！　クッシー、主役を独り占めしないでね」　さあ、始めるよ！」

つまるところ、突然の来訪者は歓迎会の司会役だった。それから、クッシーと玉ちゃんは顔を見合わせそれぞれ、苦笑してから席へと向かった。

歓迎会　開始から十分の経過

日高と天野とクッシーと玉ちゃんは廊下に居た。それは到底、誰

かを歓迎している雰囲気ではなかった。それはクツシーの強張った表情が物語っていた。果たして、楽しい筈の歓迎会は何故こんな事になってしまったのだろうか……？

さかのぼ
遡る事、十分前

まずは二人の簡単な紹介が司会からされた。その内容はどう考えても、真実とは言い難い物ばかりだった。しかし、一項目読み上げる度に男子から歓声が上がった。結局、クツシーが出て抑える始末となった。

その後、クツシーと玉ちゃんを除いた、みんなの三十秒間の自己紹介。これもまた、順番の取り合いでケンカとなり、クツシー出動程無くして、鎮静。仕切り直して、出席番号順に自己紹介を再開。何とか無事に終わったので、司会が次の項目へと移行した。

ここまですが開始から八分間の出来事。それでは、残りの二分間で何が遭ったのか見て行こう。

歓迎会・最後の項目、それは座談会という名のお喋り会だった。当然、そうとなれば転校生への質問攻めとなるのが予期されたが、予想はいとも容易く裏切られた。

皆はそれぞれ仲が良い友達の元へ行き、お喋りを始めた。それはまるで転校生など見えていないかのような自然さで、見えている者には不自然、極まりない光景だった。

余談だが見えている者とは、クツシーと玉ちゃんの事だ。

「あれ？ 何、このリアクション……？」

「え、あの、どういう事ですか……？ 皆さん、おかしくないですか……？」

状況を全く飲み込めない二人。困惑を露わにする一方、そんな彼女達にすら気づかない周りの人間達。まるで彼等の居る世界に、二人は存在していないかの様だった……。

しかし、クツシーはこの事態を信じなかった。それはつまるところ、非現実を頑として受け入れない、という意味で、だ。突然、みんなの視界から自分が消える、それはどう考えても非現実的である。

それともう一つ、彼女には気になる事が在った。

「玉ちゃん、来て！ こっち！」

「えっ？ あ、はい」

事態の真相を知るべく、クッシーと（半ば強引に連れて来られた）玉ちゃんは転校生達を探した。その行為に明確な理由は在った。だが、そんな事よりも彼女の身体を動かしたのは、不謹慎ながらも好奇心と探求心だった。

さほど広くもない教室の中から、二人の異装転校生を見つけるのは、とても簡単な事だと思っていた。いや、正確にはその認識事態は間違っていないだろう。むしろ、間違っているのは前提条件だろう。果たして、彼女達が探している転校生達は、本当に見た目だけが異常な転校生なのだろうか？

（彼女達は一体……何者？）

彼女達の正体について、クッシーが疑問を抱き始めたその時、背後から聞き覚えのある声がする。

「まあ、余興はこの辺りでよいわ」

クッシーが振り返ると、転校生達は二メートル後方に平然と居た。その姿は最後に見た時と寸分違わなかったが、雰囲気、纏っている気質という類のものが確実に違った。それはクッシーも、玉ちゃんにも分かる変化だった。

「日高ちゃん……？ 天野さん……？」

「玉ちゃん、下がってて」

転校生達の纏う異様な雰囲気に、クッシーが玉ちゃんを制し、前へと出た。

「二人とも、今まで何処へ？」

「ふ、お主に答える道理はないのお。……じゃが、こうして現れたのには、くらすいいんちよーとやら、お主に訊きたい事があるからじゃ」

「私に、ですか……？」

両者の間に緊張が流れた。と、その時、教室に舞い込んだ風が女

子のスカートを靡^{なび}かせた。

「きゃっ!?!」

「なにっ!?!」

「ひゃあっ!?!」

皆、一様に奇声を発する中、スカートが舞い上がろうが、どうなるうが特に気にも留めない女子が若干二名ほど存在した。

「む? 何をそんなに恥じる? のう、ウズメ?」

「はい、そうで……」

と、言いかけた天野にも風の悪戯が及んだ。しかし天野は、舞い上がったスカートを押さえる素振りすら見せずに、ただ日高の隣に立っているだけだった。

次の瞬間、クッシーと玉ちゃんの視界に衝撃的なものが映った。それから数秒の間があり、二人は同時に顔を見合わせ、頬を赤らめた。

「……玉ちゃん、見えたよね?」

「……は、はい。で、でも、どうしよう?」

「うっ、そうだね。このままって訳には……」

と、二人の視線が自然と天野へと向く。その先には、なぜ自分を見ているのか分からないという風な天野と、我関せずといった感じの日高が居た。そして試行錯誤した結果、クッシーは無言で天野へと歩み寄った。

「……あの、くっしー様?」

「天野さん。ちょっと、来て」

用件を短く告げ、答えも聞かずにクッシーは天野の手を取り、出口へと向かった。

「あの、これはどういう事でしょうか? くっしー様?」

天野の問いかけを完全に無視して、クッシーはどんどん出口へと向かった。天野は咄嗟に日高の方を一瞥すると、日高は面倒臭そうに頷いた。それを視認した天野は、クッシーの行為を了承したのか、それから何も問いかけなかった。

「ひ、日高さんも……い、行きますか？」

一人とり残された日高を気遣って、意外にも玉ちゃんが声をかけた。内気な彼女の行動としては少々腑に落ちないが、よくよく考えてみれば、その答えは容易に想像がついた。

補足させてもらうと、今現在、彼女達四人の存在は四人意外には認識されていない。それがどういう原理なのか、どうしてそんな事になってしまったのか、などの諸事情は全て後回しにして、玉ちゃんの不可解な行動の根底に何が在ったのか解説したいと思う。

つまるところ、彼女は単に寂しくて心細かったが故に、日高という身近に自分の存在を認識できる相手へと依存しただけなのだ。クッシーが傍に居た時は、クッシーに。彼女が居なくなれば他の誰かに、というように、自分の存在を誰かに認めもらう事で、彼女は精神が安定するタイプの人間なのだ。そして今、より安定性を高める為にクッシーの後を追おうとしている訳だ。だが、やはり一人では決断できず、日高に付いて来てもらおうという魂胆らしい。

けれども、何よりも厄介なのはその習性ではなく、それを無意識下で行っているという彼女自身の自己防衛能力にあった。

「……よからう、私を二人の所へ連れて行くがよい」

日高はその事を知ってか知らずか、少しの間を置いてから承諾した。当の本人は安堵の溜め息を吐き、出口へと先行した。

斯くして、物語の舞台は廊下へと移り変わるのだった。

そして現在……。

このような過程を経て、現在に至る訳だが……。果たして、クッシーと玉ちゃんが目撃したものと、天野の関係性は何なのだろうか。それがこれから解き明かされようとしていた。

「天野さん、女子同士だから単刀直入に言わせてもらうけど……し、下着はどうしたの？」

「??? 何なのですか、それは？」

静寂が訪れた。原因は言うまでもない。クッシーは顔を伏せ、玉

ちゃんは茫然と天野を見ていた。しかし、日高は特に驚いた風もフオローする様子もなかった。

だが、この沈黙を破ったのは日高による天野の素性についての暴露^{カミン}だった。
グアフト

「くくくつ、これは仕方ない。この衣装もウズメの着付けじゃし、そもそもウズメは洋服という物を知らぬからのお」

「ええっ!? 天野さんって洋服、知らないの!？」

「……、……。……?」

クッシーは事の真相に驚きを露わにし、玉ちゃんは日高の言った言葉の意味がまるで理解出来なかったようだった。そして暴露された本人は……。

「よー、ふく? 何のですか、それは?」

下着について指摘された時と全く同じ反応だった。こればかりはもうクッシーさえも言葉を失った。無論、日高が天野に洋服とは何かなど教える筈もなく、天野は首を傾げたまま、視線を彷徨^{さまよ}わせている。どうやら、天野は答えを求めているらしい。

その数秒後、今まで様々な考えを巡らせ、黙っていたクッシーが声を上げた。

「あゝ、もうっ! 何でもいいから、とりあえず下着! それだけは何とかしないと校則的にも、道徳的にもダメなんだからね! 天野さん、分かった!？」

「は、はい、くっしー様……」

「くくくつ。小娘に怒られおつて、ウズメもまだまだじゃのお」

これが楽しい筈の歓迎会が一転して、廊下での説教会になってしまった事の顛末^{てんまつ}だった。

そして二人のドキドキ学校潜入編はまだ続くのだった……。

木花開耶物語5話 後編（後書き）

えー、長いお話を最後まで読んで頂きありがとうございます。

これからも長くなっていくと思いますが、何卒よろしくお願いいたします。

あー、それから、活動報告の方で少々触れましたが、瓊瓊杵ニギハヤヒの口調を一新しました。語尾を「〜じゃ」「や〜のう」など古風にしてみました。でも、これは飽くまで口調ですので、しっかりとした場では、しっかりとした現代語の敬語を使います。

それではここまで読んで頂きありがとうございます。毎度のことながら、ご意見・ご感想、超募集中です。次回も出来れば読んで頂きたいです。 b y c r o w

木花開耶物語6話 PROLOGUEのみ(前書き)

タイトル通り、6話のPROLOGUEのみです。

5話の続きは本編で語られます。今回は、たとえば、少々焦点をずらしてみました。

この時間帯、あいつ等は何やってるんだろう？ と思い、書いてみました。

是非読んでみて下さい。

木花開耶物語 6話 PROLOGUEのみ

PROLOGUE

ある男と少女の話……。

物語の舞台は、南海市よりも少し離れた街中。そこは南北に広がる様々な店が揃った大通り。その存在はまるで、某有名遊園地のお土産売り場の様だった。

「マジかよ……」

そして、ある男は現在進行形で困っていた。

『街中・人混み・消失・少女』

この単語から連想される困り事と言えば、まず一つしかないだろう。

つまるところ、男は先程まで自分の隣に居た筈の少女が少し目を離れた隙に、何処かに行ってしまったのだった。その状況を俗に、迷子、と言う。

だが果たして、男の内心はこの事態を迷子という些細な事では括れなかった。

男にとってこの街は遊び慣れた庭も同然だったが、少女にとってこの街は目新しい物ばかりが揃ったテーマパークの様に見えたらしい。しかしながら、男も少女の逸る^は気持ちは分からない訳ではなかった。なぜなら、自分もそのひとりだったからだ。

この街の壮大さに憧れ、何を目指す訳でも、果てがある訳でもないこの街を、日が暮れるまで駆け回ったあの頃。

不意に、あの時の記憶がフラッシュバックする。

暗くなる空、減る街の人間、両親の心配そうな顔、母の安堵の溜め息、父の怒声。

本来ならば、男も少女を自由に観光させてあげたかったのだ。思う存分この街を堪能し、幼き日の自分と同じ気持ちを抱いて欲しか

った。だが、そう出来ない要因が少女には在った。だから、男は居ても立つても居られなかった。

（何か事が起こる前に、アイツを見つけ出さねえと……！）
と、男は人で溢れた街中を当てもなく北へと走り出すのだった。

一方その頃、少女は……。

「わあ、何アレー？ こっちも、オモシロそうー！」

店頭のショーウィンドウを転々と移動しながら、南に向かってどんどん進んでいた。

「アレはー？ ん？ 何だろう、いい二オイがするー」

遠くから香る美味しそうな匂いに釣られて、少女はまた南へと歩みを進める。

だが、少女の様子から察するに悪気が在って男の前から消えたのではないようだ。ただ、理性より好奇心が上回ってしまった為に招いた結果だったらしい。

それでも、この少女に限っては野放しにしてはならないのだった。それ程までにこの少女は、人の考え得る常識から逸脱した存在なのだ。そして、その事実を熟知しているのは現状、男を除いて他に居ない。しかし抑止力である筈の男は今、少女の傍に居ない。

即ち、この街に存在する人の命運はこの少女の気分次第だった。分かり易く例えるのなら、この街に向かって飛ぶミサイルのスイッチを少女が所持している、と言った具合だ。

語弊があつたので訂正をすると、そのミサイルで決して少女は死なない。それどころか、傷一つ負う事も無いだろう。そして、少女の抑止力である男もまた死なないし、傷を負う事も無い。それが少女を「野放しにできない理由」の正体である。だから最悪の場合、この街は少女と男の生存しか許さない。つまり、少女はそれ以外の人間も建物も土地をも破壊する脅威の存在なのだ。

その頃、男は……。

「すんませーん。一人で居て、妙にはしゃいでる女の子見ませんでしたかー？」

街の北端まで辿り着いた男は、少女を見つけられなかった。それから男は少々頭を捻り、道行く人に聞き込みをしながら南に進んでいた。

しかし、思った以上の成果は見られず途方に暮れつつあった。

ふと、時計が目に入る。時刻は午前十一時。少女と別れて二十分が経っていた。

（結構、時間が経ったな……。もう街から出たかもしれんな……。どうすっかな……。？）

すると男は、急に立ち止まり考え込んだ。

（今から南端まで行くのにおよそ十五分。その十五分内に、この街が消滅する可能性……。無いとも言いきれない。そこで以て、その被害を阻止すべく、アイツを探し出さなければならない。が、問題はアイツの居所……。

この状況を打開できるとすれば、それはアイツが俺の気配を探つて戻って来るか、最悪の場合としてアイツが少数を相手に何か問題を起こし、そこを俺が見つけ出すか、この二つに限られる……）

出来れば前者であつて欲しいところだが、その可能性は皆無に等しかった。理性を欠き、男の言い付けを破った少女に、そのような心の余裕がある筈も無い。と、なれば残るは後者になるのだが……。
「まあ、街が吹っ飛ぶよりは……。不用意に声かけた馬鹿が死んだ方がマシか」

それから、十分後。

街の南端に達した少女は、あるショーウィンドウの前に釘付けになっていた。

「わあ、イイなあ。コレ、すごくキレー」

そのショーウィンドウに飾られていたのは、新作のウエディング

ドレスだった。純白で莊嚴そうげんな造りのそのドレスは、結婚を決めた女性だけでなく、年端もいかないこの少女までも虜にした。しかし前提条件として、少女はウエディングドレスをどんな時に着用するのは知らない。

「これ服、だよな……？ 私も着てみたいなあ……」

と、つい本音を零す少女。その後ろに不穏な影が迫る。

トン、トン。

「ん？」

肩を叩かれた少女が、反射的に後ろを向く。すると、そこには見知らぬ青年が4・5名、少女を囲むように居た。

「君、一人？」

ナンパの代名詞にも等しい古風な方法で、少女を囲む青年達のリーダーらしき一人が言う。

「俺達と遊ばない？」

如何にも含みのある誘いをかけるのは、先程喋った男の右側に居たリーダーの側近らしき男。

「……………」

しかし、状況に似合わず少女は冷静だった。無言で青年達を見定めるかのように一通り見渡し、呆れ混じりの溜め息を吐いた。そして何も言わず身体の向きを変え、再びウエディングドレスへと想いを馳せる。

「ちよっ、シカトかよ……」

当然、慌てるのは青年達の番だった。だが青年達も場数だけは踏んでいるらしく、こういった態度の攻略法わきまも弁えていた。

次の瞬間、青年達の一人が少女の手を取り、少女の背中をショーウィンドウに押しつけた。

「俺達と遊ぼうぜ、って言ってる、だ……ろ……？」

仕掛けた男は絶句し、その周りで見ていた仲間達と偶々その光景を見ていた通行人さえもが少女を凝視した。それは偏ひとへに少女の変貌が原因だった。

数秒前に男達を見ていた冷めた表情とは一変し、その表情はまるで熱心に取り組んでいたのを邪魔された子供の様に無邪気な怒りで溢れていた。

そう、青年達に一つ間違いが在ったとすれば、それはこの少女をどこにでも居る少女と勘違いしていた事に尽きるだろう。そして、青年達は知るだろう。この少女に手を出してはいけなかった、と。いや、そもそもこれは本当に人間なのか、と。

だが、その瞬間が訪れる事はなかった。なぜなら少女の視線は既に、緊張で固まった雰囲気の中を近付いて来る、ある男しか捉えていなかった。その男曰く……。

「悪かったな、あんた等。俺のツレが迷惑かけたな」

そう、少女が行動を起こすタッチの差で抑止力の男が到着したのだった。

男は少女の前までくると、少女の頭にポンと手を置き、言う。

「ほら、行くぞ。そろそろ、昼飯の時間だ」

「えー、私、コレ着たい」

その言葉に対して、少女は何事も無かったかのようにショーウィンドウに飾られているドレスを示す。

「お前には……まだ早えよ」

「んー、きつと似合うもん！」

そついう問題じゃねえーよ、と男は言っただけで来た道を引き返す。その後を少女も付いて行こうとし、立ち止まる。当然、少女の意志ではない。すると、男は少女が付いて来ていない事に気づき、やれやれと呟きながら振り返り、少女の元へと歩み寄った。

「あんた、死にたくなかったら放した方が良いぞ」

それは少女に向けられた言葉ではなかった。少女の傍らに居ながら、男に全く相手にされなかった青年達の一人、強引に少女の手を取った男に向けられた言葉だった。そして、男の言葉は嘘でも脅しでもなかった。それを理解してか、しなくてか、その男は少女の手を取ったまま放そうとしなかった。

「死にたいなら止めねえーけど、違っだろ？」

そこまで言っても、まるで微動だにしない男に少女が苛立ちの眼差しを向ける。それを察した、男は両者の間に割って入った。

「おい、ガチで放せ。そろそろ、ふざけるのも大概にしとけよ。こっちはあんた等の遊びに、付き合ってる場合じゃねえーんだよ」

と、男の耳元で囁き、強引に男の手を少女から引き離れた。そして、到着した時と同様に何食わぬ顔でその場をあとにした。

残された青年達と野次馬達も、時の流れに沿ってその場を去って行った。ただ一人、少女に掴みかかった青年を除いて全員が。

ここで一つ、男の勘違いを補足しておく。男は、青年がまだ少女を放そうとしない理由を、少女への執着心だと解釈した。しかし、それは間違った解釈だった。青年は少女を放さなかったのではない。放せなかったのだ。なぜなら少女に触れた瞬間、いや、怒りに満ちた少女の瞳を見てしまった時、青年は青年の意志に関わらず少女の考えを見せられたからだ。

自分が醜く少女の足元で骸になる映像を……。

あれから数分後 街の中央付近にて……。

そこにはあの男と少女が居た。

「ねえねえ、ハル様 私、お昼はオスシが食べたい」

「はあ、そうだな……」

溜め息混じりに返事をした男の脳内では、全く別の事が考えられていた。

（誰かコイツを見張ってくれる奴、探さないとなあ……。落ち落ち学校にも行けやしねえ……）

そう、これが六月九日に神屋 春樹が欠席した本当の理由だった。果たして、神屋 春樹が少女のお守から解放される日はやって来るのだろうか……？

木花開耶物語6話 PROLOGUEのみ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

どうでしたか？ と言われても、って感じですね。

最近、忙しくて中々執筆作業に割く時間が無い……（言い訳）。

本編、出来るのは……とりあえず、溜まってる事が全部片付いたら……だから。

11月中旬には、執筆再開可能かも（？）しれないから……、6話が完成するのはおおよそ12月頃ですかね？

1話から読んでくれている方、その他の愛読者の方々、未永くお待ちください。すみません。

木花開耶物語 6話 A（前書き）

タイトルにAって書きましたが、Dまで続くのか、Eまでいくのか
現状未定です。把握できてなくてすみません。
気長に読んで下さい、としか言えないですね……。

木花開耶物語 6話 A

「迫りくる新しい日常」

これまでのあらずじ

瓊瓊杵ににぎはりと鈿女めづひは突然、体調を崩した開耶やへの病状を和らげるため、とりあえず情報収集へと出かける。二人がその適地と選んだのが、開耶の通う南海高校だった。二人は転校生として学校に侵入したところ、侵入先である開耶のクラスは授業を放棄し、怒涛の討論会を繰り広げていた。そうとも知らず二人は堂々と正面から入り、皆の注目を浴びるが、その容姿の端麗さから口調や二人の関係については特に問われる事も無く、クラスへと順調に解け込んでいった。

そして、学校生活を充分に楽しんだ二人は本来の目的を忘れかけていた。だが、瓊瓊杵は帰る寸前の所で本来の目的を思い出す。そして手短に居た櫛灘くしなだ 夏澄かすみ ことクツシーと、豊玉とよたま 美七みな こと玉ちゃんの二人を呼び止めた。しかし情報を得ようとしたその時、悪戯の如く吹いた風が鈿女のスカートを舞い上げた。鈿女自身にダメージはなかったものの、見ていた二人に異常なショックを与えた。そう、鈿女のファッションは現代人の思想から大分外れていた。そんな鈿女を見過ごす訳にもいかず、クツシーと玉ちゃんは二人をある場所へと誘導する。

二XX六年六月九日 昼前

時刻的には授業中というこの時間帯だが、廊下に複数の人影。しかも、教師ではなく生徒が四名、列になって廊下の真ん中を堂々と移動中。

「あのさ、それって最近流行りのファッションです、とかつてオチじゃないよね？」

列の先頭に行くクツシーが、その後ろを歩くウズメへと尋ねた。
「はやり、ですか？」

ウズメの要領を得ない解答が返ってくる。だが、クッシーは至って冷静に返事をする。

「そう。流行り」

クッシーとしては、冗談のつもりで切り出した質問だったので、ウズメの返事は当然「NO」だと踏んでいた。しかし、待ち望んだ答えは一向に返ってこなかった。

「え、あの、ですね……」

返答に詰まるウズメは助けを求めるべく、隣を歩く二二ギに視線を送った。

「そんな道理がある訳なからう。世の女子達おなこが揃いも揃って何も穿いて居おらなかったら、世の男共が黙って居る訳なからう？」

列の一番後ろを歩く玉ちゃんがそれを聞き、顔を真っ赤にして同意する。

「二、二二ギさんの言う通りですよ、か、夏澄ちゃん」

「う、うん、そうだね……」

違和感。

クッシーは二人に只ならぬ「何か」を感じていた。しかしそれが何なのか、言葉で表現するまでには至れなかった。それは正に「何か」という表現が適切だったからだ。

「……………」

両者の間に沈黙が流れた。恐らく、二二ギ達がそれを破るような真似はしない。そして、クッシー達にもそれは見受けられなかった。なぜなら、互いが互いに対して無意識の内に一線を置いたからだ。

（この人達、私達とは「何か」が決定的に違う……）

クッシーは思う、彼女達は自分とは違う、と。しかし、その証拠足る物は何一つとして無い。ただ、クッシーがそう感じた、というだけだった。

（さっきから夏澄ちゃんの様子がおかしい……？ 転校生さん達も黙っちゃったし……どうしよう……？）

飽くまで玉ちゃんは、転校生達に疑惑や違和感は無いようだった。

むしろ、彼女の的にはこの暗い雰囲気の方が問題だった。それから玉ちゃんは、何か話そうと悩み、いつの間にか列から遅れていった。

（この女子共、こちらを警戒しておるな……）

クッシー達の動向から、そう感じ取った二二ギは自分達も警戒する様、ウズメに目配せをした。すると、視線を感じたウズメは前後の二人にバレないように二二ギを一瞥し、小さく頷いて見せた。

（……と、同意したものの如何したものか……）

そう、警戒云々と言われても具体的に今、自分に何が出来るのか、ウズメは悩んだ。それもその筈、彼女達は今、自分達が何処に向かっているのかさえ知らない。もしかしたら現在歩いているこの道が突然、崩落するかもしれないし、辿り着いた先が敵の巢窟かもしれない。そんな得体の知れない畏から主を守る為に、自分は何をすればいいのか。否、何が出来て、何が出来ないのかを、彼女自身が把握しなければならなかった。

各々が様々な考えを浮かべ、緊迫ムード全開の中、意外にもクッシーが声を上げた。

「あつ、見えてきた」

その声に反応し、顔を上げた三人の目に映ったのは一枚の引き戸だった。そこは……。

「……保健室？」

玉ちゃんが呟く様に答えた。クッシーは御名答、と言わんばかりに頷いた。

「ほけん、室……？」

訳も分らず、玉ちゃんの言った事を復唱するウズメ。二二ギは二人には目もくれず、ただ引き戸を凝視していた。

「そう、保健室。だって、ほら。此処なら替えの下着とか有るだろうしさ」

と、クッシーがウズメを見つつ得意気に答えた。

「……………」

しかし当の本人は、強張った表情で保健室を見つめ、まるで周り

が何も見えていない様だった。それに逸早く気づいた二二ギが、ウズメの身体を軽く突き、やっと我に帰る程だった。

「あっ、御心遣い感謝致します、くっしー様、玉ちゃん様……」

「う、ううん。気にしないで、困った時はお互いさまでしょ？」

少しの間を置いて返ってきた感謝の言葉に、二人は慌てて首を横に振り対応した。

それを見たウズメは二人に向けて軽く礼をし、再び戸の方へと向き直った。その光景を黙認していたクッシーだったが、到頭意を決するのだった。

「……それより、保健室がどうかした？」

「えっ、あの、その、特には……」

クッシーの唐突な質問に狼狽をしながらも、何とか誤魔化しの笑みを返すウズメ。しかし、その表情は誤魔化すどころか、苦笑い丸出しだった。当の本人は必死にやっているのだろうが、結果として相手にバレてしまっているので、水の泡と言うのか。

そして、その「違和感」にクッシーが気づかない訳もなく。クッ

シーに問い詰める絶好の機会を与えてしまったのだった。

「もしかして、ウズメさん達って……」

と、言い掛けたその時。

「もしかして、お二人の居た学校では保健室って呼び方じゃなかったのかな……？」

意外な事に、核心に迫ろうとしたクッシーを遮って話し出したのは玉ちゃんだった。だが、そこにはいつもとは違う玉ちゃんが居た。そう、呆氣に取られる三人の心境など、全く意に介さない玉ちゃんがそこには居た。

（よ、よし。いいぞ、私。このまま、話を膨らませていこう……）

先程まで沈黙続киだった一行。そこに訪れた転機を玉ちゃんは見逃さなかった。

（いつもいつも、夏澄ちゃんが仕切ってくれてるけど、今日は何だか難しいみたいだし、私も見てるだけじゃなくて、何とかしなくち

や……！)

玉ちゃんが意外な行動に打って出た理由はとても素晴らしのだが、それ以上に絶妙なタイミングでクツシーの邪魔をしてしまった事には……恐らく気づいていないのだろう。

不幸中の幸いで危機を脱したウズメ達でさえも、目を丸くしたまま返答を忘れて立ち尽くしていた。

「??? え、えーっと。私、何か変なこと言いましたか……?」

玉ちゃんが漸く場の雰囲気^{ふんいき}を察した頃には、既にクツシーは次なる手を思案していた。それはつまるところ彼女達の素性を暴く為の策を、だった。

ともあれ、この場を收拾しない事には何も始まらない、いや何も始められないので、とりあえずクツシーは玉ちゃんの切り出した話を終わらせる事に専念するのだった。

「そんな訳ないじゃん、玉ちゃん。ね、二人とも?」

と、固まっただままの二人に話題を振るクツシー。そしてそれに応じたのはウズメではなく、さっきからずっと黙っていた二ニギだった。クツシーの振りに答えようとしたウズメを、手で制して二ニギが一歩前に出る。

「その通りじゃ。私達の所も保健室は保健室じゃ。多少、戸の造りが違うだけで名は同じじゃ」

顔に薄い笑みを浮かべながら、極めて冷静な口調で返す二ニギ。その言動から彼女の本心を察する事は常人では不可能に等しい。

「そ、そうですよね……ごめんなさい」

故に、玉ちゃんは二ニギがどのような感情を抱きながら答えたかなど知る由も無かった。だが、それは知らなくて良かったと言えるだろう。

そもそも、彼女が人間などに興味を持つ筈も無いのだから……。気づけば、再び沈黙が流れていた。この重い空気の中、誰が話を切り出すのか。いや、それは愚問だったか。そんなのが出来るのはもう一人しかない。

「ま、まあ、とりあえず、中に入ろつか？」

恐る恐る提案をしたのは、他でもないクッシーだった。やはり彼女にはこういった仕切り役がピッタリだと、玉ちゃんは深々と実感するのだった。

「そうじゃな。このまま立ち話というのも、馬鹿らしいからの」

と、言いながらウズメの方へ目配せする二二ギ。

「はい、私も相違ないです」

「……わ、私も賛成です」

全員の意見も出揃ったので、一行はクッシーを先頭に保健室へと消えていくのだった。

木花開耶物語6話 A（後書き）

一回で載せる量が半端ないので、今回から小まめに載せていこうかと思っています。

あと、最近になって書きやすい書き方、読みやすい書き方っぽいモノが何となく自分の中で確立してきたので、作風が少々変わっていくかもしれません。その辺りは何卒ご容赦ください。

最後に読んで頂きありがとうございました。次回も是非読んでください。

木花開耶物語6話 B（前書き）

前回同様、少なめで載せます。
量の割に時間が掛かり過ぎました……。
宜しければ、読んで見てください。

木花開耶物語 6話 B

白い壁、白い仕切り、白いベッド、およそ視界に入る物が「白」で統一された空間・保健室。尤も、黒い保健室など正常な施設なら却下されて当然の代物だが。

「ここが、ほけんしつ……ですか？」

と、言いながらもウズメは、既に並べてある物に目を奪われていた。何やらヤバそうな液体の陳列棚コレクションやら、ゴミ箱から溢れ出ている大量の血が付着した包帯やら、乱雑に置かれた個人情報カルテの山とか。ごく普通の学校では見られない光景があつたのは明白だった。

しかし、それを見てクツシーと玉ちゃんが驚かない点から察するに、これはこれでいつも通りの光景なのだろう。それ程までに異常が普遍化している空間なのだ、ここは。

「あら、どちら様？」

保健室の奥・準備室、とプレートに書かれた扉から誰かが顔を覗かせていた。この部屋の荒れ様と不吉な予感から二ニギは瞬時に臨戦態勢へと移り、ウズメへと視線を送る。が、ウズメは部屋の物色に夢中になって突然の来訪者など、存在すら気付いていない模様だった。

「まだ授業中じゃなかったかしら？　ん？　それとも、もう昼休みだったかしら？」

と、訳の分からぬ事を呟きながら扉から出て来た。

（この部屋の有り様、この者の仕業か、それとも……）

白衣を羽織ったその人物は、平然とした物腰でクツシーと玉ちゃんの前までやって来た。

どうやら、この人にはクツシー達の姿が認識できている様で、二人は先程から抱き続けていた不安と緊張から解放され、安堵の溜め息を吐いた。

「はあ、良かった。私達のこと見えてるみたい」

そして、クツシーは言う。

「あつ、そうだ。先生、紹介しますね」

（なつ……！ この者、先生じゃと!?）

二二ギの驚きなどいざ知らず、クツシーは言葉を続けた。

「彼女達は本日付で転校してきた天野 ウズメさんと、日高 二二ギさんです。って、先生なら資料とか話とか聞いてますよね」

あははは、と笑い合うクツシーと玉ちゃんから先生と呼ばれた者の視線が自分へと移る気配を二二ギは感じた。そこで一瞬、両者の視線が合う。

その時の二二ギの脳内は困惑で満ちていた事だろう。なぜなら、その者の視線からは何も読み取れなかったからだ。

本来ならば目を合わせた時、その人物の大よその考えや心意というものは、確認できるものだ。だが、目の前のこの人物に関してはそれが適用されなかった。つまり、何を考えているのか、その瞳からは察する事が不可能だった。加えて、言動からは鈍感な印象を与えているが、それさえも真実かどうか、定かではなかった。

しかしながら、二二ギの困惑は瞬く間に確信へと変わった。

（この先生とやら…… 敵、じゃな）

そう、結論付けたのには確かな理由もあった。が、此处で相手の正体を明かすのは、二二ギ達にとっても得策と言えない。今回の様な学校への出入りは今後またいつ必要になるか分からない。そして万が一の場合、二二ギ達の行いが開耶へと返る事も考えられる。つまるところ、二二ギ達は無闇に騒ぎを起こす訳にはいかなかった。そうとなれば、ここでの対応は自ずと決まった。

「先生でしたか、紹介に預かった日高 二二ギです。以後、お見知りおきを」

二二ギは生徒が教師に向けてする対応を完璧にこなした。それは一部の隙もない反撃だった。だが、相手もその程度の事で取り乱す阿呆者ではなかった。

「貴女が日高さんね。資料で見るよりも、ずっと可愛いわ」

間延びした調子の声と、持ち前の無邪気な笑顔で二二ギの反撃を難なく切り返した。

と、ここまでは二二ギも読んでいた。そして、次の手も考えてあった。もしもの時に備えて二重、三重にも張り巡らせた巧みな策などもあった。が、相手はその考えを越える、もしくは避ける様な形で、二二ギを追い詰めようとした。

「ホント、日高さんの肌は綺麗そうですね……」

言いながら先生は、一歩また一歩と距離を縮めていった。無論、それは二二ギとの距離の事だ。当然、当事者である二二ギがその事態に気づかない訳もなかった。しかし、どういう事だろうか、二二ギは一歩も退こうとはしなかった。否、退けなかった。

（この場で接触を拒む、というのは些か生徒らしくない。だからと言つて、敵に無防備な身体を舐め回すように触れられるのも見過ごせん……）

そんな考えが二二ギの頭の中を巡っていた。つまり、如何にして生徒らしく振る舞うか、それが二二ギにとっての課題だった。

だが、迷っている時間は無かった。両者を隔てていた空間は残り数メートル、時間にして二秒あるか、ないかだった。

先生、と呼ばれた者の不気味な笑顔と魔の手が迫ってくる……。

あの間延びした調子の声が囁いている……。

さあ、私と遊びましょう……。

やはり、二二ギは一歩も退かなかった。それどころか、毅然とした態度で応じた。それはつまり、退く必要が無くなったからだった。「何か用かしら？」

先生が二二ギへと伸ばした手、それを掴む別の手。先生は自然な動作で、その手の持ち主へと静かに視線を移す。そこに居たのは……。

「……………天野 ウズメさん」

「瓊瓊杵様へ御用でしたら、まず私を通してからにして頂きたい」
そう、静かに言い放った。その瞳には、入室時の浮ついた気配な

どは微塵も無く、ただ純粋な君主への忠誠だけが宿っていた。

ウズメの要求を了解したのか、先生は伸ばしていた手を退いた。その気を察し、ウズメは掴んでいた手を放し、二人の間を遮るように入った。

「ん？ 何でしょう、初対面ですよ、私達？ どうして、こんなムードに？」

この一部始終を黙認していた部外者達も、そろそろ事のおかしさに気づくと判断したらしく、それなりの対応をし出した。その空気を察し、二二ギ達も流れに身を任せる事にした。要するに、壮大に惚け出したのだった。

「誠に不快だが、お主と同意見じゃ」

生徒のフリに飽きた二二ギは素を出し、先生を罵った。その間もウズメは先生から視線を離す事は無かった。だから、先生もウズメ達への警戒を解く訳にはいかなかった。

沈黙が続いた。先に口火を切ったのは……二二ギだった。

「じゃが、何よりも不愉快なのは……お主のその調子じゃ」

今までの出来事を無かった事にするべく話題を逸らしたものの、生徒が先生を侮辱する構図など、どう考えても一般的でない事態に陥ってしまったのは言うまでもなく、二二ギの知識不足だった。いや、この場合は常識の欠落、と称すべきかもしれない。

「そんな事を言われましても、これが私のチャームポイントみたいなモノですから、それよりも、日高さんの口調の方が私よりもずっとおかしいと思うんですけど」

だが、そんな軽い挑発に乗って、先生も生徒を罵倒するというのは、先生の方にも問題がある。人の器の底が知れる、というか……何とも居た堪れない構図になっていた。

結局のところ、それから詰まらない言い争いは留まる事を知らず続き、最終的に争いの終止符を打ったのはクッシーだった。

「あつ、忘れてた。先生、替えの下着とかってありますか？」

突拍子もないクッシーの発言に一同は言葉を失った。そして、誰

もが思っただろう。

それって、今じゃなきゃダメか、と……

木花開耶物語 6話 B（後書き）

なかなか話が前進しないのは、一重に作者の効率が悪いからですね……すみません。ちなみに、保健室での話はそろそろ終わりですね……。順番的にそろそろ、アイツの登場が……！

そう言えば、近々番外編でも書いてみようかな、って気紛れ起こしたり……。すみません、本編の方にもっと力を入れます。

できれば、感想・批評・レビュー（？）など書いて頂けると、参考になります。よろしく願います。

追加：キャラクター紹介にクッシーが登場しました。是非、一度ご覧になってください。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

木花開耶物語6話 C（前書き）

是非読んでみてください。面白かったら、是非1話から読んでみてください。

もし、すらすら読み終えてしまえましたら、是非感想をください。

批判でも構いません。ココが分かりづらい、とか。これってどういう意味？

何でも構いません。

木花開耶物語 6話 C

「うーん、確かに替えの下着くらいなら有るけど、クツシーちゃん、それ何に使うの？」

先生は、本当にクツシーが何を考えているのか分からなかった。まさか、誰かが下着を穿き忘れて学校に来る、などという発想は咄嗟に浮かばないだろう。

クエスチョンマークを頭上に浮かべて待っている先生、どうやら事情説明を要求しているらしかった。クツシーは苦笑いしながら玉ちゃんを見て、頼りない頷きを貰い、それからウズメの方へと話しているか、尋ねた。

「あの、ウズメさん？ 先生が説明を求めているみたいなんです……話していいかな？」

「構いません」

先程から変わらず臨戦態勢を取ったままのウズメは、クツシーの話は全くと言っていい程、理解していなかった。ただ、いいですか？ と訊かれたので、いいですよ、と反射的に答えただけだった。その光景からは、主君を後ろへと控えた武士の様な心構えが見て取れた。

だが、ウズメのそんな気持ちなどいざ知らず、クツシーは了解を得られたので淡々と事の起こりから現在に至るまでの経緯を事細かに先生に話した。そして、その時のウズメは自分の格好がどれほど恥ずかしいものか知る由も無かった。

数分後……

「……と、いう事があつたんです」

クツシーの数分に渡る状況説明は、補足のしようがないくらいに完璧だった。だが、聞いていた先生は途中から俯いたまま相槌も打たずに居た。その先生が、説明を聞き終えて間もなく、震え出した。「ん？ せ、先生？」

不思議に思った（もしくは心配した）クッシーが先生に近寄ると、先生は急に顔を上げた。

「あはははははははっ……！」

そして、大爆笑した。

「あはは。ごめん、ごめん。でも、あはは。パンツ穿き忘れるとか……何処の常識知らずですか？　って感じですよね。」

と、先生はウズメに謝りながら罵倒した。しかし、ウズメにはパンツという概念がそもそも無い為、どの辺りが常識知らずに当たるのか理解できる筈もなかった。故に、先生の罵倒は罵倒としてウズメには処理されずに済んだ。

「何を仰っているのか理解し兼ねますが、恐らく瓊瓊杵様への暴言に違いありません。如何なさいましょうか、瓊瓊杵様」

「ウズメ、それはお前に対しての……いや、何でもない」

何も悪い事を教えてやる事もないか、と二二ギなりに気を遣った。しかし今回に限っては教えてあげるべきだった、と補足しておこう。「そんな事より、私は疲れた。早々に用を済ませて退散するぞ」

その指示にウズメは静かに頷き、暴言を吐いた先生を見据える。

ウズメは主君である瓊瓊杵に対して、非礼を働いた者を今すぐにも詫びさせたい所存だった。だが、その非礼を浴びた張本人である瓊瓊杵が、その者に詫びさせる必要は無いと判断した。その采配に異を唱えたい訳ではない。ただ、なぜ許したのかが解せなかった。

燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや

これはその時、ウズメの脳内に浮かんだ言葉だった。

それと同時に、ウズメの心にある感情が発生した。自分の仕える主君が大きな者へと成長した嬉しさと、自分とまた遠ざかった事への寂しさだった。

ウズメは複雑な心境に苛まれながらも、主の次なる指示を遂行するのだった。それが彼女の存在する理由であり、彼女にとって唯一の喜び。即ち、それは自分という存在の証明だった。

「で、先生、下着の件ですが……」

「ああ、ごめんね」 可笑しくつてすっかり忘れてたわ」 ちよつと待っててね」

と、足早に準備室へと去って行った。

するとウズメは先生の戻って来る気配が無い事を確認し、薬品の陳列棚へと向かった。そして、何の前触れもなく中を漁り始めた。

「ちよ、ちよつと、ウズメさん！？ 急にどうしたの？」

「案ずるな、元よりこうするのが目的じゃ」

取り乱したクツシーに、ニニギが凜とした声で諭した。クツシーは、至つて冷静な態度で立つニニギの方を振り向き、問い質した。

「ニニギちゃん……それって、どういう意味？」

「言葉通りの意味じゃ。詳しい事情は話せぬが、私の想い人が病にかかつており至急、薬が必要なのじゃ」

つまり、保健室に連れてこられたのは強^{あなが}ち無駄足でもなかった。

むしろ、この世界の全ての薬について調べる手間が省けたというものだ。しかし、それは此処に目当ての「物」があればの話だが……。

「瓊瓊杵様、大変申し訳難いのですが……」

棚を物色していたウズメが、ニニギの前へと報告に戻ってきた。

だが、その表情から察するに吉報でない事は明らかだった。

「構わぬ、申してみろ」

一糸、取り乱す事なくニニギは答えるように促した。

「はい。お探しの「物」ですが、この部屋の棚からは一つも見つかりませんでした」

「そうか……」

ニニギは答えを聞いた途端、小さく溜め息を吐き、少し頭を抱えた。そして、やはり全ての薬を調べぬと駄目か、と呟いた。すると、思いも寄らない言葉が二人の耳に届いた。

「ねえ、それってどんな症状なの？」

声の主はクツシーだった。二人はクツシーが何と言ったのかすぐには理解出来なかった。

少しの間が空き、冷静を装った感じでニニギが返事をした。

「……お主、薬に詳しいのか？」

「ううん。でも、どんな症状が分かれば何の薬が効くか調べられるでしょ？」

全部なんて調べきれないよ、と付け加えて少し微笑むクッシー。その隣で玉ちゃんも一緒になって笑みを零していた。

まだ知り合ったばかりで、お互いの事など全く分かっていないが、彼女達はしっかりと繋がっているようだった。いや、切っ掛けは在ったか。

そうだ、彼女達はもう仲間クラスメイトだったじゃないか……。

「お主を信じてみるかの。まあ、他に良い策も無いしな」

そんな訳で、二ニギの口からこの言葉が出るのを心待ちにしていたウズメが、饒舌に症状を語った。勿論、その病人が開耶である事は伏せた。

果たして、クッシーの診断結果は……？

「んー、強めの風邪って感じかな……？ それなら棚にある風邪薬を飲ませて、安静にしていれば治るんじゃないかな？」

意外な診断結果に二人は茫然となった。

まず、治るという事について。次に、此処にその治す薬が在るという事について。そして、今まで自分達がしてきた愚行について。既に語る言葉も無かった。

その沈黙を了解、と勘違いして受け取った玉ちゃんが、棚より薬を取り出して二人の前へと差し出した。その光景を臆気に見つめながら、二ニギは小さい溜め息を漏らした。

「ふう、嘆いて居っても始まらぬか……。済まない、これは有り難く頂戴する」

「御二人共、この度は本当に有難う御座いました。それでは、失礼します」

簡単に礼を交わし、転校生二人は足早に出ていこうとした。それというのも……。

「あゝっ、あった。あったわよ」

準備室から先生の声が聞こえたからに他ならない。尤も、クツシーと玉ちゃんは二人が早く薬を持ち帰りたいのだと勘違いして、特に止めるような真似はしなかった。

先生との第一次接触を何とか免れた二人だったが、第二次接触も上手くいくとは限らない為、この場は一旦退く事にしたのだった。そして、そうと決まれば二人にこの学校への未練は無かった。

しかし、それは二ニギとウズメは、という一方的な話だった……。
「あつ。そう言えば、二ニギちゃん」

と、クツシーに二ニギは出口の前で呼び止められた。それを先生が出てきそうな気配を察したウズメが、丁重に断ろうとした。だが、全てを知った上で二ニギがそれを制した。

「良い。お主だけ先に行け」

「しかし、瓊瓊杵様！」

当然、敵地の真ん中に主君を置いていく道理などある訳も無かった。即座に異を唱えたウズメへと、二ニギの異論を許さない視線が飛ぶ……筈だった。しかし、その時はやってこなかった。その代わりに、ウズメへとある「物」が飛んだ。

「お主はそれを持って先に行け。私もすぐ後を追う」

それは玉ちゃんより二ニギに渡された薬だった。その意外な飛来物にウズメは一瞬、落としそうになったが何とか受け取った。そして、薬を一心に見つめた。そこにある主君の意図を汲み取る為に……。

果たして、ウズメは二ニギのあの行為から何を読み、如何すべきと判断したのか。それを知る由は無いが、唯ひとつ確かな事はウズメが名残惜しそうに保健室を去ったという事だけだった。

ウズメが完全に去ったのを確認してから、二ニギは先程とは打って変わった調子で話を始めた。

「ほれ、従者は下がらせたぞ。言い残して置きたい事が在れば、早急に申すがよい」

突発的な態度の急変だったが、クツシーは特に驚いた素振りは見

せずに用件を告げた。

「……教室で言ってた聞きたい事、っていうのはもういいの？」

二二ギはクツシーを一瞥^{いちへつ}し、短い間を空けてから言葉を返した。

「お主がそれで良いと申すのであれば、此方も無理強いはせん」

「えっ、それって」

間髪を入れずにクツシーが問い返そうとしたが、既に二二ギは次の言葉を発していた。

「じゃがな、お主とはいずれまた会う事になる。絶対に、な」

そう言い放つと、二二ギは振り返ることなく保健室を出て行った。まるで最後の件は無かつたかのような、その振る舞いにクツシーと玉ちゃんは呼び止める事すら忘れて立ち尽くした。

それから程無くして、何も知らない先生が準備室より出て来た。

「あつたわよ」 見つけるのに苦労しちゃった」 はい、ウズメさん用の……ってウズメさんは？」

その間延びした調子の声を聞いて、やっと二人は我に返った。それと同時に、二二ギの残した意味深な言葉が脳裏に蘇る。

お主とはいずれまた会う事になる。絶対に、な

（絶対、かあ……。まあ、明日も学校だし……）

クツシーはそんな事を考えながら、先生の厚意が無駄になってしまった事を二人に代わり謝罪するのだった。

木花開耶物語6話 C（後書き）

最近、下ネタが続きますがこれ限で当分無いかと思われま
す。そろそろ、戦闘パートか……。表現の仕方が難しんだよな
……。とりあえず、次の投稿までまた時間がかかります、スミマ
セン。

木花開耶物語6話 D（前書き）

何とか戦闘パートを避けた（；――）

と言う訳で、少々面白みに欠けるかもしれませんが、いつもの事なのでお見逃しください（<―>）

最近、顔文字を覚えまして多用しています。鬱陶しかったり、間違ってたらずミマセン

それでは、是非、最後まで読んで下さい（^^）

木花開耶物語 6話 D

二XX六年六月九日 夕方

太陽が西に傾き、そろそろ今日の終わりが近づく時間帯。相も変わらずゴシッククロリータな服に身を包んだ瓊瓊杵は、拠点への帰路を上機嫌で歩いていた。その後ろを飾り気の無い着物を纏った^{まと}細女^{ウスメ}が、保護者の面持ちで付いていた。

「瓊瓊杵様、そんなに浮かれていては転んでしまいますよ」

「細女よ、これを浮かれずに居られるものか」

そう言つて、瓊瓊杵は道の角まで走つて行つてしまった。その時の表情は、まるで興奮を隠しきれない子供の様だった。そんな瓊瓊杵の仕草に、細女はつい笑みを零してしまった。

（瓊瓊杵様つたら、本当に嬉しかったのですね……）

そんな事を考えながら、細女は先に曲がつて行つた瓊瓊杵の後をゆっくりと追つた。そして丁度、細女が曲がり角を曲がると、先を行つていた筈の瓊瓊杵が静かに待ち構えて居た。

しかし、それはとてもおかしい光景だった。確かに瓊瓊杵はそこに居たが、身体の向きが細女の方では無く、進行方向を向いたままだった。それはまるで進むのを躊躇^{ためら}う様な、そんな印象を細女は受けた。

「どうされました、瓊瓊杵様？」

「……………」

細女の問い掛けに瓊瓊杵は沈黙を貫いた。そんな瓊瓊杵には先程の浮ついた気配は既に無かった。それを即座に察した細女も静かに思考を切り替えた。

「……………どちらの方角に？」

氷の様な鋭く冷めた低い口調で、細女は瓊瓊杵の背に尋ねた。

「……………」

しかし瓊瓊杵はまた何も答えなかった。そこで細女は、完全に主

の意図が掴めなくなってしまった。

（敵襲では、ない？ それでは一体……？）

鈿女は思考を凝らし、何とか瓊瓊杵の考えに追い付こうとした。

しかし、その思考は主の口より発せられた意味深な言葉によって中断させられた。

「……気付かぬか、鈿女？」

待ち望んだ返答は、角を曲がる前とは一八〇度変わった低い声だった。

「はい？ それはどういった意味で御座いましょうか、瓊瓊杵様？」

だが、鈿女には瓊瓊杵の言った言葉の意味が、冗談や形式的作法などを抜いて本当に理解出来なかった。そんな鈿女に対し、瓊瓊杵は呆れて溜め息を吐きたいところだったが、事態は急を要した為、小言や説教は省き、用件だけを簡潔に伝えた。

「敵じゃ。方角は分かん」

瓊瓊杵の唐突な現状報告を鈿女は静かに受け入れた。そして瓊瓊杵に分からなかった敵の位置を知るべく、神経を研ぎ澄ました。しかし、敵の気配どころか自分達以外の気配さえも察知できなかった。すると、瓊瓊杵が付け加えるようにしてさらにと意外な言葉を口にした。

「あと、分かっているのは 此方こなたの歩が悪すぎるという事だけじゃ」

この言葉を聞いた鈿女は、大変驚いた。敵の位置が分からない事よりも、瓊瓊杵が弱気な発言をする事の方が、何よりも増して鈿女を驚愕させたのだった。

（瓊瓊杵様、如何いかにしてしまったでしょう？ こんな瓊瓊杵様、見た事が無い……）

その気持ちを言葉にこそしなかったが、鈿女の内心は相当な荒れ模様だった。今までに無いケースにどんな対応をすべきなのか、何と声を掛ければ良いのか、今の自分に解決できる問題なのか。鈿女の頭の中では、そんな疑問や不安が一斉に答えを要求するので、混

乱状態となっていました。

これはオーバーなりアクション、と思うかもしれないが今までの瓊瓊杵の行動を振り返ってほしい。開耶と出会い頭にキスをしたり、駅の一件では怪我をしていながらも敵に単身で挑んだり、そして今回の堂々とした学校潜入。この様な行いから、彼女が大胆不敵且つ思慮に欠けている事は明白だ。そして、そんな彼女だからこそ敵の姿が見えない程度で臆したり、劣勢だと計ったりする筈は無い。それどころか彼女の場合、周りの建物を風潰しに破壊しながら敵を焙り出す、という強行にさえ奔らないとは言いい切れない。

しかし、現実とは違った。彼女の顔に勝利の色は無く、ただ追い詰められた焦りの色だけが窺えた。こんな彼女の顔を細女は見た事があるだろうか？ 答えは否、断じて否だ。彼女の常に傍若無人な言動に細女がどれ程困らされた事か。それも考慮すれば、細女の乱れようも納得がいくだろう。

少しの間が経ち、冷静さを取り戻した細女はある事に気がついた。「瓊瓊杵様、少し宜しいでしょうか？」

「……何じゃ？」

「瓊瓊杵様の仰った通り、敵の気配はまるで掴めませんでした。しかしながら、この程度ならば充分に対処できると存じます、が……」

そう、細女の気が付いた事とは、敵の正体や所在が分からない時の正攻法だった。尤もらしい正論を言っただけの細女に、瓊瓊杵の思いがけない言葉が返された。

「何じゃ、まだ気付いて居らなかったのか？」

それは、角を曲がってから初めて言われた言葉の本当の意味だった。そして当然、細女は今回も前回と同様、本質的な意味を理解するには及ばなかった。それは偏に彼女の理解力が悪い訳でなく、瓊瓊杵の説明省略にも非は在った。そう悟ったのか、瓊瓊杵は溜め息混じりに省いた説明を語るのだった。

「はあ、良いか？ 今、私達は敵の手中に居るような状態じゃ。差

し詰め、敵の作った空間、もしくは世界そのものを創り変えたのか……まあ、そんな中に私達は居る。いつからだと思う？　そう、あの角じゃ。アレが異界の入り口だったのじゃ」

突然過ぎる暴露に思考が追いつかないなりに、細女は少しずつ理解していった。

まず、敵の確信的存在。今から何が起きても不思議では無い、という覚悟を胸に抱く。

次に、敵の罠に嵌った事。^{はま}しかも、前に行く瓊瓊杵だけならまだしも、自分まで一緒に嵌ってしまうという失態に弁明の言葉も無かった。

最後に、敵の目的が確実に自分達である事。もし、自分達がどういう存在か知っているのなら即刻、罠を解き逃がす筈だ。間違いない、こんな小物な参加者に引けをとる瓊瓊杵様ではない。返り討ちに遭うのは目に見えている。それを態々《わざわざ》、沢山いる参加者の中で罠まで張って待ち伏せをするくらいなのだから、相当な恨みが因縁か……、それとも相当な馬鹿が無鉄砲なのか。何にせよ、此方の素性を知った上で挑んで来ていると見受けられた。

すると、ある疑問が細女の頭に浮かんだ。

「瓊瓊杵様、少し宜しいでしょうか？」

全く同じフレーズで始まる会話。聞き飽きたかの様に瓊瓊杵は、何じやと返した。

「失礼ながら、瓊瓊杵様は此方に来てから他人様に恨みを買う様な事は致しませんでしたか？」

彼女が疑問に思った事、それは敵がどうやって自分達を知ったかだった。そして細女は（瓊瓊杵に関してのみ）恨みを買う以外に狙われる理由は無いと判断したらしい。

当然の如く、そんな事を尋ねられて快く思う筈は無かった。

「細女よ。もしやお主、私が誰かに何か良からぬ事をして、こんな目に遭う羽目になった、と思おて居るのか？」^{おも}

「い、いえ、滅相も御座いませぬ。今までの失言、どうかお許しく

ださい」

瓊瓊杵の不機嫌なオーラを感じ取った鈿女は、その場にすぐ膝をつき頭を下げて詫びた。しかし、その程度の事で機嫌を直す瓊瓊杵ではなかった。

「ほおう、今までの失言を許せと……？　そうじゃな、お主からの非礼は今日だけでも三つ程在るしの。その全部は流石に許せんな」
「はい？」

鈿女の口から間の抜けた声が漏れた。それは言うまでもなく、瓊瓊杵の言った三つの非礼の内、二つが浮かばなかったからではなく、予想だになかった返事だったからだ。今回の瓊瓊杵の発言は常識的な判断から推し量るに、許しを乞う相手に対して使うものでは無かった。けれども、相手は瓊瓊杵だ。常識云々《うんぬん》が通じる相手では無い。それは誰よりも鈿女が理解している事だった。

「あの、その……三つの非礼とは一体……」

「鈿女よ、誰が発言を許した？」

「も、申し訳御座いませんでした！」

「誰が謝罪を許した？」

「……………」

この分では、溜め息一つ吐くのにさえも彼女の許しが必要になりそうだった。

しかし現状とは裏腹に、鈿女は内心で胸を撫で下ろしていた。

（……瓊瓊杵様、いつも通りの振る舞いに戻りつつあって良かったです）

そう、彼女にとって瓊瓊杵に罵^{ののし}られたり、理不尽な事を要求されたりするのは日常茶飯事であり、弱気で内気で慎重な彼女の方が非日常である。

鈿女がこうなる事を図った訳ではないだろうが、結果として瓊瓊杵のモチベーションを通常時のものに戻せたのは、彼女の功績と言えるだろう。そして、それを無意識に行える鈿女の忠義心の高さをまた物語る出来事だった。尤も、瓊瓊杵に感謝の気持ちなど微塵もな

いのだが、細女もそんな見返りは求めていない。その点において、二人は良いパートナーと言えるだろう。

それから、まるで二人は敵の手中に居るのを忘れたかのように会話を続けた。それを見て不快に思う者の存在など気付く筈もなかった。

「ちつ。アイツ等、自分達の置かれてる状況、全く理解してないや。はあ、ム力つくなあ……」

そう漏らすと監視者は、言った言葉とは真逆な笑みを浮かべた。まるで、面白くなってきた、と言わんばかりの不気味で不敵な笑み。そして次の瞬間……。

ビュユウウー!!

異界内において、異音に等しいその突風の様な音の音源へ、二人は同時に振り向いた。すると、其処には一人の女性が軽く手を挙げて立って居た。そして、女性は言った。

「ハロー、ハロー。単刀直入に訊くけど、アンタハニギハヤヒサマノナニ？」

と、言いながら女性が指差したのは……やはり、瓊瓊杵だった。

木花開耶物語6話 D（後書き）

ここまで読んで頂き、ありがとうございました>m（――）m<
6話は一応これで終わりです。

何かいきなり話が飛んでるような……と思われた方、正解です。話は飛んでいます。しかしミスではありません。続きと言いますが、間の話は番外編という形で掲載する予定です。

7話についてですが、まだ何も手をつけていないので掲載時期は未定です。活動報告やキャラ紹介を通じてお知らせするつもりです。それでは、読んで頂きありがとうございました>m（――）m<

STORY by crow

木花開耶物語7話 PROLOGUEのみ(前書き)

急いで書いたので、誤字・脱字、意味不明な文章・言い回し等々、
あるかもしれません(<|>)

見つけ次第、直します(;|~|)

ご指摘など期待して待つてます\(^o^)/

それでは、是非最後まで読んで下さいね(^-^)

木花開耶物語7話 PROLOGUEのみ

PROLOGUE

????年?月?日 ???

心地良い風が髪を揺らす。

その風に乗って仄かに桜の香りがする。

不意に思う。

暗い、此処は何処だろう……?

そこで漸く自分が目を閉じていた事に気づく。

望むままに目を開けると、世界は桃色と緑色で満たされていた。

地に広がるは果ての見えない草原、天を埋めるのは無数の花びら。

景色に見惚れていると何の前触れもなく、後方から女性の澄んだ

声が問いかけてきた。

「 お目覚めかい? 」

驚いたまま振り向くが、そこに女性の姿は無かった。

在るのは古い木の幹だけだった。

そこに寄り掛かる様に寝ていたらしい。

「 本^ぬ当に、主は寝てばかりだな 」

再び女性の声が響く。

どうやら、幹の反対側に居るらしい。

立ち上がり、女性の元へ行こうとすると……。

「 悪いが、そのまま聞いてくれ…… 」

今にも泣きだしそうな、悲しい声で頼まれた。

だから、無言で腰を下ろした。

「 主は この桜が好きか? 」

問われて初めて、頭上の桜に目を向ける。

つい先程、開いたかの如く桜は満開だった。

散る桜も綺麗だが、咲き誇る桜はその数倍は綺麗だった。

「 やはり好き、か。ならば、妾はもう此処には来ない 」

桜が好きだと、女性が此処に来なくなる……？

一体、どういう理屈なんだ？

訊き返そうとしたが、先に女性が喋り出したので聞く事にした。

「なあ、主は妾わらわの事をどの程度知っておる？ 恐らく、妾が主について知っている事よりは少ないじゃろうな。どうせ主の事じゃ、先日教えた妾の名も忘れておるじゃろう？」

そこで女性の言葉は一旦止んだ。

その代わりに、何かを削る様な音が続いた。

その音が途絶えると、再び女性の声がした。

「主が妾を忘れぬよう、此処に、主の好きなこの桜に妾の名を刻んだ。妾が去った後、見てくれ。そして、忘れないでくれ……主は一人じゃない」

また、あの声。

今にも泣き出しそうな、悲しみを堪える様な、苦悶の響き。

手を伸ばせば、届く所にきつと居る。

その手を取って、抱きしめたい。

そして、たった一言、その一言で、この人の悲しみを消し去れる。

しかし、その行動も言葉も出て来なかった。

否、もう遅かった。

先に沈黙を破ったのは女性で、紡いだのは別れの言葉だった。

「去らば、愛しき」

そこで、僕は夢から覚めた。

二〇〇六年六月九日 自室

時刻は午後五時を過ぎようとしていた。寝起きの曖昧な記憶を辿るが、学校に行った覚えが無い。でも、玄関を出た覚えはある。今朝から夕方までの記憶がキレイさっぱり抜け落ちていた。

（幻覚の次は記憶障害か……。クッシー達にまた心配かけちゃうな……）

ぐぎゅううう

すると、腹の虫が鳴いた。とりあえず、空腹が気になったのでベツドから出て食卓へと向かった。その途中、服が制服から私服に替わっている事に気づいた。

（あれ？ 元々、学校に行く気が無かったのか……？）

そして、もう一つ。頭に包帯も巻かれていた。そこを手で触れると、少し痛んだ。すると、その拍子に何かが頭の中に浮かんた。

（あれは……に、二二ギ……？）

深い霧の中に一つの人影が見えた。背丈、格好、そのシルエットから連想される少女は、先日出会った二二ギで間違いなかった。

言いよつた無い不安が、ふと頭を過ぎる。将又、さっき見た夢のせいか。自分と彼女があんな別れ方をするかもしれない。そんな根拠の無い恐怖が僕を衝き動かした。

（今度は、今度こそは僕が先に動くんだ……！）

玄関を飛び出し、全力で走った。彼女と初めて出会った場所、住宅街跡へ。

木花開耶物語7話 PROLOGUEのみ（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございました。

どうでしたか？

ミステリアスな展開になってしまいましたが、伏線回収はしっかりしますよ（^^）

本編の方ですが、内容もネームも現在絶賛あやふや中なので、掲載は未定です（+o+）

それでは次回も是非読んで下さい。 STORY by crow

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4806u/>

木花開耶物語

2011年12月27日21時50分発行